下伊那郡鼎町天伯A遺跡

——縄文中期集落址·方形周溝墓·古墳——

昭和50年度

長野県下伊那郡鼎町教育委員会

序

このたび、鼎町では、町立保育所の設置を計画し、その用地を天伯A遺跡・天伯古墳のある地域に求めざるを得ないことになった。

この地域は遺跡が多く、すでに先年、中央道開通のために山岸遺跡が発掘され、たまたま今年は、その隣地である天伯B遺跡が、やはり中央道開通のため、中央道遺跡調査会によって、発掘調査が進められていた。

保育所の予定地である天伯A遺跡は、すでに荒廃されていて、調査の価値がないのではないかという声もありました。しかし、県登録もされており、実地踏査していただいた。今村善興県教育委員会指導主事の指導助言もあり、行政が進んで文化財の保護の範を示さなければ、文化財や自然破壊はますます進行していくだろうという、社会的責任と保護の重要性に鑑み、鼎町教育委員会の直営事業として、発掘調査を行い、記録保存に努めることにした。

調査の結果は、この報告書にみられるように、当初の一般の予想に反して、極めて多くの住居址と土器類の発見をみるとともに、学術上も貴重な資料が得られたことは、この事業の成果のきわめて大きいことを思い感激にたえない。

この調査にあたっては、隣地の天伯B遺跡発掘を進められていた、中央道遺跡調査会の絶大な御指導と御協力をいただいた。とくに今村善興先生・遮那藤麻呂先生・今村正次先生・片桐孝男先生には、休日を返上して、献身的な御協力をいただいたことは、感謝にたえない。

また、今回の発掘調査にあたって、直接作業にあたっていただいた切石地区の方方や役員各位、下伊那教育会考古学委員会、鼎中学校郷土クラブの生徒諸君など多くの関係された皆さんに、深く敬意を表し、厚く御礼申しあげます。

昭和50年3月20日

長野県下伊那郡鼎町教育委員会教育長　下　島　　節

例　　言

1　本調査は鼎町教育委員会が直営事業として行ったものである。

2　本書は鼎町立保育園建設に伴う天伯古墳及び天伯Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

3　本書は報告書作成に制限があり、調査結果については充分な検討がとれなかったため、調査によって検出された遺構・遺物などをできうる限り図示することに重点をおいて編集した。

4　住居址出土の土器拓本は紙数の関係よりはぶかざるをえなかったが、その他の遺物はできるだけ図示してある。

5　遺構の整図は片桐孝男、土器拓本は今村正次、土器実測は遮那が担当し、石器の実測は片桐、整図は遮那が担当した。

6　土器の復元は中央道調査団副沢幸一氏を煩わした。

7　遺跡の調査は主として今村・遮那が分担した。

8　編集は遮那があたった。

9　出土遺物及び図面類は鼎町教育委員会に保存・管理されている。

10　遺構・遺物の実測図の縮尺については図示してある。

目　　次

序
例　言
目　次
Ⅰ　鼎町の概況…… 1
1．鼎町の環境…… 1
2．鼎町の遺跡…… 2
Ⅱ　調査結果…… 6
1．天伯Ａ遺跡の遺構と遺物…… 6
2．縄文時代早期の遺物…… 6
3．縄文時代中期の遺構と遺物…… 6
4．弥生時代の遺構…… 13
5．古墳時代の遺構と遺物…… 14
6．遺構外出土遺物…… 15
Ⅲ　まとめ…… 16
調査組織…… 17
おわりに…… 18

挿図目次

第１図　天伯Ａ遺跡遺構配置図及び住居址床面高低表…… 19
第２図　天伯Ａ遺跡１号・２号・３号住居址実測図…… 20
第３図　天伯Ａ遺跡４号・５号住居址実測図…… 21
第４図　天伯Ａ遺跡６号・７号住居址実測図…… 22
第５図　天伯Ａ遺跡８号・９号・10号住居址実測図…… 23
第６図　天伯Ａ遺跡11号・12号・13号・14号住居址実測図…… 24
第７図　天伯Ａ遺跡15号・16号住居址実測図…… 25
第８図　天伯Ａ遺跡17号・18号住居址実測図…… 26
第９図　天伯Ａ遺跡土壙１号～19号実測図…… 27
第10図　天伯Ａ遺跡方形周溝墓実測図…… 28
第11図　天伯Ａ遺跡１号墳・２号墳実測図…… 29
第12図　天伯Ａ遺跡１号～３号住居址出土土器実測図…… 30
第13図　天伯Ａ遺跡３号住居址出土土器実測図…… 31
第14図　天伯Ａ遺跡５号～７号住居址出土土器実測図…… 32
第15図　天伯Ａ遺跡９号～13号・15住居址出土土器実測図…… 33
第16図　天伯Ａ遺跡16号・18号住居址及び天伯１号墳出土土器実測図…… 34
第17図　天伯Ａ遺跡出土土器拓影…… 35
第18図　天伯Ａ遺跡出土土器拓影…… 36
第19図　天伯Ａ遺跡出土土器拓影…… 37
第20図　天伯Ａ遺跡出土土器拓影…… 38
第21図　天伯Ａ遺跡出土土器拓影…… 39
第22図　天伯Ａ遺跡出土土器拓影…… 40
第23図　天伯Ａ遺跡１号・２号住居址出土石器実測図…… 41

第24図　天伯Ａ遺跡３号・４号・５号住居址出土石器実測図…… 42
第25図　天伯Ａ遺跡５号・６号住居址出土石器実測図…… 43
第26図　天伯Ａ遺跡６号・７号住居址出土石器実測図…… 44
第27図　天伯Ａ遺跡７号住居址出土石器実測図…… 45
第28図　天伯Ａ遺跡８号・９号・10号住居址出土石器実測図…… 46
第29図　天伯Ａ遺跡10号・11号住居址出土石器実測図…… 47
第30図　天伯Ａ遺跡13号住居址出土石器実測図…… 48
第31図　天伯Ａ遺跡15号・16号住居址出土石器実測図…… 49
第32図　天伯Ａ遺跡16号・17号住居址出土石器実測図…… 50
第33図　天伯Ａ遺跡17号・18号住居址出土石器実測図…… 51
第34図　天伯Ａ遺跡19号住居址、土壙出土石器実測図…… 52
第35図　天伯Ａ遺跡遺構外出土石器実測図…… 53
第36図　天伯Ａ遺跡遺構外出土石器実測図…… 54
第37図　天伯Ａ遺跡遺構外出土石器実測図…… 55
第38図　天伯Ａ遺跡遺構外出土石器実測図…… 56
第39図　天伯Ａ遺跡出土土偶実測図…… 57
第40図　天伯Ａ遺跡出土土製品、石製品実測図…… 58
第41図　天伯Ａ遺跡出土土製円板拓影…… 59
第42図　天伯Ａ遺跡出土石器実測図…… 60

図版目次

図版１　天伯Ａ遺跡遠景、１号・２号・３号住居址、出土遺物…… 61
図版２　天伯Ａ遺跡４号・５号住居址、出土遺物…… 62
図版３　天伯Ａ遺跡５号～11号住居址、出土遺物…… 63
図版４　天伯Ａ遺跡７号～10号住居址、出土遺物…… 64
図版５　天伯Ａ遺跡11号～13号住居址…… 65
図版６　天伯Ａ遺跡15号・16号住居址、出土遺物…… 66
図版７　天伯Ａ遺跡17号・18号住居址、出土遺物…… 67
図版８　天伯Ａ遺跡方形周溝墓…… 68
図版９　天伯Ａ遺跡１号墳・２号墳…… 69
図版10　天伯Ａ遺跡住居址群・調査スナップ…… 70

表目次

第１表　天伯Ａ遺跡土壙計測表…… 5
第２表　天伯Ａ遺跡遺構別出土石器一覧表…… 5

Ⅰ．鼎町の概況

１．鼎町の環境

鼎町は、長野県の南部地域、下伊那郡のほぼ中央にあり、天竜川流域飯田盆地の中心旧飯田市と、飯田松川（以下松川という）をはさんで南隣している。松川の氾濫原である沖積地上の切石下段・上茶屋・中平・西鼎・東鼎、この上段に上山・切石段丘、さらにこの上に矢高原・名古熊原・一色原と各段丘面が続き、飯田市伊賀良の殿岡・北方面へと続いている。町の面積やく6.2㎞、東西は長い所で5.3㎞、南北は長い所で2.9㎞、短い所では0.3㎞で、松川上流の妙琴原公園を頂点とする長三角形状の町で、人口やく12,700人を数える。この地は古くは伊賀良庄の一部に含まれ、中世末は松尾小笠原氏の支配下にあったらしい。江戸時代には山村・一色村・長熊村（名子熊村）の３か村であった。明治３年上村が、上山村、下山村に分離したこともあったが、すぐ復した。明治８年この３か村が合併し鼎村となり、明治14年故あって鼎村と稲井村とに分離したが、明治22年に再び鼎村となった。その後、昭和29年町制施行して、本年で20周年を迎えている。

下伊那郡から上伊那郡にかけて南北に帯状に続く盆地状の大きな低地が伊那谷で、東に伊那山脈、赤石山脈、西に木曽山脈があってその中央部を天竜川が南流している。下伊那郡を地形から大別すると、赤石縦谷・飯田盆地・西部及び南部山地の三地区になっている。飯田盆地は、北は上伊那郡境の松川町から、南は飯田市の南部天竜峡までの細長い盆地で、この盆地の中心は飯田市飯田と鼎町周辺である。伊那谷の南部地域、とくに飯田付近においては、河岸段丘の発達が日本屈指といわれている。この地域の段丘は、新旧やく10段の段丘面に区別されているが、南部地域ほど段丘の数が多く古い段丘と新しい段丘が見られ、天竜川の上流へいくにつれてその数が減り、新しい段丘だけが発達している。もう一つの特長は、赤石・木曽山脈から押し出された扇状地が各所に発達していることである。飯田松川によって形成された上飯田の押洞・正永寺原と伊賀北方・大瀬木の扇状地はその規模が大きい。鼎町の大部分は、段丘・扇状地・松川の氾濫原上に位置すると言えよう。

鼎町は古くから松川に依存することが多かった。松川は木曽山脈念丈岳（2,290m）、安平路山（2,363m）から発し、弁天付近で天竜川に合流する。総延長やく25.8㎞、流域面積99.8㎢あり、古来伊那七谷の一つとされる大支流である。洪積期にこの川の氾濫によって大きな扇状地が形成され、その広さは、北は風越山麓の丸山・羽場・飯田の市街地、南は、鼎町全域はもとより、飯田市伊賀良北方・殿岡・三日市場の一部、さらに飯田市竜丘の駄科・時又・桐林にまで及んでいる。この大扇状地を形成したこの松川は、天竜川の下刻に伴い流路は低下し、かつては自らがつくった扇状地を解析し、側浸食による河岸段丘を形成したものが、飯田台地と鼎町の各段丘面である。この解析も、左右岸によってその差異が目立ち、左岸の

飯田側への浸食がより多く働き、右岸の鼎地域に対しては浸食作用と堆積作用の平衡が保たれ自然堤防をつくる作用が働くため、鼎町の生活立地の良さが生まれている。上位段丘山麓には、松川の名残川と見られる毛賀沢や新川等の動きによる新しい扇状地が形成され、それが現在の伊賀良北方の扇状地である。鼎町の段丘面は、洪積世のローム層を堆積する一色面、名古熊北原面、新期ロームの堆積を欠く矢高原面が中位段丘で、ここから大きな段丘崖によって区別される切石・上山面は沖積台地で砂と粘土を多く含む低位段丘で、やゝ低目の段丘崖によって松川流域沖積低地に接している。湧水も地形の関係から豊富な地域で、切石の西部・西山の山麓から北方段丘崖下、下茶屋の小段丘崖下、上山段丘崖下から矢高原段丘崖下、西鼎の谷川尻等、各所に湿地帯を持ち現在尚相当量の飲料水のほか、工業用水としての利用度が高い。加えるに、松川からの引水の歴史は古く、伊賀良井を基幹とする天王井・男女川井・島田井のほか10数条の井筋が、東西に傾斜地形を利して流れ、水利の恩恵を多分に受ける地域となっている。今回の発掘調査でも用地を横切る２条の用水路は、発掘の障害でもあり、又臼玉発見の水洗いの最適の場でもあった。

参考資料　松島信幸　「下伊那地方の段丘」　（今村）
鼎町誌編纂委員会　「鼎町誌」
鼎町役場　「鼎町の統計」

2．鼎町の遺跡

段丘面と段丘崖に恵まれた鼎町は、地形的に見れば埋文包蔵の多い所と予想される。大正時代の市村咸人の資料（下伊那の先史及び原史時代）によると、山洞・天伯・堂垣外・柳添・北平・萱垣・羽場・宮久保・地蔵面・地蔵堂・矢高原・猿小場遺跡と、10数余の古墳が記載され、この中、一色原、名古熊原の遺跡は相当の広範囲に図示されている。その後採集された遺物によって、現在32か所の埋文包蔵地と、14か所の古墳が確認されているが、一部の遺跡を除いては、調査が余り進んでいない。地域別に概観すると次のとおりである。

切石地籍では、山岸(1)・天伯A(5)・天伯B遺跡(2)が昭和45年度と本年度の発掘調査によって、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代の大集落址の一画が確認され、出土遺物を見ると、先土器時代の石器から、縄文時代は、早期から晩期まで各期、弥生時代・古墳時代・平安時代から中世にいたるまで豊富な資料を得ていることから、各期、広範囲にわたる生活舞台であったことを実証している。古墳についても松川に面する段丘崖上に列状に構築されている事実は、西の伊賀良北方段丘上の古墳群と共に、この地の性格を物語っているもので、今後の調査に期待したい地域であろう。

上山地籍も又恵まれた段丘面で、濃厚な分布が予想されるが、確認されたものは、上の平（24）・堂垣外（25）に過ぎない。日向田地籍で発見した縄文時代の土器・石器や、土師器須恵器はその片りんを示し、その東端、柳添（26）の一部、代田地籍の町道改修時に発見された勝坂式土器完形出土（伴信夫報告）等注目すべき地域である。水田の多い所であるので保存状態は良い所と思う。

中位段丘一色・名古熊面では、10数余の包蔵地が確認されているが、調査報告は少ない。しかし、各所で耕作中に遺物出土の例があり、表面採集も可能であるので、今後詳細調査する必要があろう。飯田バイパス通過予定地を歩いても各所で遺物の表採可能であり、下伊那農業高校実習地や、羽場地籍での出土も多い。

矢高原から八幡原にかけては、水利便の悪さで、遺物散布は少なめと考えられていた。所が、矢高原の長姫高校移転予定地の調査の結果、平安時代の遺物から中世陶器片を相当量採集しており、飯田市毛賀南原遺跡での中世遺構検出例に類似するかも知れない。

中平・下山の下位段丘面では、土師器、須恵器の出土地が何か所か報告されているが、詳しくはわからない。最下段の上茶屋、下茶屋あたりで出土があるかどうか調べてみたいものである。　（今村）

3．天伯発掘余録

1）　縄文土器

私が教師として飯田中学校へ帰って来たとき、それは昭和12年であったが、歴史地理の研究室の棚に、縄文中・後期（今で考えると後期の加曽利ＢII式もあった）の土器がかなり多く並べてあった。土器のひとつひとつに墨で「天伯」と書いてあったので、天伯とはどこであろうかと思って、教頭の北原寛先生におたずねした。歴史とは関係のない北原先生ではあったが、ただちに、「そりゃ切石だと思うが」との返事があった。私は天伯の森へ行って見た。この森は、今回の発掘調査団の後半のテント設営地となった天伯神社のそこであった。その時土器片の小さいものを表面採集したような気がするがはっきりしない。

飯田中学生が天伯の調査したことも、今回の発掘調査で時折聞いたが、それは昭和11年以前のことだけは明かであるが、その正確な位置はどこであったのだろうか。誰が掘ったのであろうか。

2）　天伯神社

今回の調査団休憩所としてご厄介になった天伯神社は、立札によるともとは、沢良木三郎の氏神であったがその後衰えていた。そして、明治15年に切石区のお宮として復活したとある。沢良木三郎のことは、伝承にはあるが正しい史書には載っていないので私は何とも発言できない。九頭竜社は水の神であることは確かである。天伯様は山の神だとあったが、水の神ではないだろうかとは水野都祉生氏の言である。天伯という地名も諸所にあり、天伯神社の数も多いので調べてみたなら面白いことが判りそうな気がする。

3）　夢代

天伯神社社殿の北に若宮松川神社が祀ってある。そこの灯篭は安永４年の作であるが、その竿石に「村中元夢代」と刻まれている。何のことであろうか。私は、昭和15年頃この社が今の喜久水会社近くにあったとき、この銘を見て何の意味かと思い何人かの民俗研究家に聞いてみたが、誰も教えてくれなかった。元夢代とは何であろうか。大方の士のご教示を得たい。ただ道祖神など他村の連中に盗まれた時の弁償として帯代何貫と彫ってあるものがあるとのことなので、夢代は、帯代の誤りかとも思ってみたが、やはりわからない。

4）　蚕玉神社の碑

蚕玉様の碑は、伊那地方の方々にある。その碑の建立の年代を全部調べたなら養蚕業の発展が判りはせぬかと思って調べたことがあったが、そのまま終ってしまった。天伯神社の境内に庚申や金毘羅大権現の碑とともに達筆で書かれた蚕玉大明神の碑がある。安政３年に建てられたものであるから、伊那地方としては古い方に属する。これより古い蚕玉様の碑を探し出していただきたい。

5）　御霊神の碑

切石駅より天伯の発掘現場へ行く道の右側、代田明氏宅の西隣、竹藪を伐り倒した隅に御霊神と刻んだ80cm位の石碑が立っていて、明治18年菊月（９月）、太田氏と刻んである。今日の所有者は熊谷勇氏であると聞いた。下伊那史２巻によると、この古墳を桜瀬古墳と呼び、石室が西南に開口していて、出土遺物として剣や須恵器が出土した由のことが記してある。古墳を発掘したあとには慰霊のために碑の立っていることが多い。明治18年とあるからその年に発掘したのかも知れない。なお、切石にはこのほかに古墳が４基あったようである。

6）　切石の七ツ石

発掘調査の時、松尾金市さんより切石には有名な石が七つあり、それを「七ツ石」と呼ぶと教えられ、休憩所より西に太鼓石・駒の爪石・蛙石・牛若丸の切石の四ツを案内していただいた。太鼓石はたたくと下が空洞になっているのか太鼓のような音を発すると言う。駒の爪石は、３ｍ以上の大石の平に駒の爪あとに見える径30cm位の石の凹みがついていた。蛙石は、側面より見れば手をついた蛙の如く見える。切石の名の起りという石は、真中より二つに割れ（自然のもの）、もう一つ割れ目があり、道の側に横たわっている。昔、義経が弁慶とともにこの道をたどって来た時、道の真中に大きな石が横たわっていたので、弁慶が斧で切りつけたが一部切りこんだのみであった。義経がかわって切ったところ大石が真二つになったと伝えられる。この石を義経の切石と呼び、切石区の地名は、これより起っていると松尾さんの話であった。上記四つの他に、上流旧上飯田村との境に松川の大石があり、中央道の松川陸橋よりやや東に蔦石（つたいし）が、国道に近い方に鬼石があり、全部で７個であるという。　（大沢）

表１　鼎町遺跡古墳一覧

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生時代			土師	須恵	灰釉	中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後					
1	山岸	切石			○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	住居址
2	天伯Ｂ	〃	○			○	○	○				○	○	○		○	〃　祭祀址
3	山の洞	〃					○	○									
4	青木	〃					○					○					
5	天伯Ａ	〃			○	○	○	○				○	○	○	○	○	
6	五輪原	〃											○	○			
7	宮の原	一色					○						○	○			
8	一色	〃					○						○	○			
9	萱垣	上山					○										
10	田井座	名古熊					○							○	○		
11	名古熊八幡	〃					○										
12	羽場	〃					○										
13	宮久保	〃					○										
14	行人塚	〃					○							○			
15	地蔵面	〃					○										
16	地蔵堂	〃　池田					○										
17	農学校付近	稲井					○						○	○			
18	農学校校庭	〃					○							○			
19	北平	名古熊					○										
20	庚申塚	〃											○	○			
21	矢高原	下山					○					○	○	○	○	○	
22	八幡原	〃					○										
23	猿小場	〃												○			
24	上の平	上山					○						○	○			
25	堂垣外	〃					○										
26	柳添	中平					○					○	○				住居址
27	中平上の平	〃											○				
28	黒河内	〃											○	○			
29	乃木坂	〃					○						○				
30	松葉	〃												○			
	巣山	一色															
	六反田																

2　古墳一覧

番号	古墳名	所在地	施設	副葬品	備考
1	天伯　1	切石4885の２	切石　涅槃	直刀、管玉、切子玉、櫛、須恵土師器	49年発掘調査
2	天伯　2	切石4885の２	涅槃	管玉、土師器	〃
3	桜瀬	切石桜瀬4845のロ	横室	剣、須恵器	墳丘残
4	大塚	切石五輪原4854の１	横室	須恵器	
5	切石	切石4678の１	横室	直刀、土師器	
6	宮の原	稲井１ノロの１			墳丘残
7	西の原	稲井西の原594のロ			〃
8	萱垣	上山萱垣1723			
9	大塚（１本松の家）	下山宮下1471の11			墳丘残
10	西の塚（羽場）	稲井羽場1375			
11	行人塚	稲井羽場1427			墳丘残
12	地蔵堂	稲井地蔵堂1689の３			〃　現存
13	鞍骨	下山鞍骨1370	横室、室露出		〃
14	物見塚	名古熊2841		土師器	〃

Ⅱ 調 査 結 果

1．天伯A遺跡の遺構と遺物

天伯A遺跡は、下伊那郡鼎町切石天伯神社周辺部一帯にあたり、松川の河成段丘上に存在する遺跡である。今回の調査は町立保育園建設に伴うものであり、かって郡史に記されている天伯古墳の存在した所でもあるが、かかる古墳は消滅しておりその正確な位置は不明であった。またこの地帯は縄文時代の遺跡地として古くから知られ県遺跡台帳にも登録されている大遺跡であり、鼎町教育委員会ではただちに調査団を組織し、消滅古墳である天伯古墳の正確な位置と規模、縄文時代の遺構などを確認することに主力を注いだのである。その結果、縄文時代住居址20軒、土壙19ヶ所、弥生時代方形周溝墓１基、古墳２基と多くの出土遺物を得たのである。特に新しく古墳１基の存在を知り得た事実は重要視すべき発見であった。今時の調査結果については、充分な分析をしたいと思っていたができなかったので、調査の概要を中心に報告を進めていきたい。

2．縄文時代早期の遺物

天伯神社社殿裏手、調査区北側段丘先端部より押型文土器がわずかに出土している。当初生活址の存在が推定されたため全面発掘を実施したが、かなり撹乱されており遺構の発見はできなかった。押型文土器は、第40図14～17に示すものであり撚糸文土器と山型文土器であり、小破片の中には楕円文も認められ立野遺跡出土の押型文土器と同形式のものである。

3．縄文時代中期の遺構と遺物

ア）　１号住居址（第２図・第12図・第23図・第41図・第42図）

水路及び１号古墳西側周溝によって切断されているが、径約６ｍを計るほぼ円形の竪穴住居址である。炉石はすべて取り除かれているが、かなり大形な炉址であり柱穴も３ヶ所確認できる。南側には埋甕が存在し、埋甕を中心にその両側には床面に接して人頭大の扁平自然石２個が存在する。周溝も東側及び南側は明瞭に認められるが、北側及び西側には部分的に存在している。炉址内部はわずかに焼土が認められ床面は良好である。

遺物　　土器・石器・土製品の出土があり、覆土中からの土器は多量なものである。

土器　　埋甕（第12図１）覆土出土の土器（第12図２）がある。器形を知り得るものはこの２点であるが、埋甕は口縁部の一部と底部近くを欠損するものである。胴部は唐草文が全面に認められ埋甕特有の文様構成を示す。同図２は口縁部に渦巻文を認めるもので、胴部は縄文が全面に施文されている胴部以下を欠損するものである。覆土出土の土器片はこの種のものが多い。

石器　　磨石斧刃部欠損品（23図１）打石斧（23図２～12）敲打器（23図13・14）横刃形石器（23図15～17）がある。石鏃（42図１～３）黒耀石製ドリル（42図４）大形粗製石ヒ（42図５）がある。石鏃１は

安山岩製であり２・３は黒耀石製である。

土製品　　土器片利用の土製円板である。

イ）　２号住居址（第２図・第12図・第23図・第24図・第42図）

西側の大部分は道路下のため調査できなかったが、径約４ｍほどを計る円形の竪穴住居址で２号址の上面に３号住居址が存在する。周溝は認められず柱穴も３本確認されたのみで床面も良好である。住居址の大部分は未調査である。

遺物　（第12図・第23図・第42図）土器・石器の出土がある。

土器　　床面出土（第12図６・７）があり、下伊那地方では類例の少ない土器の一つである。

石器　　打石斧（24図18～21）と小形赤色チャートの石ヒ（42図６）がある。

ウ）　３号住居址（第２図・第12図・第13図・第24図・第41図）

２号住居址上に構築されたものであり、西側の大部分は２号址同様道路下のため調査できなかった。南側床面にはきわめて大形な埋甕が存在し、覆土中からの出土は多量な土器破片が認められた。住居址は径約5.5mを計るものであり主柱穴２本が確認され、床面も良好である。住居址の大部分は未調査である。

遺物　（第12図・第13図・第24図・第41図）土器・石器・土製品が出土している。

土器　　住居址覆土中から出土した土器（第12図３～５）があり、いずれも口縁部に文様帯を集中させている。胴部は沈線を多く施すものである。底部（12図５）は床面出土のものである。埋甕（13図）はきわめて大形なもので口縁部は渦巻文の退化したものであり、胴部は地文に縄文を施文しその上部より複雑な沈線が唐草文状に配されている。

石器　　敲打器（24図１）石斧（24図２・３）この２点は埋甕上面に存在したものである。

土製品　　土器片利用の土製円板（41図６）が出土している。

エ）　４号住居址（第３図・第24図）

本遺跡で数少ない単独住居址であり、南北5.5m×東西５ｍを計る円形の竪穴住居址である。炉址は中央やや北寄りに存在し扁平自然石８個を使用する石囲炉である。床面は良好であり、周溝も壁直下を一周し柱穴10本を数える。南側壁はわずかに張り出しており、この部分は炉に対し南側に位置するものであり、従来埋甕が存在する場所には単なるピットが存在し、この周辺部は張り床の部分が多く認められた。なお炉址南の床面に２個の自然石が認められる。

遺物　（第24図）土器・石器の出土がある。

土器　　土器類は図示してないが、きわめて多量な土器破片の出土がある。主として地方に縄文を施文し沈線を配すものであり、加曽利Ｅ期に比定されるものがその中心を占めている。

石器　　尖頭器（槍先形石器）状石器（24図４）が出土している。最近いくつかの遺跡でこの種のものが注意されており、本遺跡でも２本の出土が知られた。いずれも硬砂岩製のものであり表裏両面ともに磨滅が認められるが、研磨したものではない。打石斧（24図５～９）磨石（24図10）石錘（24図11）横刃形石器（24図12～14）の出土がある。

オ）　5号住居址（第3図・第4図・第24図・第25図・第39図・第41図）土器・石器・土製品がある。

南北5.5×東西5.3mを計るほぼ円形の竪穴住居址であり、新・旧2回の住居が確認されたものである。旧住居址は小規模なものであり、南北4.4m×東西4.3mを計る。柱穴は4本が認められ、炉址の位置は新・旧住居の場合ともに変っていないものと推定された。新しくなってからの住居址は比較的大形な住居になり主柱も6本が認められ、炉址は方形石囲炉である。住居址南側の床面には埋甕が存在し、6号住居址を切断するものである。また柱穴が複数のものが多く、建増・改築を推定されるものである。いずれにせよ本住居址は、なんらかの理由によって建増されたものと考えられる。

遺物　（第4図・第24図・第25図・第39図・第41図）土器・石器・土製品の出土がある。

土器　埋甕（第4図5）でありきわめて大形なものである。口縁部は大波状口縁をなし、胴部は撚糸が施文され沈線が組合される文様構成を示す。底部は穿孔されており、文様帯は口縁部に集中している。この他多量の土器が出土しているが、この種の土器が中心を占めている。

石器　磨石斧（24図15～17）でありいずれも磨石斧と敲打器を兼用するものであり器面には多くの打痕を認められる。刃部は使用痕が認められる。打石斧（24図18、25図1～9）粗製大形石ヒ（25図10）横刃形石器（25図11・12）がある。

カ）　6号住居址（第4図・第14図・第25図・第26図）

西側の一部を道路下に埋めるもので、調査できなかったが、南北6m×東西6mを計る円形の竪穴住居址であり、大形で深い石囲炉が存在する。炉址は正面の炉石が外されているが大形な扁平石を立てて使用してあり、炉石西隅には石棒欠損品と炉址東側床面に炉石に接して石皿の欠損品が置かれていた。この住居址は5号住居址に切断され、さらに7号址と8号址を切断している。周溝は北側では1本、南側では2本が認められ住居址内には8号址の炉址・柱穴が存在する。南側床面には新・旧2つの埋甕が存在し、西側の外部周溝中に底部を穿孔する胴部以上を欠損する小形土器が注意されたが、その性格は不明である。

遺物　（第14図・第25図・第26図）土器・石器が多量に出土している。

土器　埋甕（14図1）は新しい時期の所産であり、旧埋甕は底部のみでかなり破壊されており図示することはできなかった。新埋甕は胴部のみであり、口縁部と底部を欠損するものである。口縁部は渦巻文を配し、胴部は地文に縄文を施こし沈線で複雑に懸垂文を認めるものである。炉址上面に存在した胴部以下を欠損する土器（14図2）があり、これは口縁部に渦巻文を認めるものである。また周溝内より出土した底部穿孔の土器（14図3）である。

石器　打石斧（25図13～18）石皿（25図19・20）で同図19は安山岩製であり、外側には波状の掘込みをもつ文様帯が認められる。磨石（25図21）石棒（25図22）欠損品である。磨石（26図1・3）凹石（26図2）敲打器（26図4）石錘（26図5）横刃形石器（26図6～11）が出土している。

土製品　用途不明品（40図11・12）がありこれと同種のものが新潟県三仏生遺跡で発見されている。

キ）　7号住居址（第4図・第14図・第26図・第27図・第39図・第40図・第41図）

6号住居址東側に存在する南北4.5×東西4.9mを計るほぼ円形の竪穴住居址である。7号址は6号址に切断され、10号址が上部に構築されている。炉址は扁平自然石7個をもつ小形な円形の石囲炉である。主

柱穴は6本で周溝も壁直下を一周しているが東側の一部は不明である。住居址東側には大きな土壙が存在し住居址を切断している。

遺物　（第14図・第26図・第27図・第39図・第40図・第41図）土器・石器・土製品などが出土している。

土器　胴部以上を欠損する土器（14図8）であり住居址覆土上面より出土したもので、住居址とは直接関係ないものである。床面出土の土器（14図6・7・9）があり、同図7・9は口縁部が強く内側に折れ込み波状口縁を示すもので咲畑系土器の流を示すものである。同図6は底部を欠損するが口縁部は無文帯があり、胴部は粘土紐の懸垂文が認められその間を綾杉状の沈線でうめている。

石器　敲打器（26図12）打石斧（26図13～15）磨石斧（27図1）打石斧（27図2～15、17）横刃形石器（27図16～18）敲打器（27図19）石錘（27図20）が出土している。

土製品　土偶胸部半欠品（39図4）土器片利用の土製円板（41図8・9）と土器片利用の土錘（40図6）の出土がある。

ク）　8号住居址（第5図・第28図）

6号住居址によって大部分が切断され、9号住居址が上部に構築されている。また西側は道路下のため未調査である。6号址と9号址の中間部分の床面がわずかに残るものであり、6号址床面に炉址・柱穴の痕跡が認められた。住居址の大きさは約径5.5mほどと推定される。

遺物　（第28図）土器・石器などがわずかに出土している。

土器　土器類はきわめて小量の発見であり正確な時期は不明であるが、6号址と9号址よりも古い時期の所産であることは確実である。

石器　石器類もその量は少ない。磨石斧欠損品（28図1）打石斧（28図2・3）花崗岩製小形石皿（28図4）横刃形石器（28図5・6）が出土している。安山岩製スクレーパー（42図9）がある。

ケ）　9号住居址（第5図・第15図・第28図）

8号住居址上に構築されたもので南北9.3m×東西4.7mを計る竪穴住居址である。また西側の一部が道路下のため未調査である。炉址はかなりくずれ炉石もほとんどはずされているが円形の石囲炉と推定されるものである。主柱穴は4本が確認され、周溝も壁直下に一周している。南側床面には埋甕が存在し、床面も良好である。

遺物　（第15図・第28図）土器・石器の出土がある。

土器　埋甕（15図1）と覆土中から出土した胴部以下を欠損する土器（15図2）が出土している。埋甕は、粘土紐の渦巻文を器面に大きく配し器面は細い沈線が多く認められる。左右に把手が認められるが欠損している。口縁部より底部まで存在するきわめて大形なものである。覆土出土のものは口縁部に退化した渦巻文を配し器面は細い沈線でうめている。

石器　打石斧（28図7・8）石錘（28図9）横刃形石器（28図10）が出土しているが、石器類はきわめて少量である。

コ）　10号住居址（第5図・第15図・第28図・第29図・第39図・第40図・第41図・第42図）

7号址及び11号址の上面に構築されたものであり、南北4.8×東西5mを計る円形の竪穴住居址である。覆土は粘質の黒色土でありきわめて多量の土器・石器が出土している。炉址は不整形な方形石囲炉であり南側の炉石が取りのぞかれている。柱穴は4本が認められ、周溝は存在しない。この住居址は褐色土中に構築されていたものでプランの検出には困難をきわめたが、西側は黄色砂質土を掘り込むものであり明瞭にその落込が確認された。床面はよくない。

遺物　(第15図・第28図・第29図・第39図・第40図・第41図・第42図) 土器・石器・土製品など多量な遺物が出土している。

土器　炉址附近出土のもの(15図3)であり、住居址内から出土したものは、図示した土器と同様なものばかりであり、口縁部に渦巻文を配し地文に縄文をもつものが多い。個体数にすると十数個体分の土器があり、すべて文様構成は統一されている。本集落址の場合もっとも新しい形式に比定されるものであろう。

石器　磨石斧(28図11)打石斧(28図12～20)石錘(28図21)礫器(29図1)横刃形石器(29図2～6)が出土している。石鏃(42図10・11)石ヒ(42図12)の出土がある。

土製品　土偶(39図5・6)でいずれも胸部である。用途不明品で6号住居址より出土したものと同種のもの(40図13)の出土がある。また土器片利用の土製円板(41図10～13)の出土がある。

サ)　11号住居址(第6図・第29図・第41図・第42図)

10号住居址下部に発見されたもので、南側の一部は用地外のため調査できなかった。径約4.8mを計るほぼ円形の竪穴住居址であり、黄色砂質土を掘り込んで構築されたものでその掘り込みも深い。炉址は比較的小形で扁平自然石を使用する石囲炉であるが、西側の炉石は取りのぞかれている。柱穴は5本が確認されたが、おそらく6本と考えられる。周溝も壁直下を一周している。

遺物　(第29図・第41図・第42図) 土器・石器・土製品が出土している。

土器　土器類は図示されていないが、主として咲畑系土器がその主体を占め出土量もきわめて多い。

石器　磨石斧(第29図7～9)磨石(29図10)打石斧(29図11～16)横刃形石器(29図17)石鏃(42図13)は黒耀石製である。

土製品　土器片利用の土製円板(41図14～17)の出土がある。

シ)　12号住居址(第6図)

大部分が用地外のため未調査である。14号住居址を切断しており、おそらく円形の竪穴住居址であろう。調査範囲内では周溝及びピットも不明である。床面も良くないが14号址周溝上や柱穴上を張り床してある関係上、14号址より新しい住居址である。

ス)　13号住居址(第6図・第15図・第30図・第39図・第41図・第42図)

住居址の東側の一部を方形周溝墓西溝によって切断されている。新・旧2つの住居址があり、旧住居址は、南北3.7m×東西3.5mを計る小規模な住居址である。主柱穴4本が存在し周溝も明瞭に認められ、炉の位置も住居址やや北寄りに存在するが、炉址の位置は新・旧ともに変化は認められない。新しい住居址は、南北6m×東西5.75mを計るほぼ円形の竪穴住居址である。主柱穴は6本であり南側入口部と推定される部分には、埋甕が存在する位置に2ヶ所のピットが存在し、さらに主柱穴に接して小ピット2ヶ所も認められる。この住居址はなんらかの理由で建増されたものと考えられるものである。炉址は石囲炉と推定されるが、大部分取りのぞかれている。本集落中最も大きな住居址であり、10号住居址下部に存在するものである。

遺物　(第15図・第30図・第39図・第41図・第42図) 土器・石器・土製品の出土がある。

土器　胴部以下を欠損する咲畑系土器であり胴部は沈線でうめられている(15図4)土器と、住居址覆土上面より出土した口縁部を欠損する中期初頭平出Ⅲ類Aの土器(15図5)があるが、後者は住居址と直接関係ない。土器の出土量はきわめて多く、特に咲畑系土器がその主体を占めている。

石器　打石斧(30図1～7)石錘(30図8～14)礫器(30図15～18)横刃形石器(30図19～23)花崗岩製石皿(30図24)磨石(30図25)の出土があり、黒耀石製石鏃(42図14～16)スクレーパー(42図17)黒耀石製ドリル(42図18・19)石ヒ(42図20)が出土している。石錘の多量出土に注意する必要があろう。

土製品　土偶胴部(39図7)土器片利用の土製円板(41図18～24)が出土している。

セ)　14号住居址(第6図)

大部分が用地外のため未調査であるが、12号住居址によって切断されるものである。調査によっては周溝と柱穴1本が確認されたのみである。この住居址も円形プランの竪穴住居址であろう。また出土土器は少量の咲畑系土器が発見されている。

ソ)　15号住居址(第7図・第15図・第30図・第31図・第41図・第42図)

長楕円形の竪穴住居址で南北4.5m×東西5.3mを計るものでその主軸を東西にもつものである。炉址も東西に長い長方形石囲炉で、炉址中央部に口縁部と底部を欠損する土器が埋め込まれていた。周溝も壁直下に一周しており、柱穴も11本が複雑に認められる。床面も良好であり、東側の壁近くに石棒欠損品が認められた。この住居址も褐色土中に構築されたものであり、プランの検出には困難をきわめた。

遺物　(第15図・第31図・第30図・第41図・第42図) 土器・石器・土製品の出土がある。

土器　床面出土の土器(15図6)と炉址内に埋め込まれていた土器(15図7)があり、出土量はきわめて多い。主に縄文を地文とし沈線で文様を施す形態の土器と、咲畑系土器がその中心を占めるものであり、加曽利E期に比定されるものが大部分である。

石器　打石斧(31図1～6)横刃形石器(31図7～9)があり、黒耀石製石鏃(42図22)黒耀石製ドリル(42図23)小形磨石斧(42図24)が出土している。

土製品　土偶脚部(39図8・9)土器片利用土製円板(41図25・26)が出土している。

タ)　16号住居址(第7図・第16図・第31図・第32図・第40図・第41図・第42図)

不整形な竪穴住居址であり南北5.7m×東西5.1mを計り、北側の一部は方形周溝墓北溝コーナーによって切断されている。周溝墓の調査中この附近より多くの焼土と焼石が注意されており、住居址石囲炉の北側に張り床された落込部が確認され、この内部よりわずかな焼土が認められておる関係より、もう一つの炉址の存在が推定された。本住居址は南側を17号址によって切断され、壁の状態及び柱穴の位置などから

推定すると２つの住居址の存在が考えられる。周溝墓墓域内に存在する石囲炉は、扁平自然石を使用するものであり、その中の一つは花崗岩製の石皿を利用するものであったが取り上げ時、破壊してしまった。本住居址は複数の住居址を考えるべきであろう。

遺物　（第16図・第31図・第32図・第40図・第41図・第42図）土器・石器・土製品の出土がある。

土器　（第16図１・２）ともに周溝墓溝より北側の住居址覆土中より出土したものである。石囲炉に伴う住居址よりも若干古い時期の所産と思われる。中期初頭に比定できよう。また石囲炉に伴う土器は咲畑系土器がその中心を占めきわめて多量な土器が出土している。

石器　磨石斧と敲打器を兼用したもの（31図11）打石斧（31図12～15）尖頭器状石器（31図10）礫器（32図５～７）石錘（32図８・９）磨石（32図10）横刃形石器（32図11～13）があり、そのほか打石斧（32図１～４）黒耀石製スクレーパー（42図25・26）チャート製石ヒ（42図27）が出土している。

土製品　土器片利用の土錘（40図７）土器片利用の土製円板（41図27～30）が出土している。

チ）　17号住居址（第８図・第32図・第33図・第41図）

16号住居址を切断して南側に存在する南北4.2m×東西4.2mのほぼ長楕円形の竪穴住居址である。また東側壁は方形周溝墓の主体部によって切断されている。褐色土を掘り込んで構築された住居址でありその掘込みも深く、炉址は長方形であるが炉石はすべて取りのぞかれている。主柱穴は４本であり、東側及び南側の柱穴附近に２個の大形立石が存在している。床面は良好である。

遺物　（第32図・第33図・第41図）土器・石器・土製品の出土がある。

土器　土器類は多量に出土しているが、すべて破片でありそれらは第10号住居址出土のものと同種であり、加曽利Ｅ期でも比較的新しい時期の所産と推定される。また小形土器（40図１～３）の出土がある。

石器　磨石斧（32図14～16）打石斧（32図17～23、33図１～５）横刃形石器（33図６～10）大形粗製石ヒ（33図16）磨石（33図17・18）敲打器（33図19）が出土している。

土製品　土器片利用の土製円板（41図31～33）が出土している。

ツ）　18号住居址（第８図・第16図・第33図・第34図・第42図）

住居址東側の約半分は水田造成時に破壊されており、正確なプランはつかむことができなかった。炉址は小形自然石を使用する不整形な石囲炉である。床面も悪く、炉址南側には胴部以上を欠損する伏せ甕が存在する。この伏せ甕は床面下に存在するものであり、伏せ甕の穿孔部には蓋器としての敲打器が存在する特殊な事例である。この発見は床面にピット状の落込みが確認されたため掘り下げたことにより注意されたものであり、張り床など特別な施設は認められなかった。

遺物　（第16図・第33図・第34図・第42図）

土器　伏せ甕（16図３）と深鉢形土器底部（16図４）があり、この他図示してないが多くの土器片が出土している。また附近の調査により縄文中期中葉前半に比定される土器も発見されている。

石器　礫器（33図20・21）敲打器（33図22）これは伏せ甕の蓋に利用されていたものである。打石斧（33図23～25）磨石（34図１）大形横刃形石器（34図２）が出土している。黒耀石製石鏃（42図28）が出土している。

テ）　19号住居址（第11図、第34図）

この住居址は東側を天伯１号墳西周溝により切断され、さらに西側は用地外のため大部分が調査できていない。径約４ｍを計る円形の竪穴住居址と推定され、床面は良好であった。この附近からは多くの中期中葉前半の土器が注意されている。第２号住居址と同時期と考えられる。

遺物　（第34図）

土器　図示してないが中期中葉前半の土器である

石器　石錘（34図３）が出土している。

ト）　20号住居址（第11図）

19号住居址の北側に存在するもので、19号址同様東側は天伯１号墳周溝によって切断され、さらに両側は道路下のため大部分が未調査である。径約４ｍを計る円形の竪穴住居址と推定され、出土遺物も周溝内の調査時において、住居址附近より多くの中期中葉前半の土器が注意されている。おそらく２号住居址と同時期の所産と考えられる。

ナ）　土壙（第９図、第34図）

土壙は調査地区全域より発見され、その時期は住居址よりも古い所産と考えられるもの、住居址と同時期と推定されるもの、古墳構築期よりも新しいものなどに分けられる。

（第１表）天伯Ａ遺跡土壙計測表

土壙番号	形態	長径	短径	深さ	出土遺物	備考	土壙番号	形態	短径	長径	深さ	出土遺物	備考
１号	円　形	200cm	200cm	50cm	黄刃形石器		11号	楕円形	125cm	80cm	25cm		底部に石有
２号	楕円形	115	80	20			12号	円　形	100cm	100	45		
３号	長方形		80	25		底部に石有	13号	長方形	140cm	125	50	土製円板	底部に石有
４号	円　形	75	75	30	小型土器底部		14号	長方形	130cm	100	50		
５号	不整長方形	140	100	70	打製石斧・磨石・石錘・石		15号	長方形	200	120	65		底部に石有
６号	楕円形	175	130	50	打石斧・土		16号	長方形	145	75	50		底部に石有
７号	楕円形	115	75	45	石皿		17号	楕円形	130	110	25		底部に石有
８号	長方形	150	90	45	打石斧横刃形石器		18号	円　形	83	83	45	土製円板	
９号						欠番	19号	不整円形	120	110	55		
10号	長方形	115	90	20									

４．弥生時代の遺構

ア）　方形周溝墓（第10図）

約西側半分を調査したのみであり、東側半分は未調査である。墓域は南北14ｍ20×東西約16ｍ程を推定できるものである。南側溝幅210cm、深さ150cm、西溝幅190cm、深さ110cm、北溝幅230cm、深さ160cmを計るものであり、きわめて深いものである。また主体部も大きく幅250cm長さ推定４ｍ、深さ110cmを計るものであ

る。この周溝墓は褐色土より堀り込んで構築するものであり、溝底面は黄色砂質土にまで達しており主体部に落込む土はこの黄色砂質土が認められる。周溝墓溝中や主体部内からは弥生時代の遺物の発見はまったく認められない。下伊那地方では多くの発見例があるが溝の深さは天伯A遺跡の周溝墓ほど深い事例は認められない。主体部直上に黒色土がわずかに認められる事実よりマウンドの存在が推定されるものである。

5．古墳時代の遺構と遺物

1）　天伯古墳

下伊那史第3巻によると、天伯神社裏手の水田中に径9m、高さ2.5m程の円墳が存在し明治20年ころ破壊され、その後水田耕作中に管玉、切子玉などと多数の土器類が発見されている。今回の調査時点ではまったくその位置を知ることができなかったが、調査によって天伯神社社務所西に1基、さらに社殿裏手に1基計2基の古墳が存在した事実が判明した。

ア）　天伯1号墳（第11図）

天伯神社社務所西側に発見された径18mを計る円墳であり、墳丘はまったく認められなかったが、東側及び西側の周溝と石室の痕跡を発見することができた。周溝は東側で幅3.6m、西側で2mを計り周溝内は粘質黒色土が落込んでおり、その上面には葺石が多く落下していた。また周溝は北側では発見できず古墳を一周していたものではない。石室は基底部の痕跡が残るのみで南に開口するもので長さ約10m幅2mと推定されるものであり、南側石室開口部には周溝は認められなかった。石室東側には水田の土手に石室に使用されていたと考えられる自然石約30個程が存在し、かつては大形な横穴式石室が存在したものであろう。

遺物　（第16図、第40図）須恵器、土師器、水晶製切子玉、管玉などが発見されている。

土器　須恵器（16図6、7）かなり大形な須恵器甕であり同図6は底部を欠損するもので器面にはタタキ目が認められる。同図7は頸部以上を欠損する大形な甕で器面は自然釉が認められ、さらに坏形土器が焼成時付着しておりそれを丁寧に取りのぞいた痕跡が認められる。これら2点の須恵器は東側周溝の葺石下部より出土したものである。土師器坏形土器（16図8）は内面黒色処理されており西周溝の北側より出土したものである。また須恵器長頸壺破片3個体分と土師器坏形土器2個体分ほどは、西側周溝南側より出土している。ここより出土した土師器坏は底部近くにわずかな有段をもち、口縁部は大きく外側に開く形態を示し、中央道調査で発見された住居址出土の中に認められるものとであり、いずれも内面は黒色処理されている。石室内より水晶製切子玉（40図9）と西側周溝内より管玉半欠品が出土している。（40図8）

イ）　天伯2号墳

天伯神社社殿裏に存在する径約10m前後の円墳であり、1号墳の北側に存在する。1号墳の西側周溝は2号墳の西側周溝に接するごときにまで接近して作られていた。2号墳東側周溝は水田造成時にかなり消られたらしく幅70cm、深さ約30cm前後が残るのみであった。西側周溝は道路下に伸びており幅1.7m、深さ35cmを計るものである。両古墳ともに南側では周溝が存在しなく、2号墳も石室は南開口と推定されるがその位置は不明である。出土遺物はまったくない。

6．遺構外出土遺物

器台形土器（16図5）と考えられるものであり、第17図から第22図に示した拓影は本遺跡褐色土より出土した土器類でありその出土量は多量なものである。口縁部が波状を呈し口縁部表裏両面に縄文を施し西日本系土器の一群（17図1～17）があり、この種の土器は丹塗りである。船元式土器に比定されるものであろう。これに対し太い竹管文を主体とする土器群（17図18～27）が認められる。平出Ⅲ類Aとされる土器口縁部（17図28～39）の出土も多く、同形式土器口縁部及び胴部（18図1～39、19図1～7）がある。胴部下半のクビレ部周辺に認められる指頭圧痕文を有する部分（19図8～14）がある。さらに2号住居址、19号、20号住居址に伴う中期中葉前半の土器群（19図15～33、20図1～14）がある。また藤内系土器（20図15～26、21図1～32）が認められ、器面には区劃文が明瞭に認めることができ、縄文を施こす（21図22～26）ものも存在する。後期堀の内式土器に比定される一群（22図1～21）がある。ここに示した土器のほかに多くの土器が出土している。住居址出土の土器は主として加曽利E期の土器であり、その中に多くの咲畑系土器の存在が認められている。

石器類は磨石斧（35図5～9）打石斧（35図1、14～21）敲打器（35図4）石皿（35図2）砥石（35図3）横刃形石器（35図10～13）がある。そのほか打石斧（36図1～24、37図1～10）があり、石錘（37図11～19）がある。大形粗製石と（38図1）横刃形石器（38図2～8）磨石（38図9～14）が出土している。

石鏃（42図30、31、33～35）があり、ドリル（42図36）スクレーパー（42図38）異形石器（42図37）石ヒ（42図39）と小形磨石斧の刃部欠損品（42図32）の出土がある。

土製品は土偶胴部（39図10）と土偶頭部（39図11）脚部（39図12）があり、土器片利用の土製円板（40図21～29）がある。この他炭化物としてクリの出土がある。

その他の遺物として灯明皿（40図10）の出土がある。また緑釉陶器、青磁の発見もある。

第2表　天伯A遺跡遺構別出土石器一覧表

住居址番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	褐色土	周溝墓溝内	計
打石斧	17	5	4	7	17	17	37	4	3	32	13	1	14		8	19	27	9			90	12	336
磨石斧	2		1		6	1	2			1	3				1	1	3				4	2	27
敲打器						1	2				1				2		3				2		11
横刃形石器	4			4		10	14	3	1	12	2		8		6	7	8	4			17	2	92
突棒状石器	2						1	1															4
凹石						1																	1
石皿					2	3							1		1								7
磨石				1		3				2			1				3	1			5	2	18
石錘				1	1	1	1		1	2			7			2	5		1		7	1	30
石鏃	4						1			2	1												8
石ヒ	1	1			1												1				1		5
ドリル	1				1																		2
石棒					1	1							1		1								4
スクレーパー					1			1			1												3
尖頭器状石器				1																			1
礫器													4			3		1					8

III．ま　と　め

本遺跡は縄文時代早期から中世にかけての遺物が発見されている。特に縄文時代中期の住居址が多く発見され、しかも加曽利Ｅ期の時期で多くの住居址が切合関係にあり、その土器様相にも注意すべきあり方を示している。調査区においては加曽利Ｅ期を主体とするものであるが、中期初頭期の土器が多く発見されており未調査区には、この時期の住居址が存在するものと推定される。また中央道用地内の調査においては、前期末より中期初頭の土器も発見されており、天伯Ａ遺跡と天伯Ｂ遺跡との間は約150ｍ程はなれているが、この中間にも縄文時代の遺構が存在する可能性が充分考えられる。下伊那における縄文中期特に加曽利Ｅ期の集落址も最近多く発見されており、同時期の住居址群が明瞭に切合関係にあり編年的考察を究明する時期に来つつあると思われる。また中期初頭土器群の天竜川流域におけるあり方にも注目しなくてはならない。天伯Ａ遺跡は集落址のほんの一部を調査したものであり、集落址の複元的考察や土器様相などは、積極的に論ずる事はできないが少なくとも当遺跡の加曽利Ｅ期の時期における土器のあり方より３～４期に分類することが可能と思われる。いずれにせよ当地区における縄文時代の編年的研究は、近年その資料も増加しており近い将来それが達成されることと思う。また本遺跡出土の石器石材は様々なものが認められるが、主として天竜川でそれを容易に求められるものもあり、硬砂岩、砂岩、緑泥岩、などがある。また千枚岩、安山岩などと石皿に使用されている花岡岩、特殊なものでは法来寺系水成岩の出土が認められている。石器類については比較的その出土量は少い。当地方におけるこの時期の住居址からは多量な石器類が出土する例が大部分であるが、本遺跡からはきわめて少量しか出土していない。いかなる生活環境の変化がそこに存在したものか大きな問題となろう。さらに打石斧類にあっては刃部が磨滅しているものが多く認められる。13号住居址からは石錘が多く発見されており、土器片利用の土錘の存在にも注意する必要があろう。こうした生活用具からみると、天竜川の段丘上に存在する遺跡群とは若干そこに変化を認めることができる。

今回の調査で弥生時代後期と推定される方形周溝墓が発見され、中央道用地内の山岸遺跡、天伯Ｂ遺跡で弥生後期の住居址が多く発見されており、集落址の一部が明らかにされている。これらから推定すると周溝墓は集落より西方に位置するものであり、集落と墓址は約100ｍ前後はなれて存在している。また周溝墓は集落よりわずかに高所に存在しており、集落と墓域を考える時注意すべき位置にある。

天伯古墳の存在は以前より知られていたにもかかわらず、その正確な位置や規模は不明であり完全に消滅していた古墳であった。今回の調査ではこの古墳の存在を知る事に主力を注いだのであるが、新らたにもう１基の古墳が存在した事実を知ることができた。これらの古墳はともに周溝を有し、石室が存在する１号墳は比較的大形な円墳であったことが判明し、マウンド上には葺石も存在した事実が確認されたのである。２号墳は１号墳よりわずかに小形であるが１号墳同様円墳である。これら２基の古墳はほとんど段丘先端部に位置するものであり、２基合い接して存在していたものである。１号墳からの出土遺物より見ると天伯Ｂ遺跡で発見された集落址とほとんど同時期のものであり、６世紀末より７世紀代に築造されたと推定できる。また段丘先端部にはいくつかの古墳が点々と存在し、山岸、天伯Ｂ両遺跡で発見された集落址との強い関係を察し得る。

天伯Ａ遺跡の調査においては、様々な問題点がのこされているが、今後の研究課題として機会を得て論じたいと思う。ここでは調査によって得られた結果を報告するに止めておきたい。

鼎町天伯Ａ遺跡発掘調査組織

１．天伯Ａ遺跡緊急発掘調査委員会

福沢　忠治	鼎町教育委員長
下島　　節	鼎町教育長
森本　藤男	鼎町教育委員
関島　一郎	〃
片桐　正人	〃

２．調査団

調査指導	今村　善興（長野県教育委員会指導主事）			
調査主任	遮那藤麻呂（日本考古学協会員）			
調　査　員	今村　正次（長野県考古学会員）	片桐　孝男（長野県考古学会員）		
	松村　全二（長野県考古学会員）	小松　　望（鼎中学校）		
	鼎町文化財審議会委員　本島宏一・倉田順市・塩沢　堯・渡辺　茂			
協　　力	下伊那教育会考古学委員会			
	下伊那農業高等学校郷土班			
	鼎中学校郷土クラブ他生徒有志			
	鼎町切石区長　平沢　清	副区長　村沢忠男		
	分館長　奥村　健・態谷理一・木下静夫			
作業協力員	態谷　三男	村沢　　広	態谷　　律	村沢　孝子	田中　喜久
	佐々木初子	池戸千恵子	村沢　良子	平沢　光江	大竹　孝輔
	中島　徳恵	伊藤　千春	坂下やすゑ	松尾　藤子	松尾　金市
	夏目　　巌	後藤つたえ	香山まちゑ	平沢イワエ	代田満知子
	代田　　重	松尾　昭子	吉川　きみ	高橋　利江	伊藤　恒子
	井上　たか	池田　千代	長谷部八千代	前沢　好美	花井八千代
	矢沢　つる	伊藤　清子	遮那みさか		

３．事務局

事業責任者	加藤文三郎（町　長）	事　務　局	川井　重明（庶務係長）
	下島　　節（教育長）		松下　信子（主　事）
			沢柳　房子（主　事）
			小西　盛登（書　記）
			東　　明男（社教主事）

おわりに

無計画な地域開発や観光開発によって、文化財や自然破壊が進行しつつあることは、大変残念なことです。

埋蔵文化財は、私たちの遠い祖先が、冷酷な自然や外敵と闘いながら生きてきた、血と涙の歴史であその上で生活している私たちは、真に生きているよろこびを感じずにはいられないと思います。

したがって、こうした文化財は、現状のままを大切に保存する責任があります。しかしながら、数万を経過した今日の課題として、生きるために緊急に解決しなくてはならない諸問題があり、やむを得ず回の緊急発掘調査となり、ここに記録として保存するとともに、広くみなさんにその全容を明らかにしした。

この報告書の作成にあたっては、県教育委員会指導主事の今村善興先生の全面的な御援助をいただき鼎町在住の遮那藤麻呂先生が中心となり、今村正次・片桐孝男両先生の手もわずらわせました。

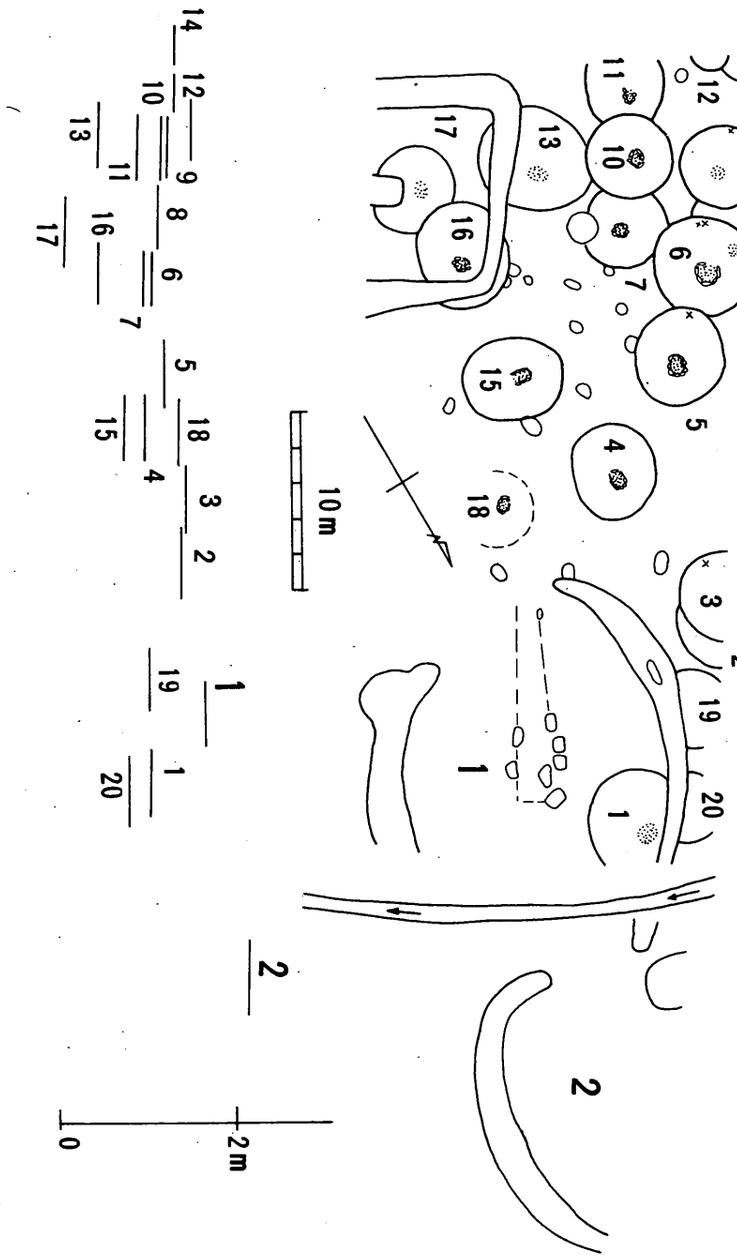
とくに遮那先生には、発掘時から御両親も労力を提供していただき、御一家をあげて御協力をいただました。また今村善興先生には、限られた予算の中で最大の成果をあげるために、種々御骨折と御指導いただきました。更に今村正次先生は、発掘現場では作業に当っていただいた皆さんのチームブレーのとなっていただき、片桐先生は若い情熱をぶっつけていただきました。

こうして、多くの先生方や皆さんの御協力によって、発掘調査ならびに報告書が完成したわけで、厚御礼申しあげます。

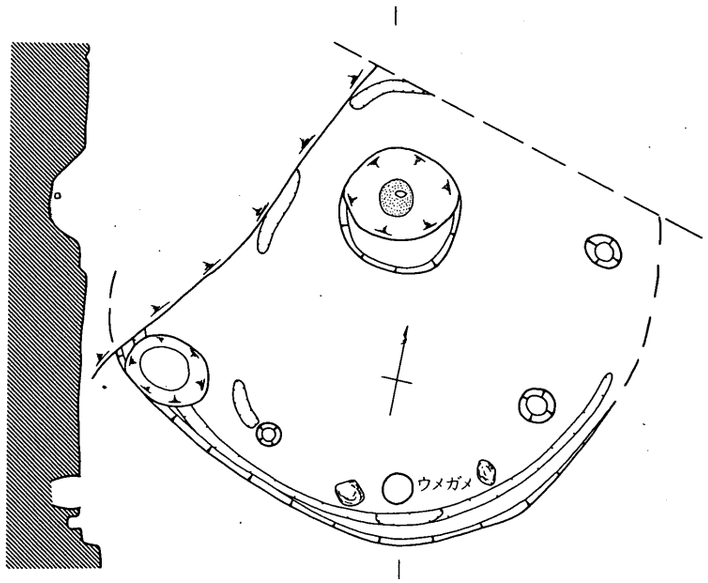
この報告書が、広く研究のため役立ていただくとともに、先人が残した貴重な遺産を大切にしようとう意識が、この鼎から広がっていくことを願うものです。

昭和50年3月20日

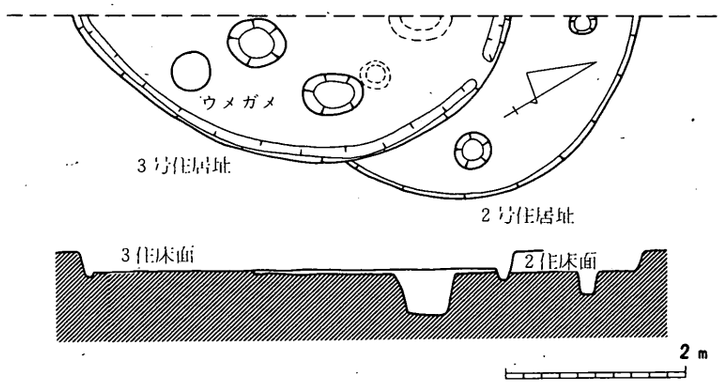
長野県下伊那郡鼎町教育委員会



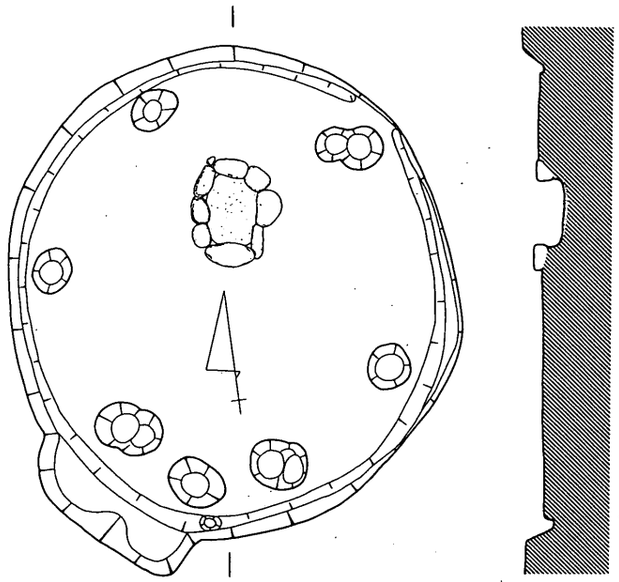
第1図　天伯遺跡遺構配置図及び床面高低表



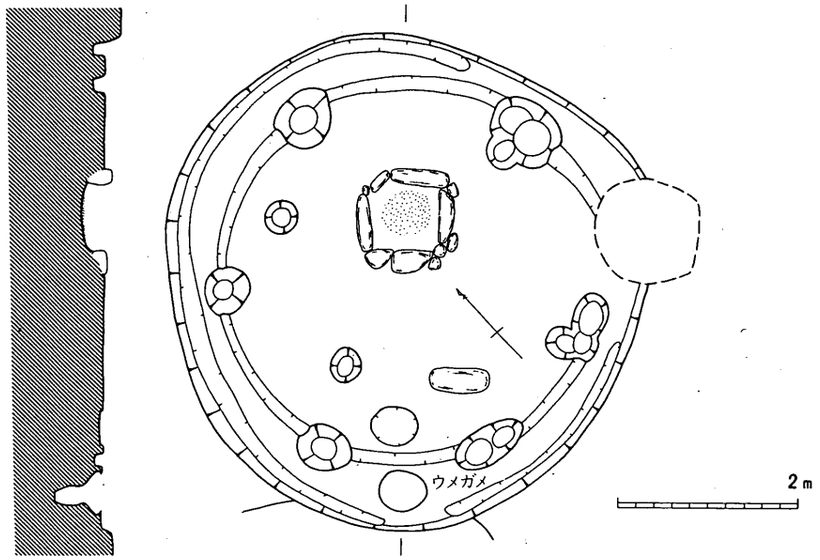
1 号住居址



第 2 図　天伯 A 遺跡 1 号～ 3 号住居址（1 ：80)

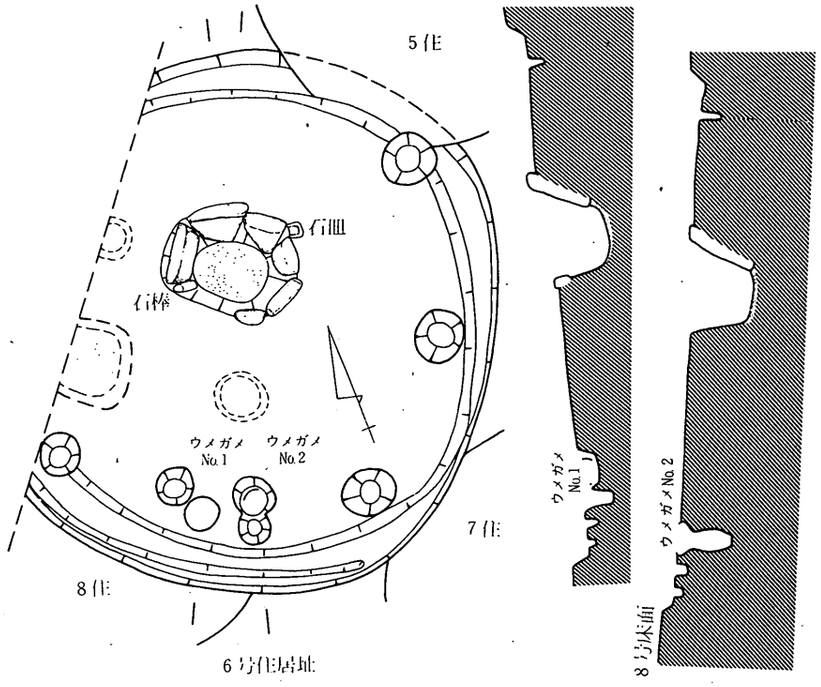


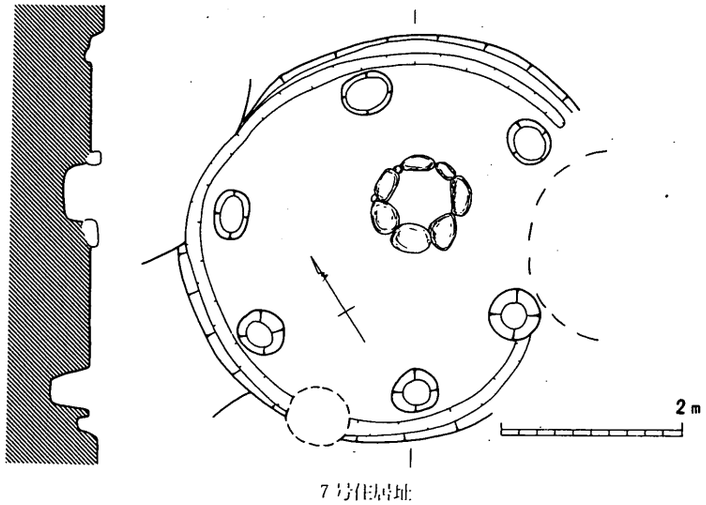
4 号住居址



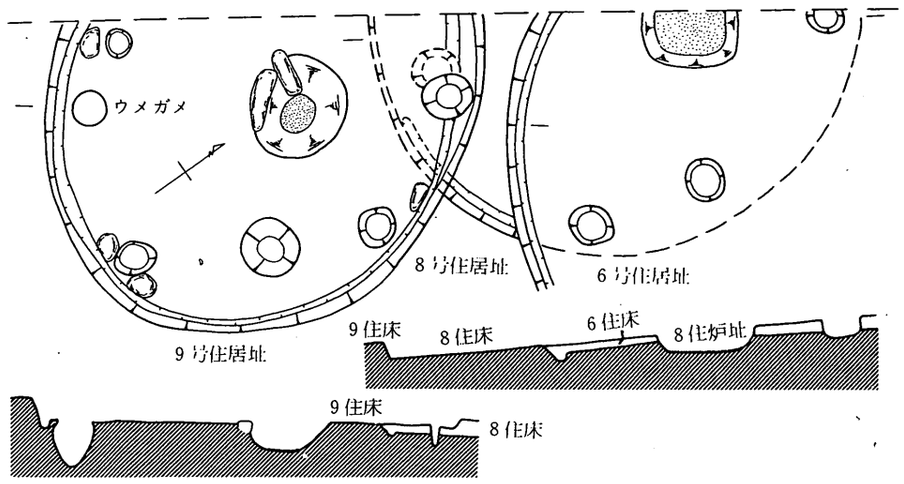
5 号住居址

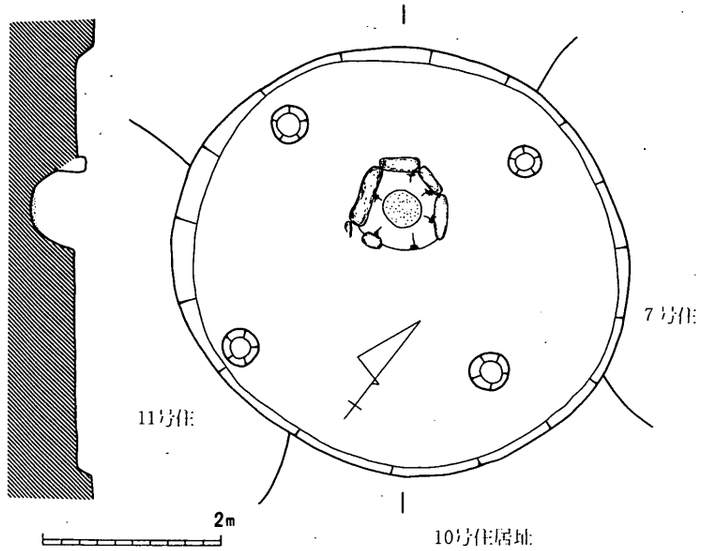
第 3 図　4 号，5 号住居址（1 ：80)



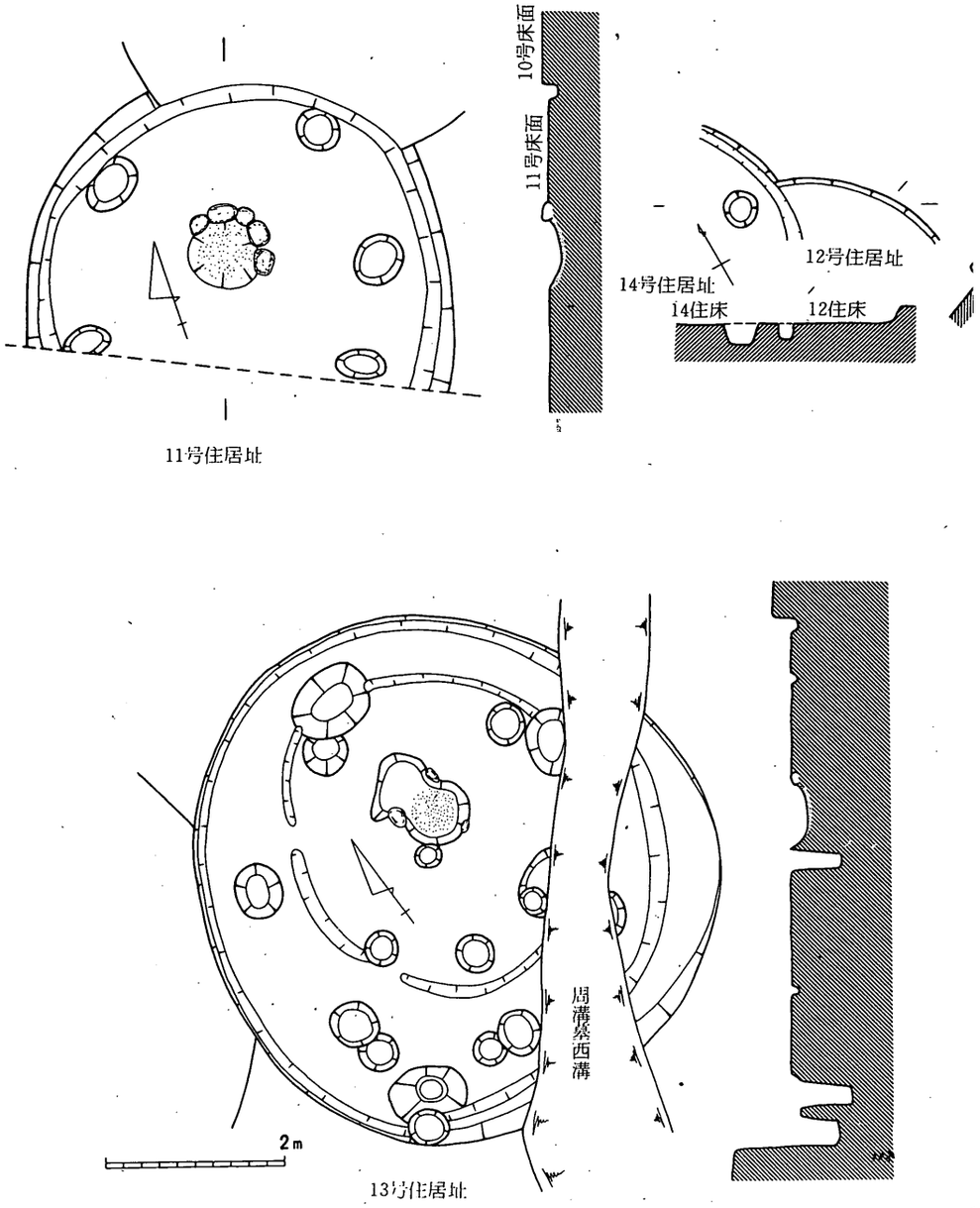


第4図　6号，7号住居址（1：80）

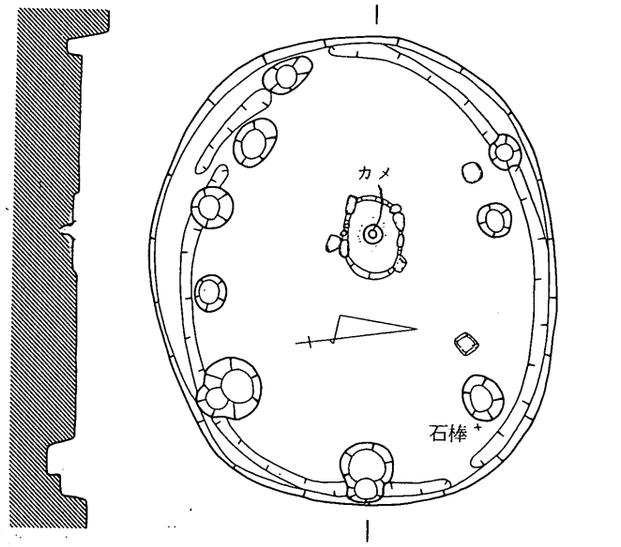


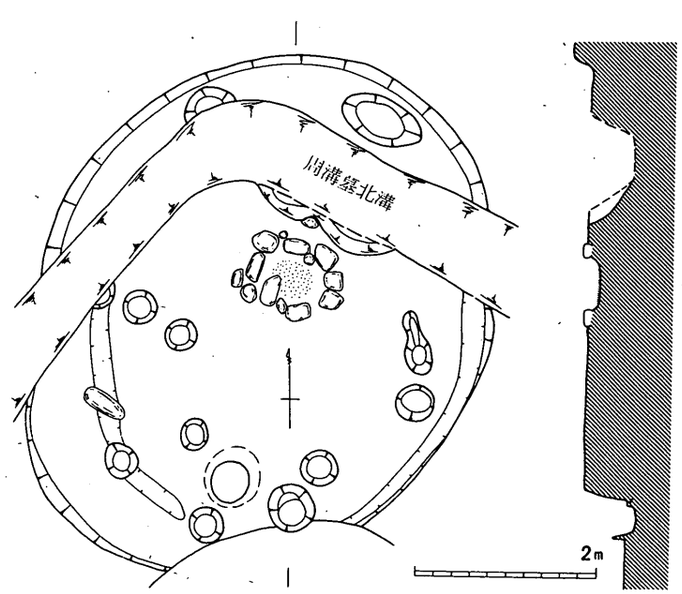


第5図　8号，9号，10号住居址（1：80）

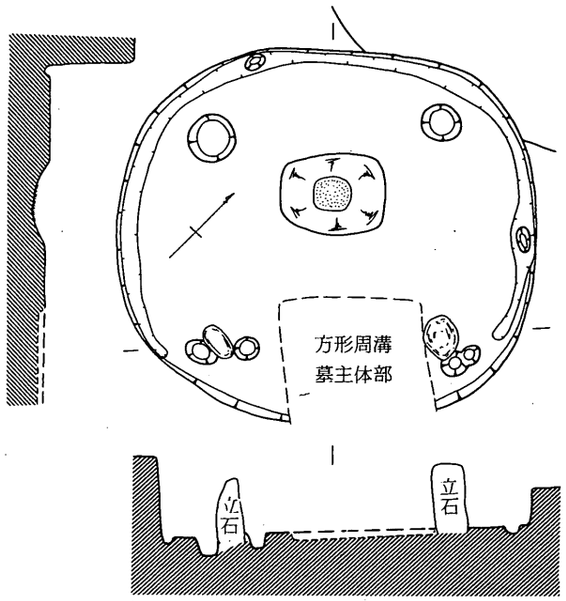


第6図　11号，12号，13号，14号住居址（1：80）

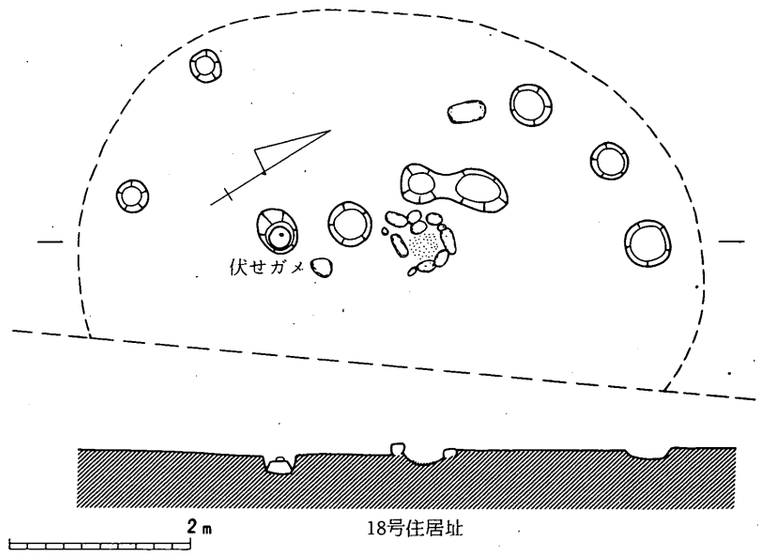




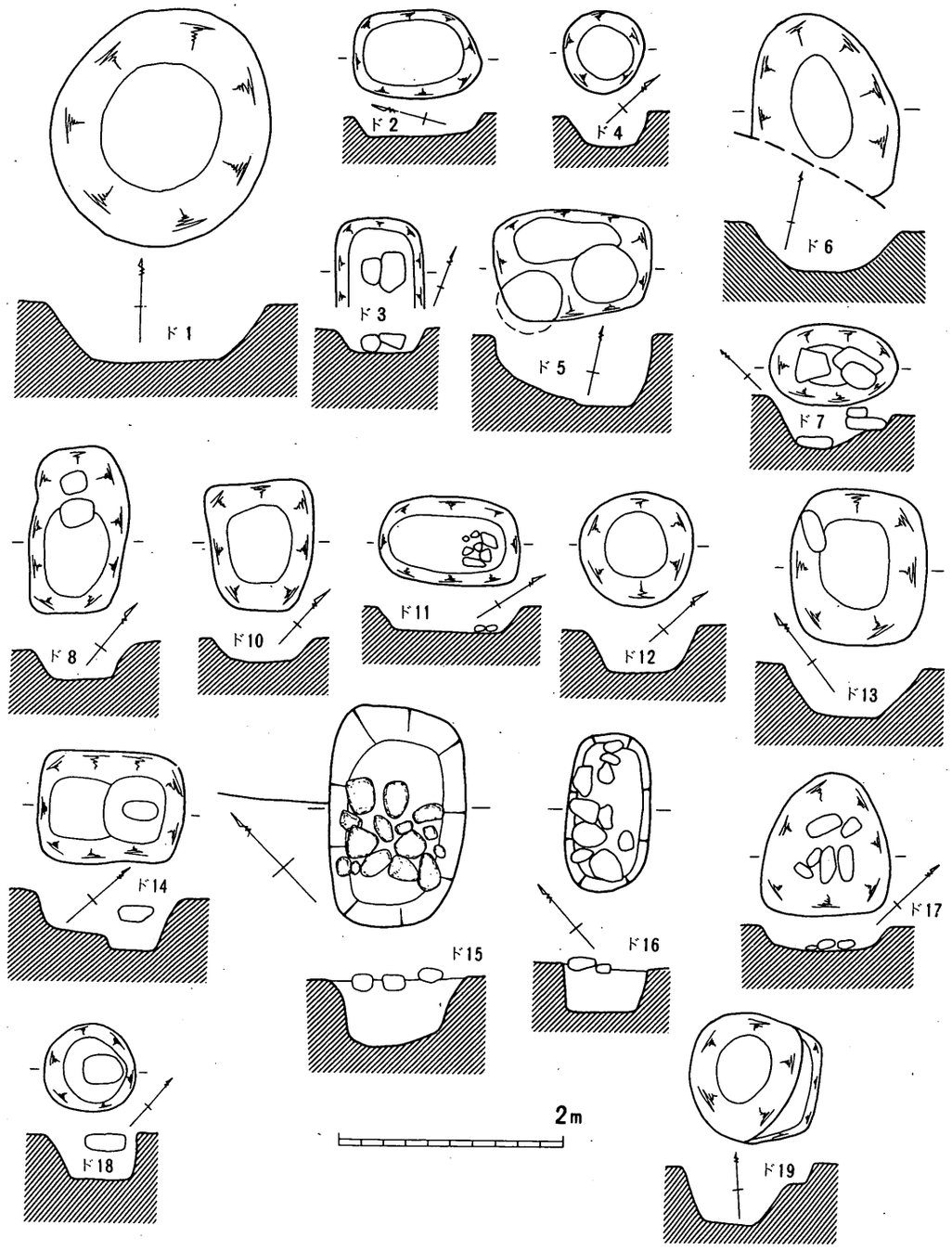
第7図　15号，16号住居址（1：80）



17号住居址

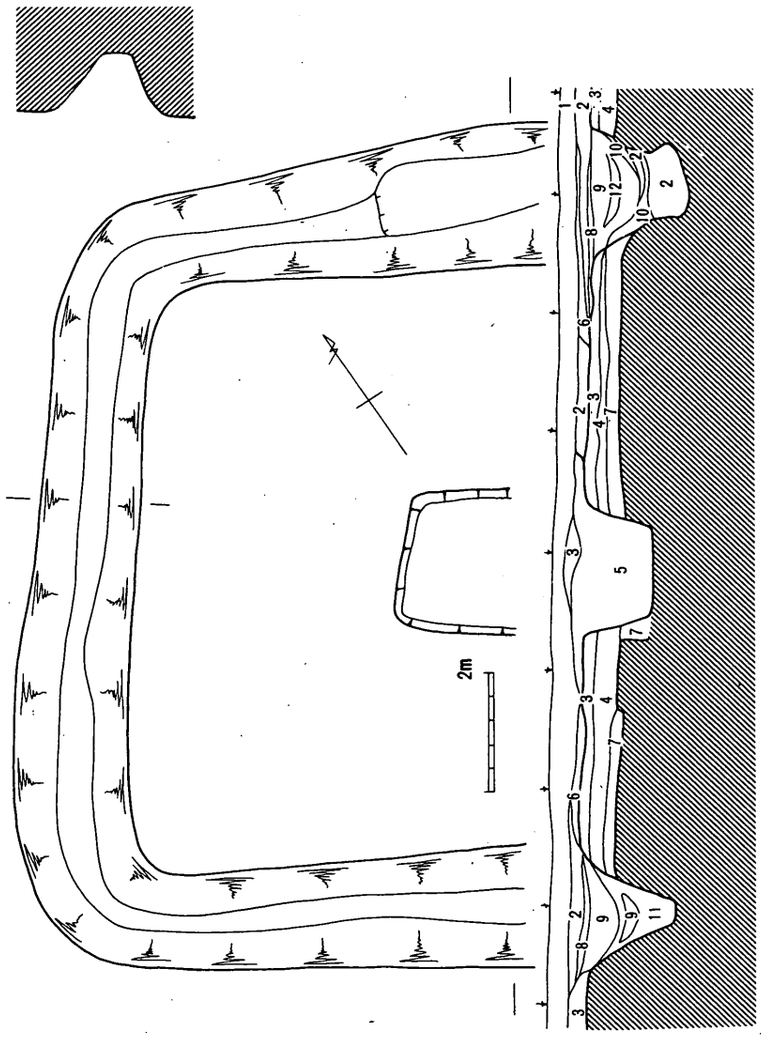


第8図　17号，18号住居址（1：80）

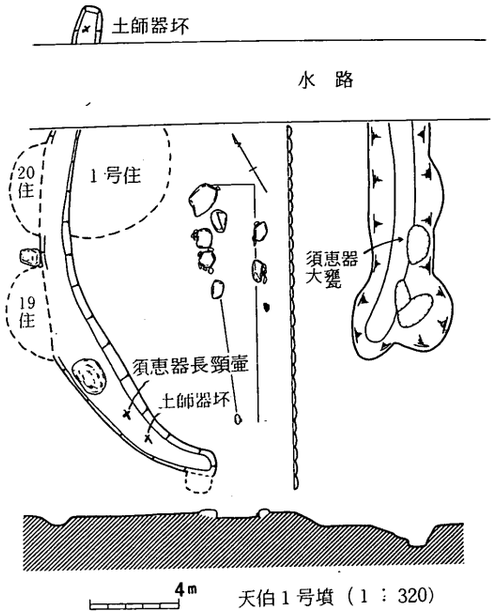


第9図　天伯A遺跡土壙1号～19号（1：60）

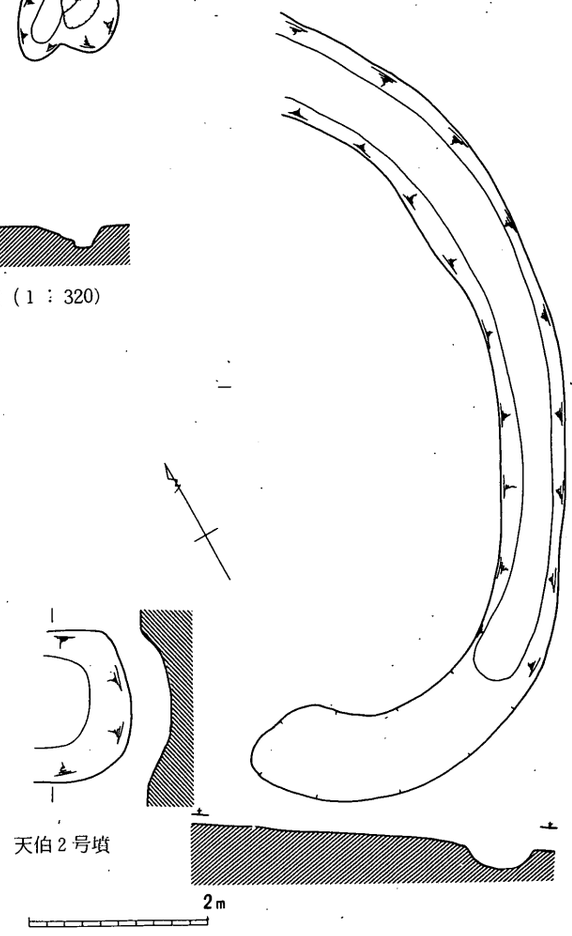
1 耕作土層
2 砂
3 黒色土
4 赤褐色土
5 黄色砂質土
6 砂質黒色土
7 黒褐砂土
8 褐色砂土
9 粘質黒色土
10 粘質茶黒土
11 粘質褐色土
12 砂質褐色土



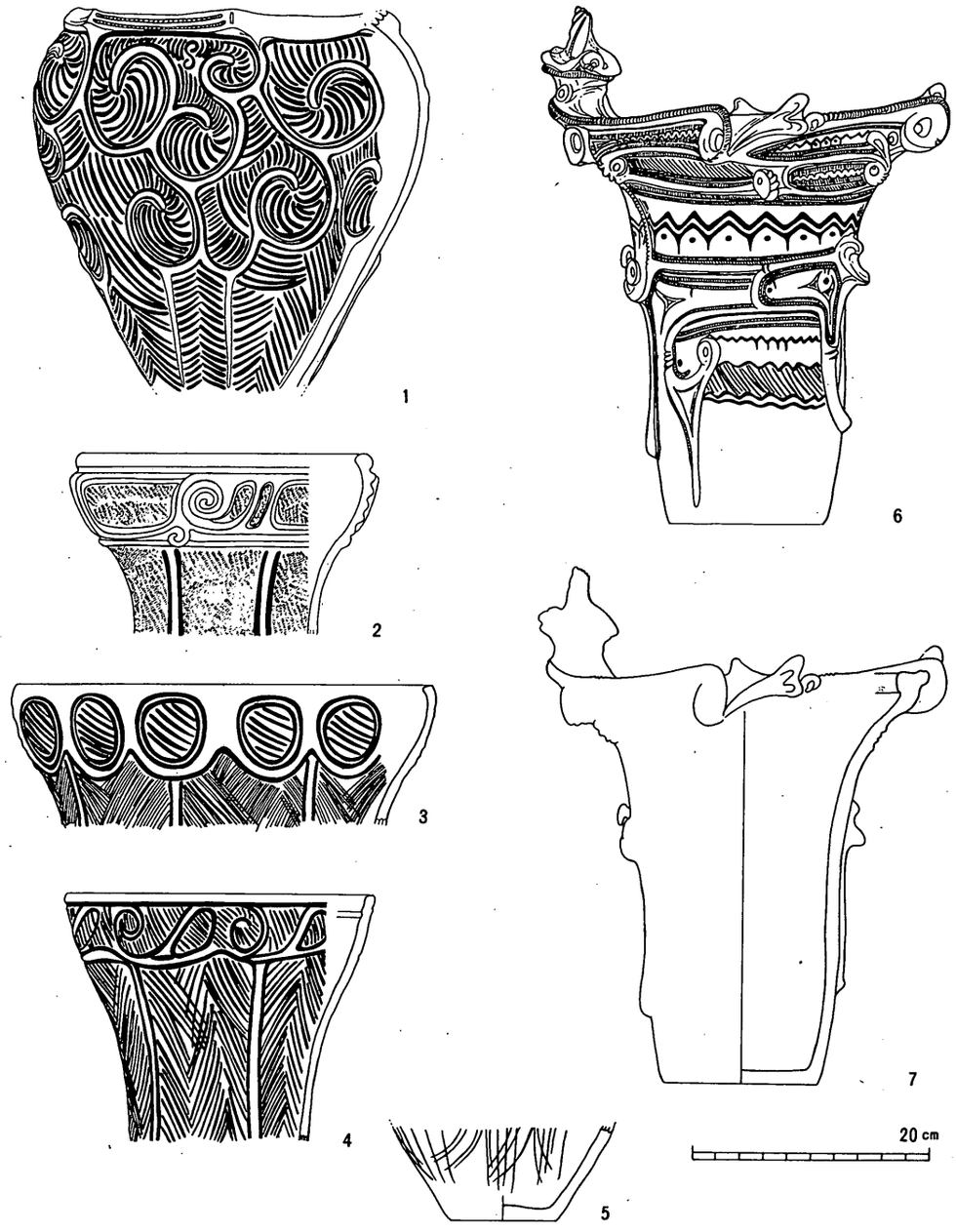
第10図　天伯A遺跡方形周溝墓（1：60）



天伯1号墳（1：320）

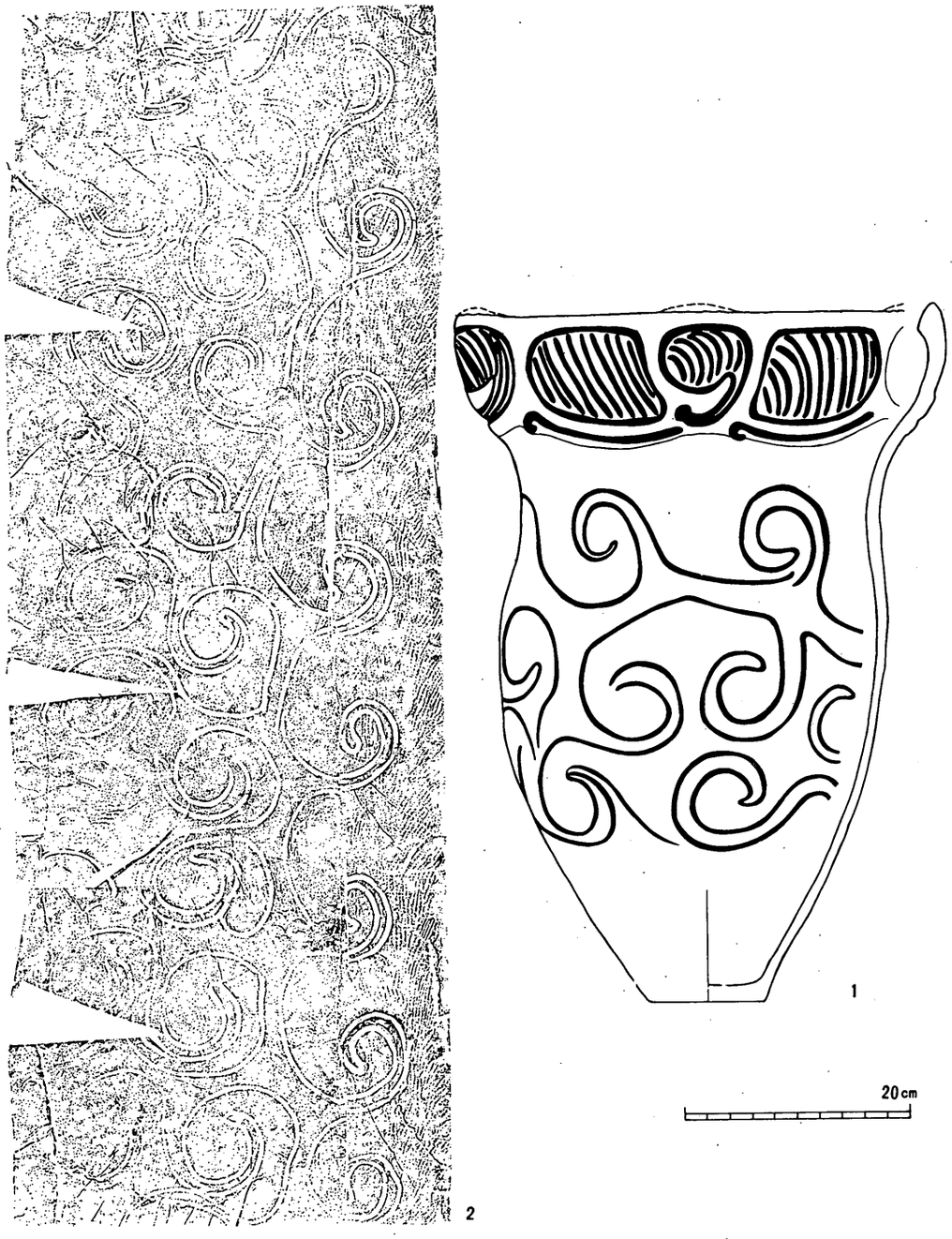


第11図　天伯1号，2号古墳（1：80）

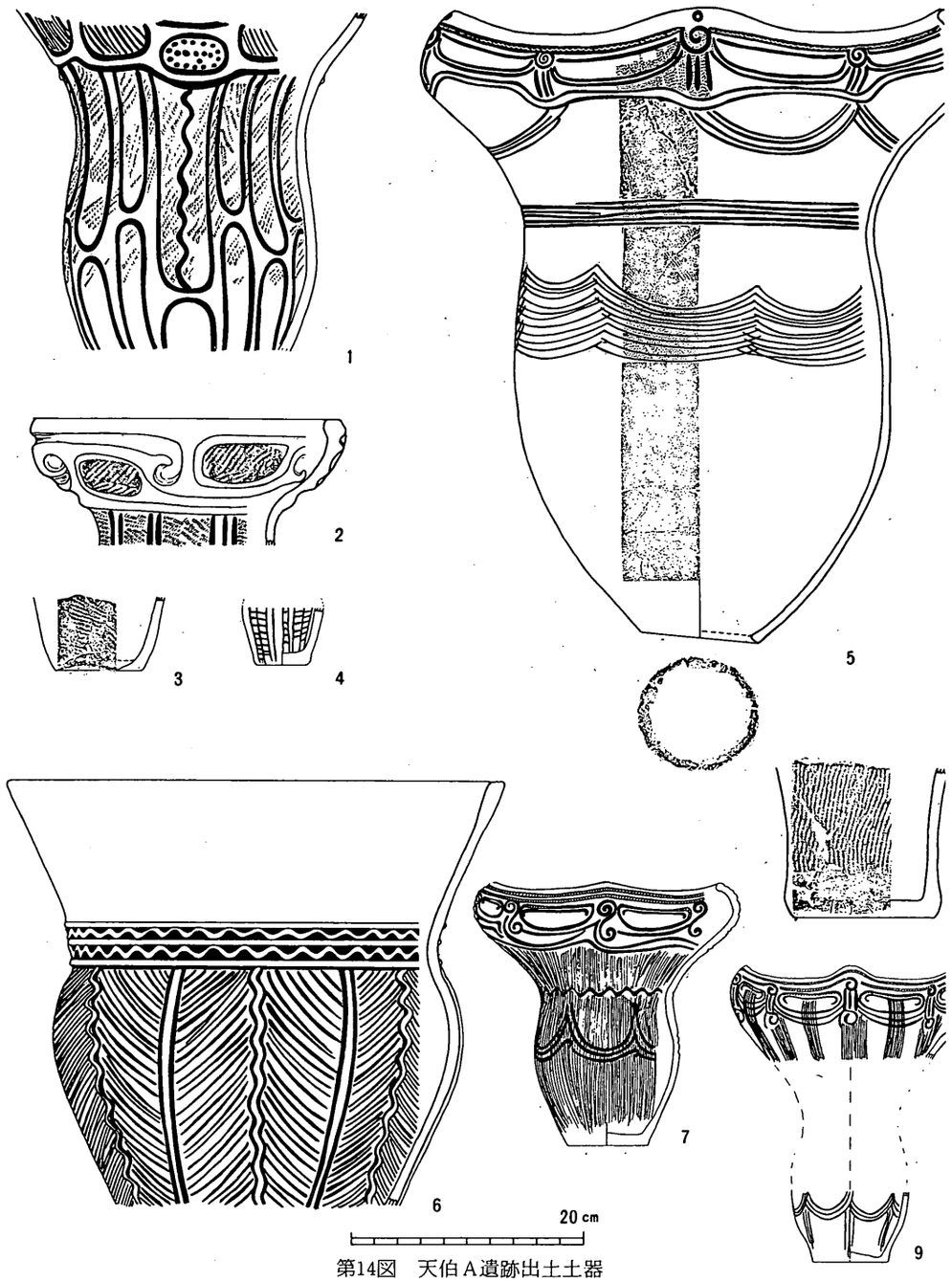


第12図　天伯Ａ遺跡出土土器

1・2　1号住居址，3～5　3号住居址，6・7　2号住居址

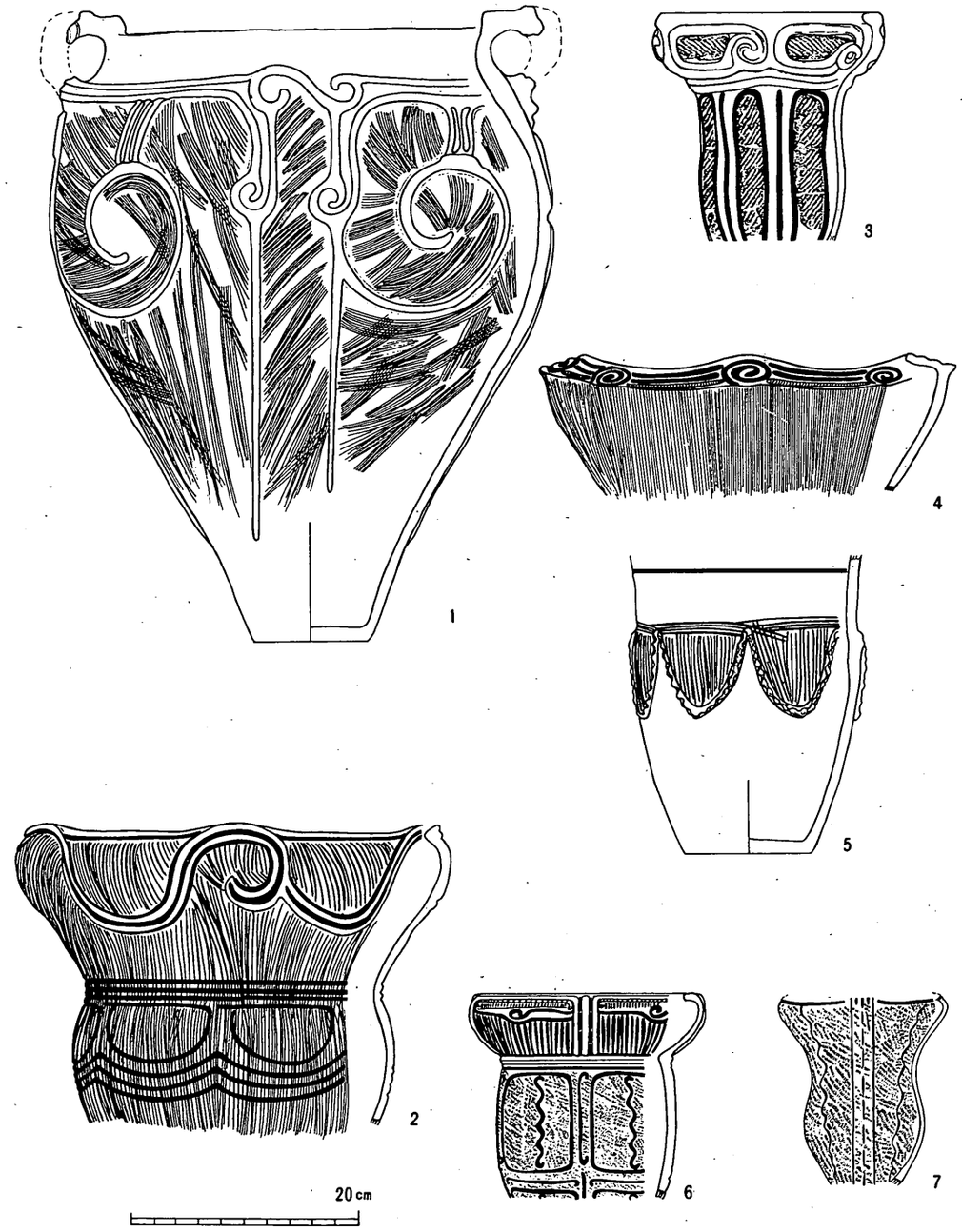


第13図　天伯Ａ遺跡出土土器　3号住居址出土



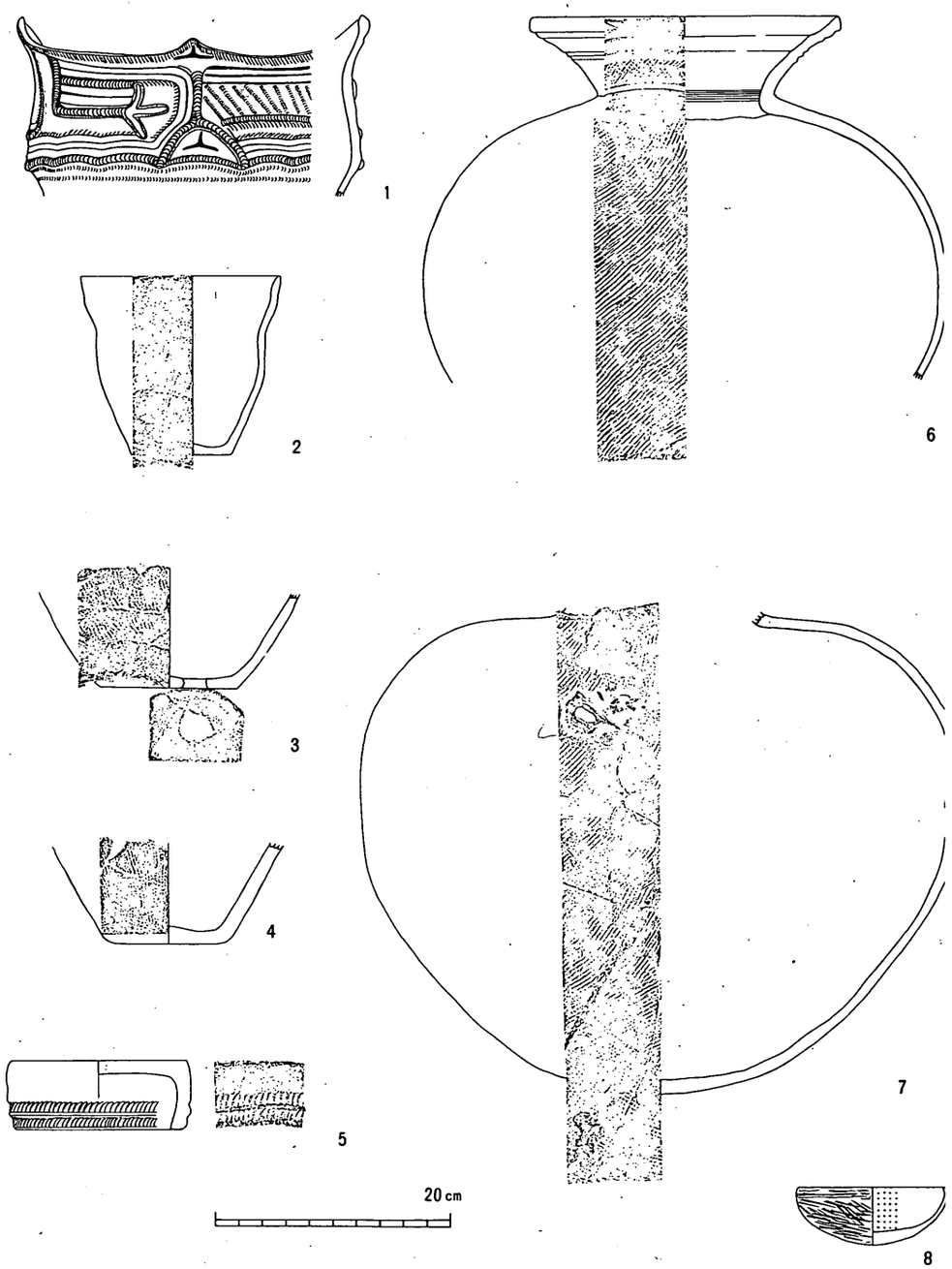
第14図　天伯Ａ遺跡出土土器

1～4　6号住居址，5　5号住居址，6～9　7号住居址



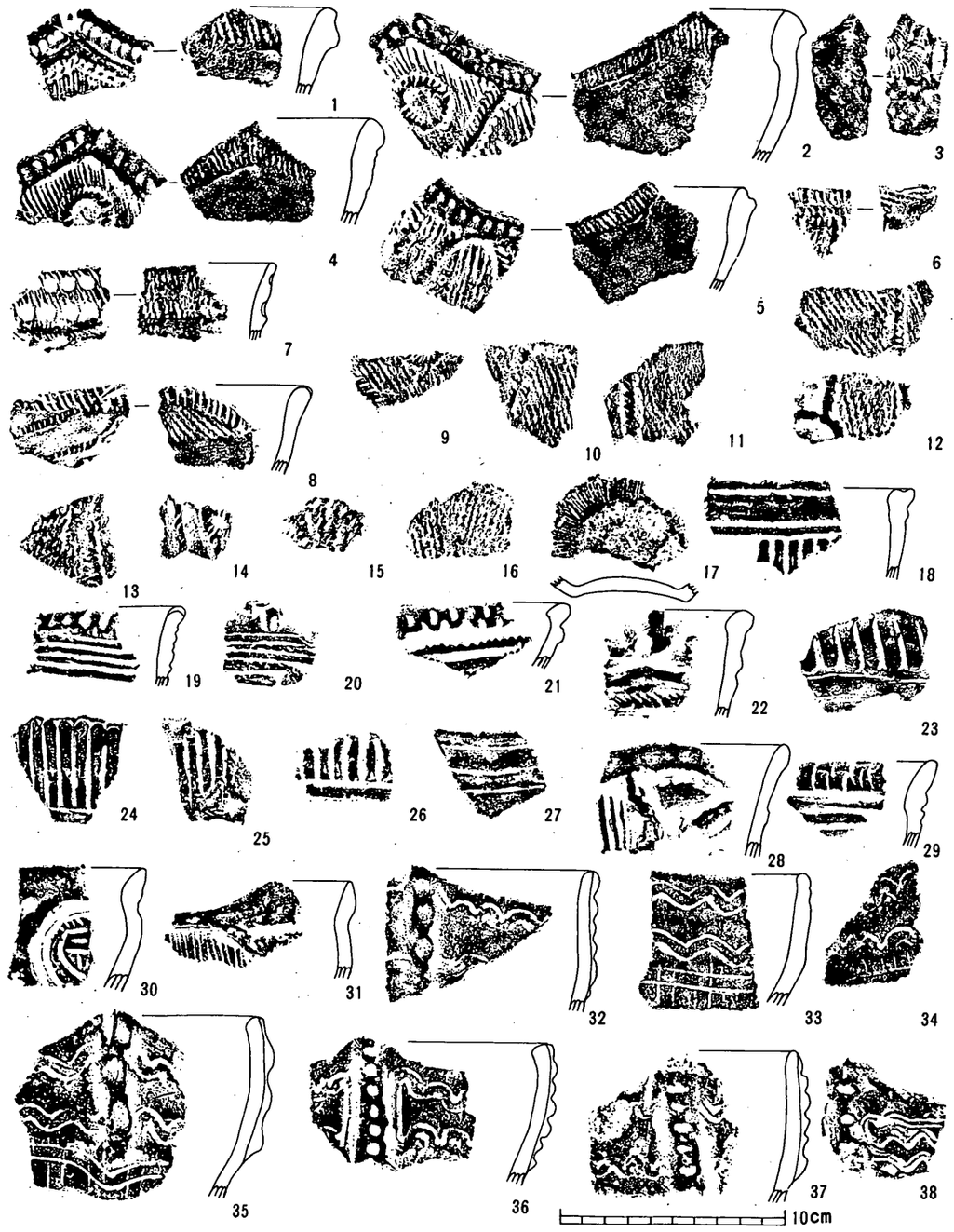
第15図　天伯Ａ遺跡出土土器

1・2　9号住居址，3　10号住居址，4・5　13号住居址，6・7　15号住居址

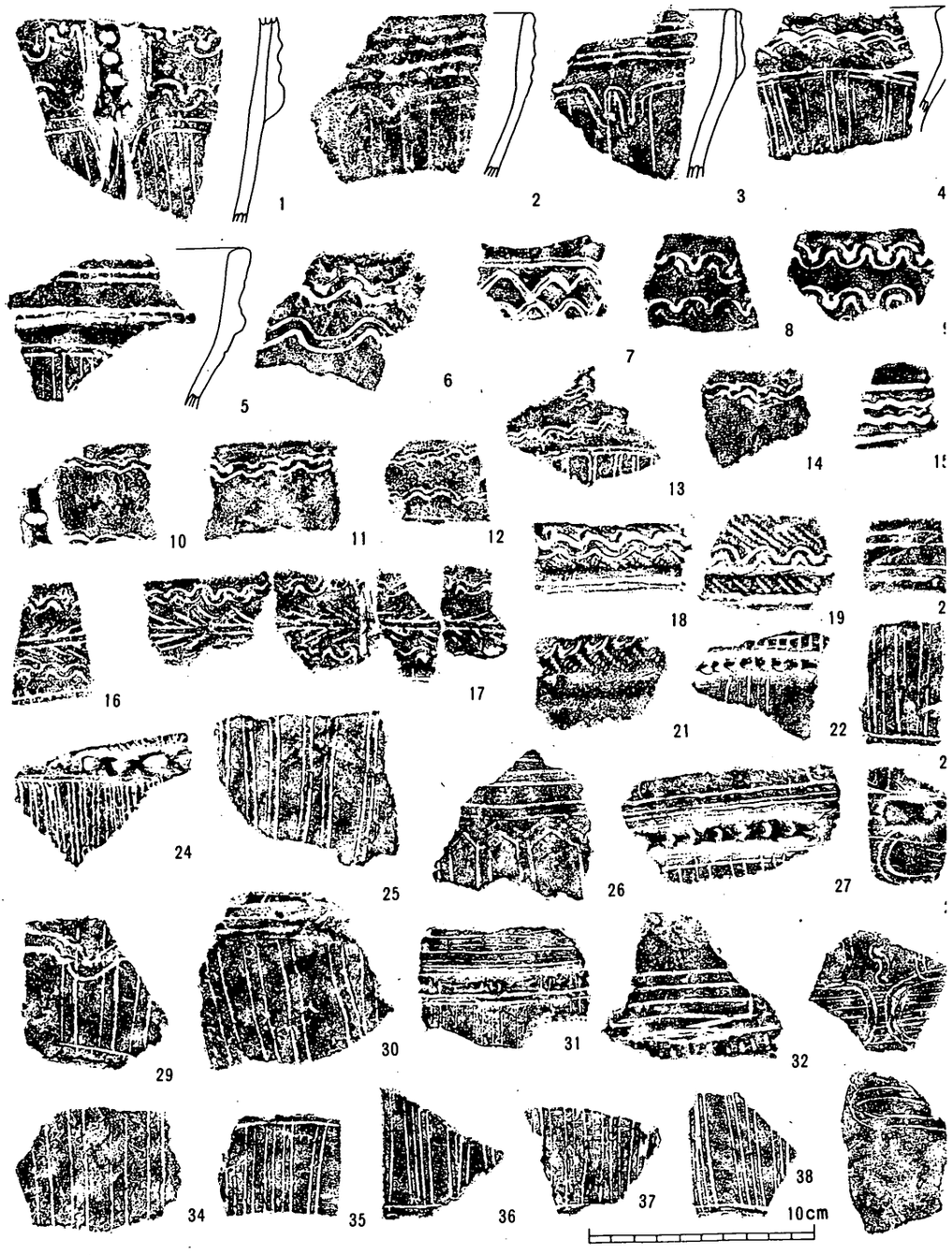


第16図　天伯Ａ遺跡出土土器

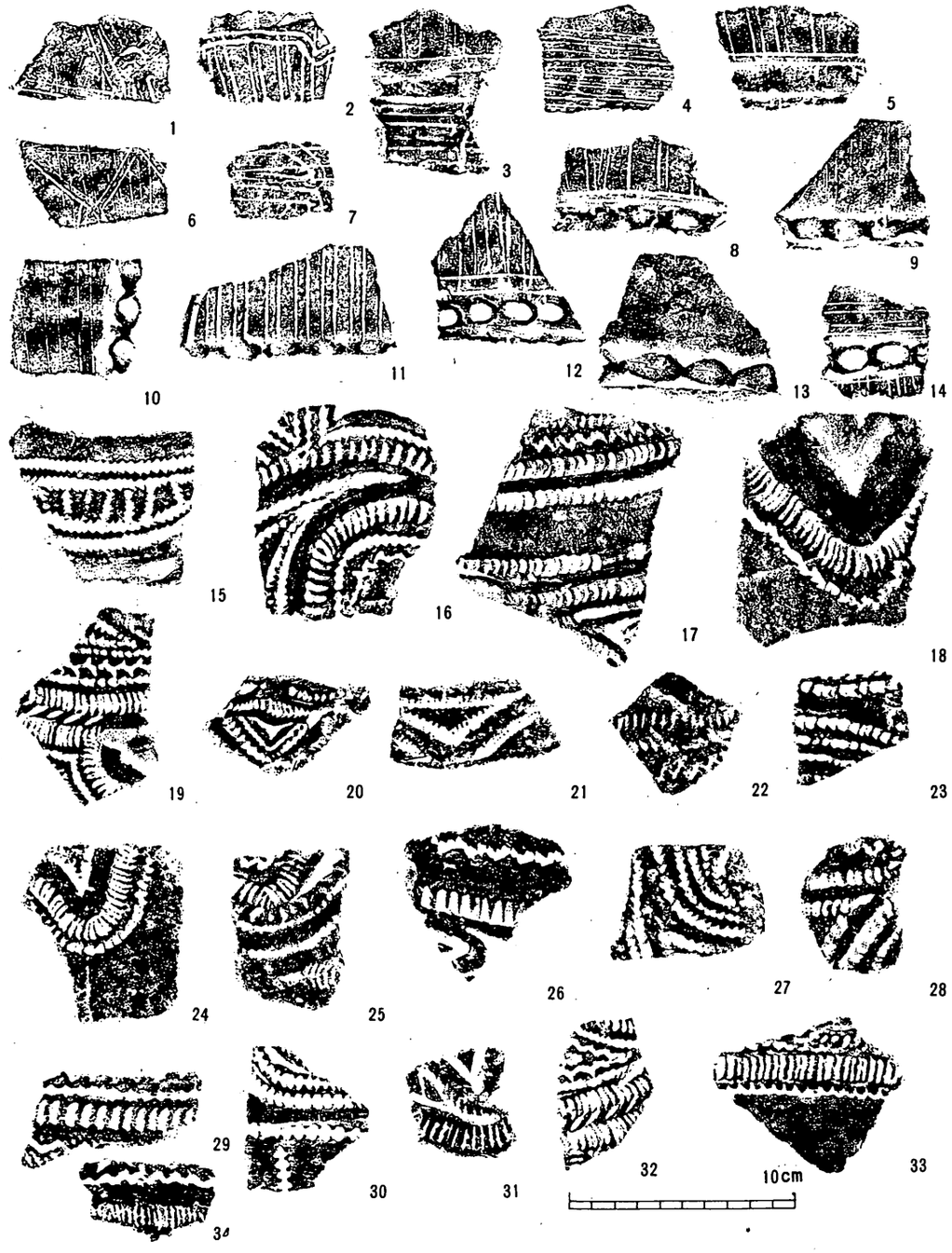
1・2　16号住居址，3・4　18号住居址，5　遺構外出土，6～8　天伯1号出土



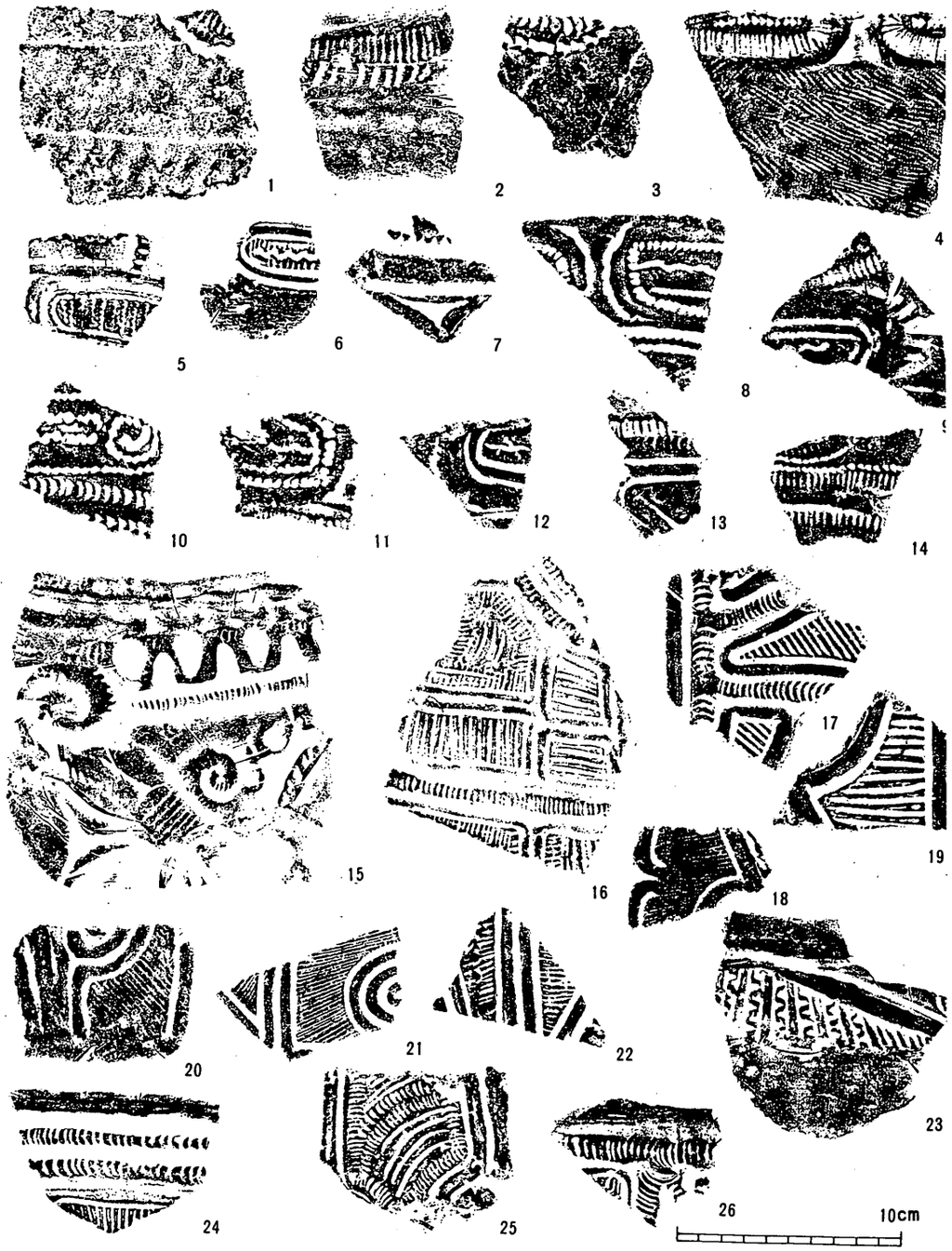
第17図　天伯Ａ遺跡出土土器



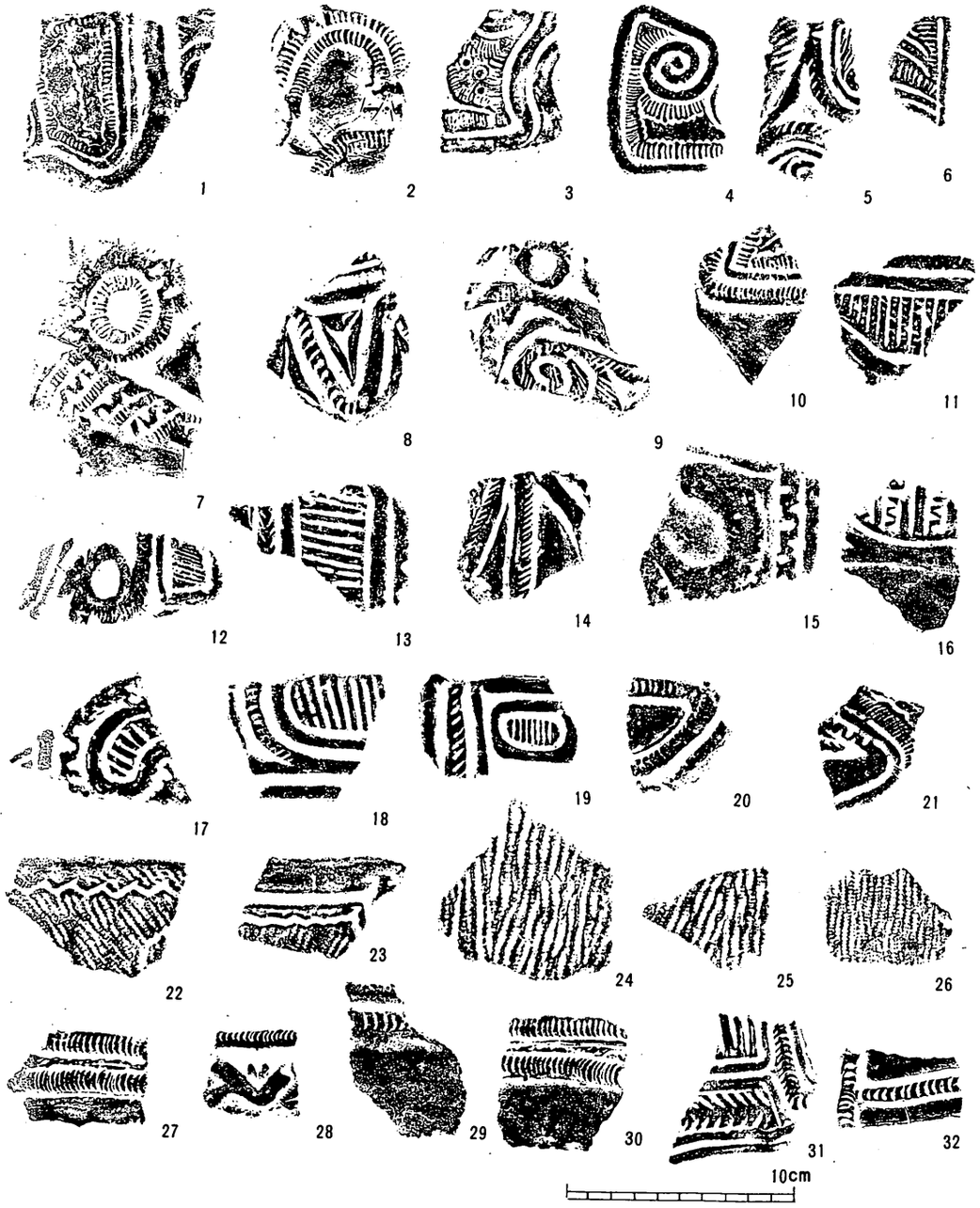
第18図　天伯Ａ遺跡出土土器



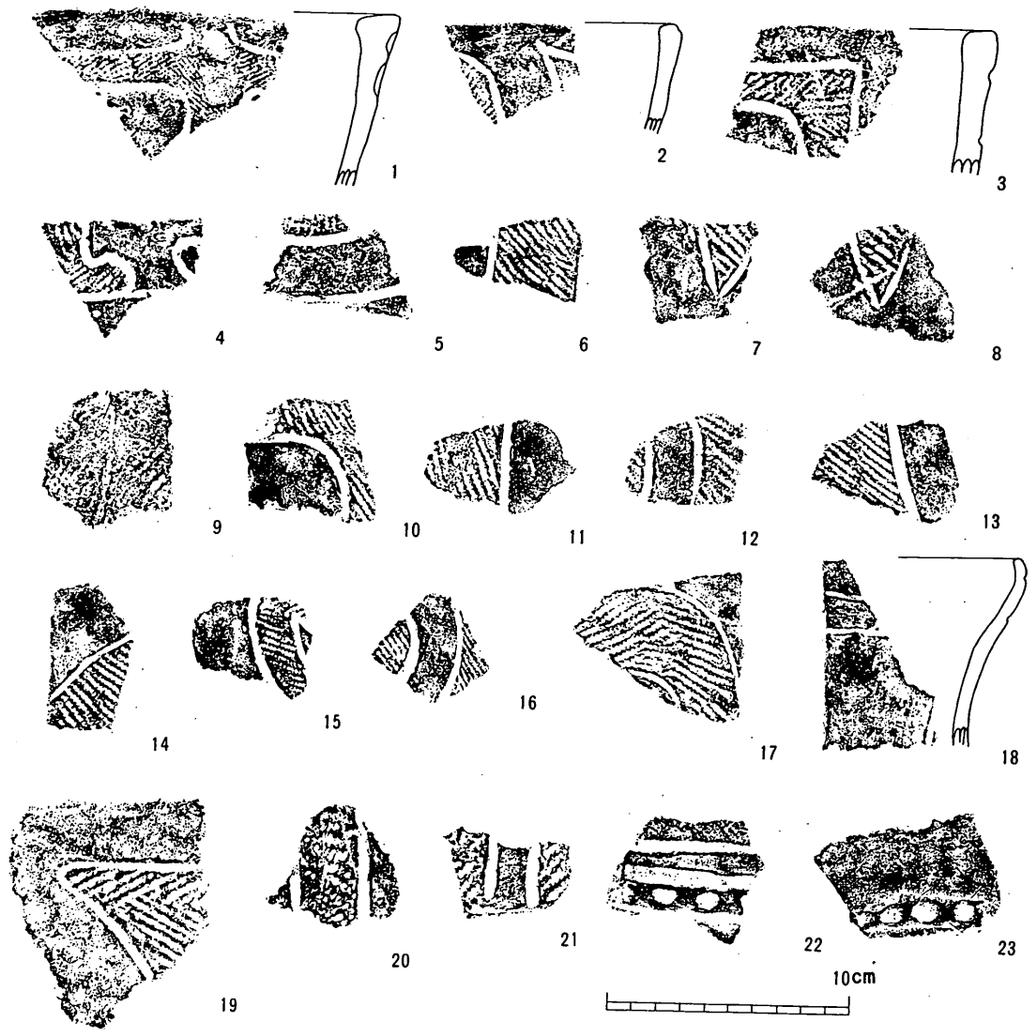
第19図　天伯Ａ遺跡出土土器



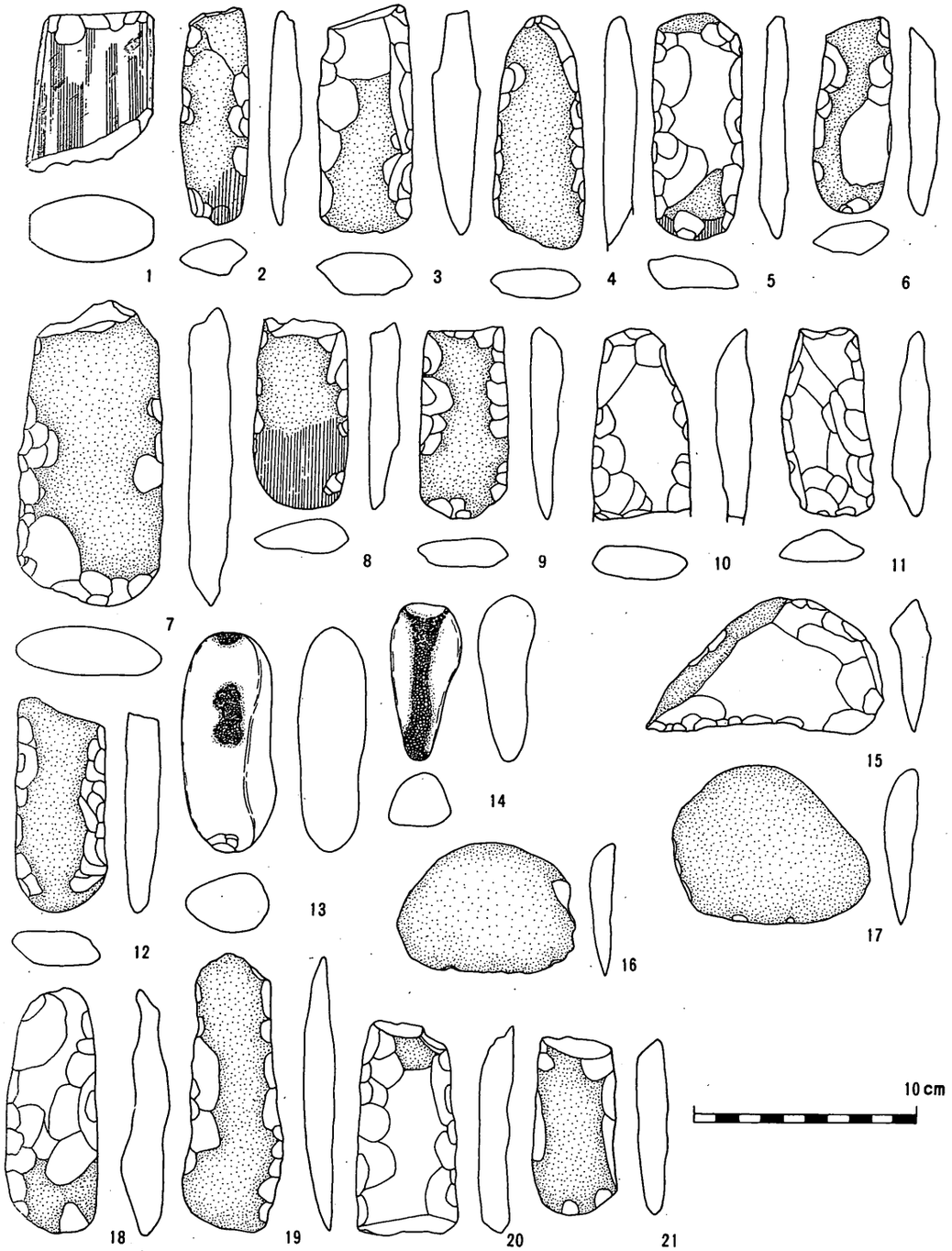
第20図　天伯Ａ遺跡出土土器



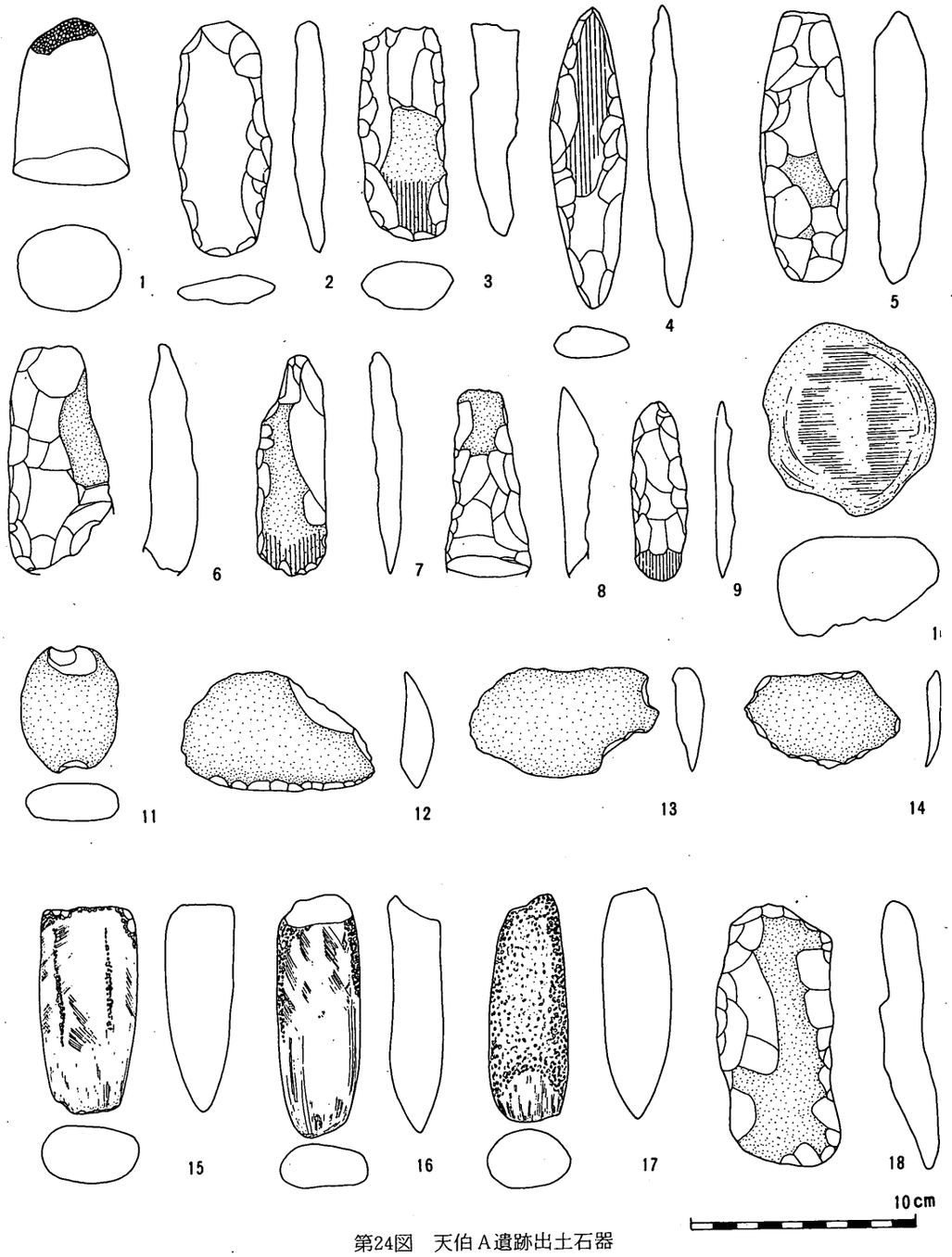
第21図　天伯Ａ遺跡出土土器



第22図　天伯Ａ遺跡出土土器

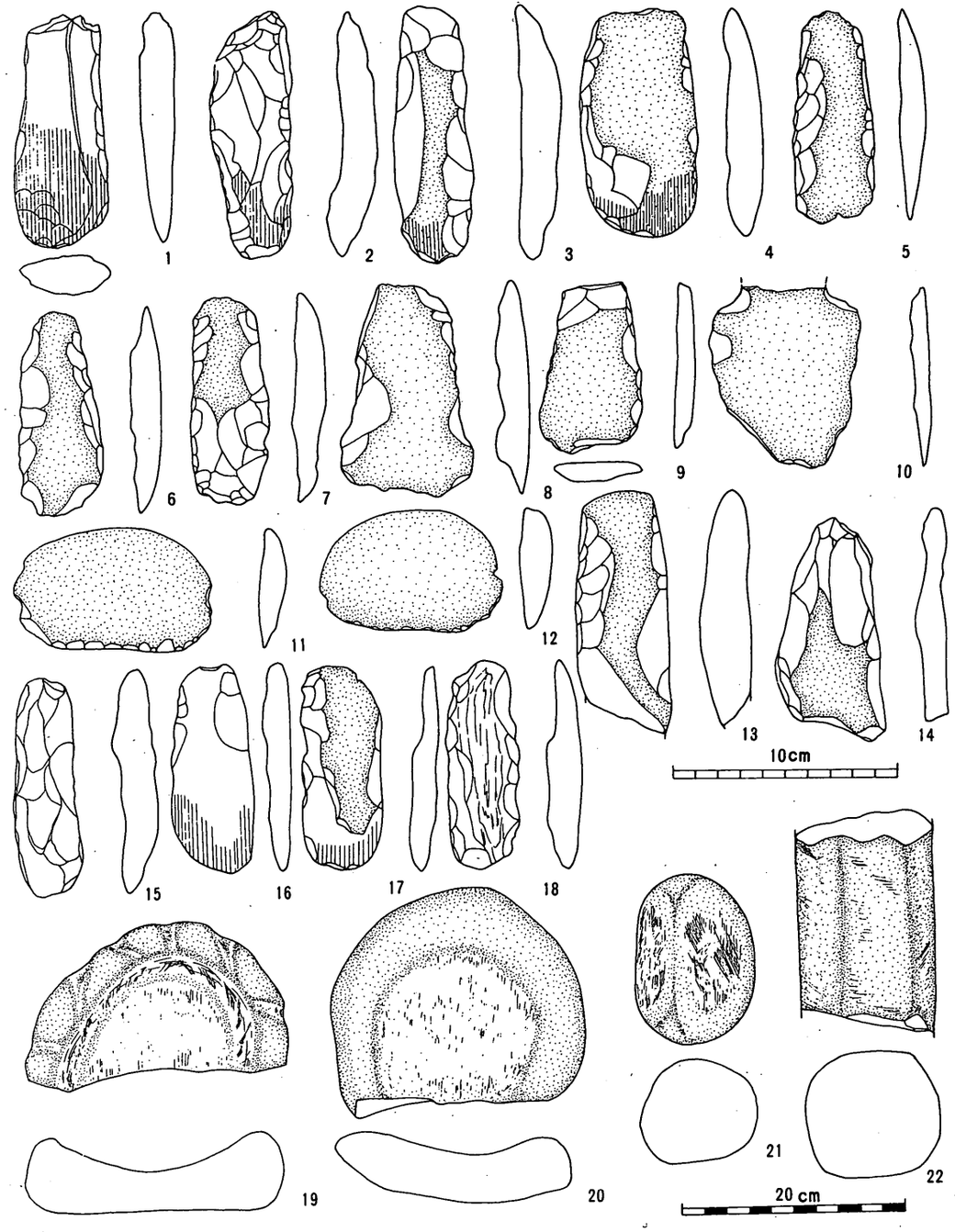


第23図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～17　1号住居址出土，18～21　2号住居址出土

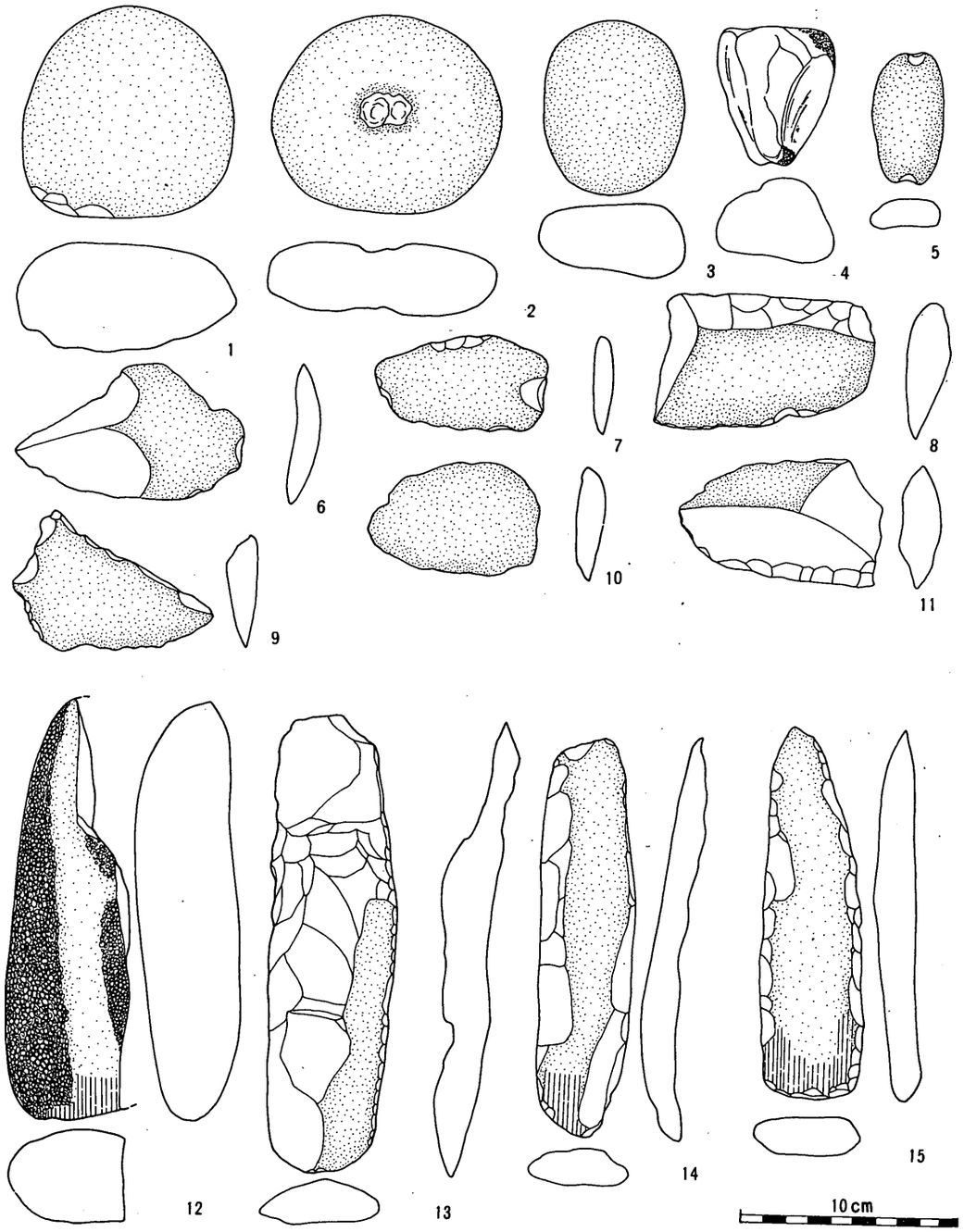


第24図　天伯Ａ遺跡出土石器

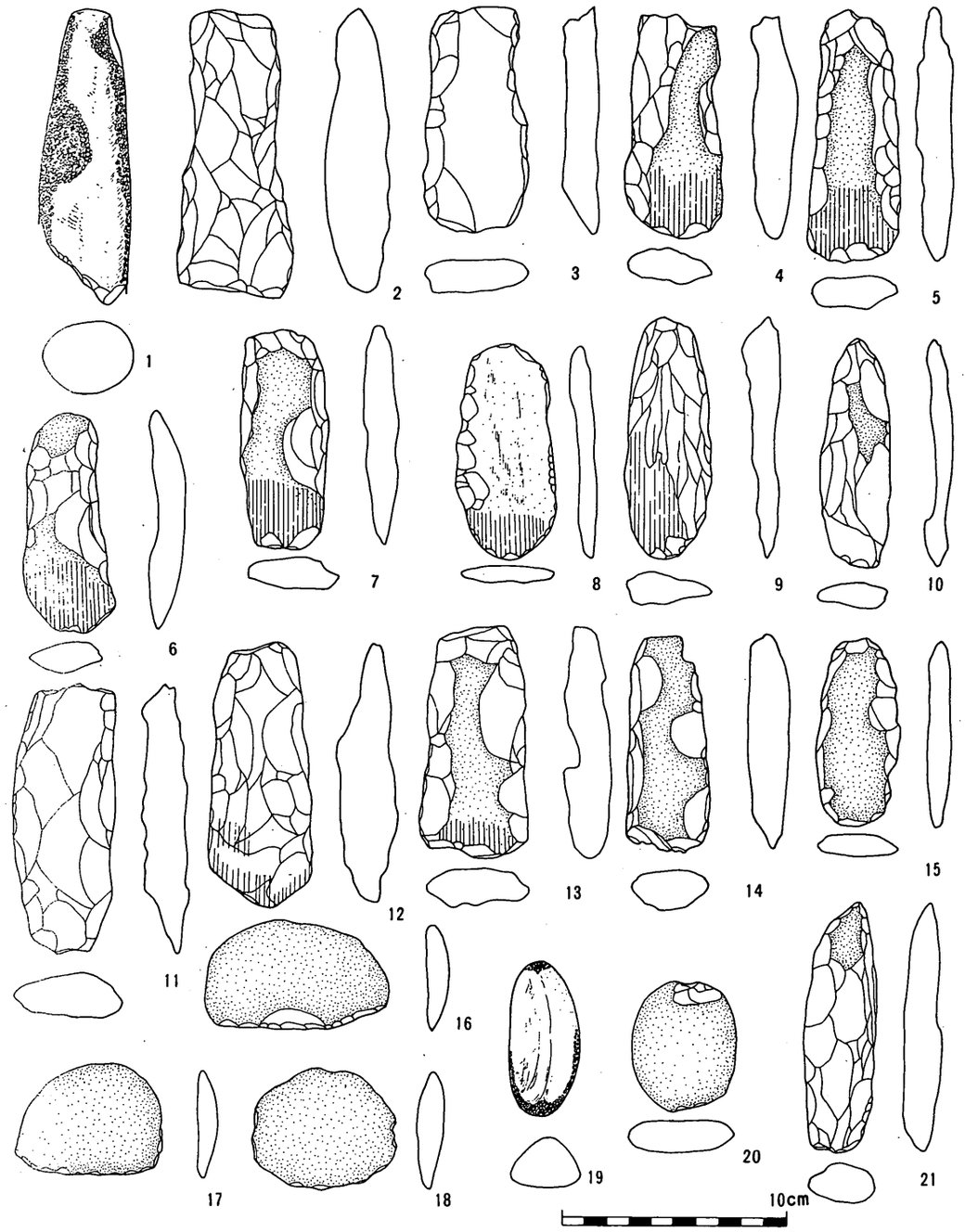
1～3　3号住居址，4～14　4号住居址，15～18　5号住居址



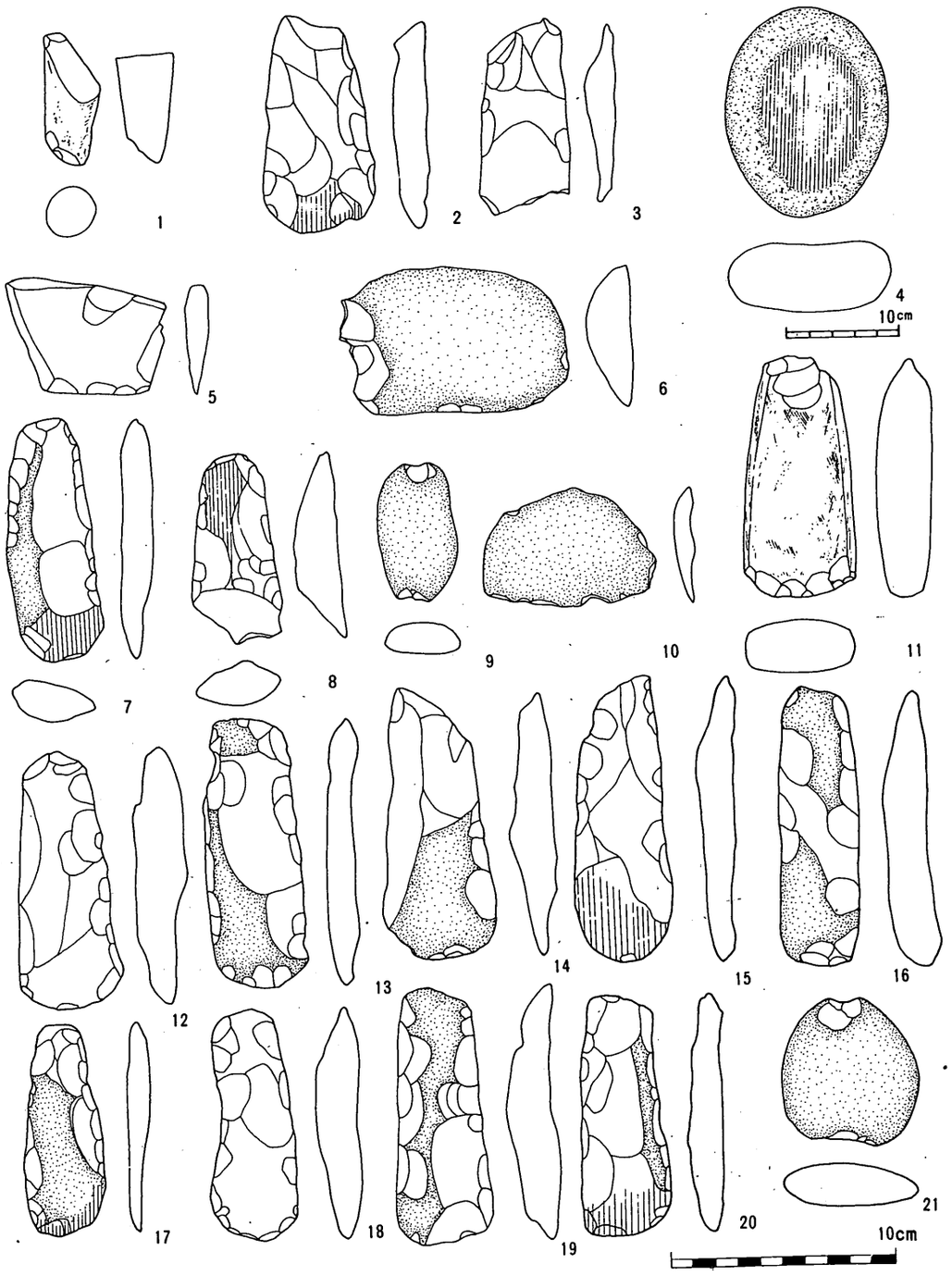
第25図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～12　5号住居址，13～22　6号住居址



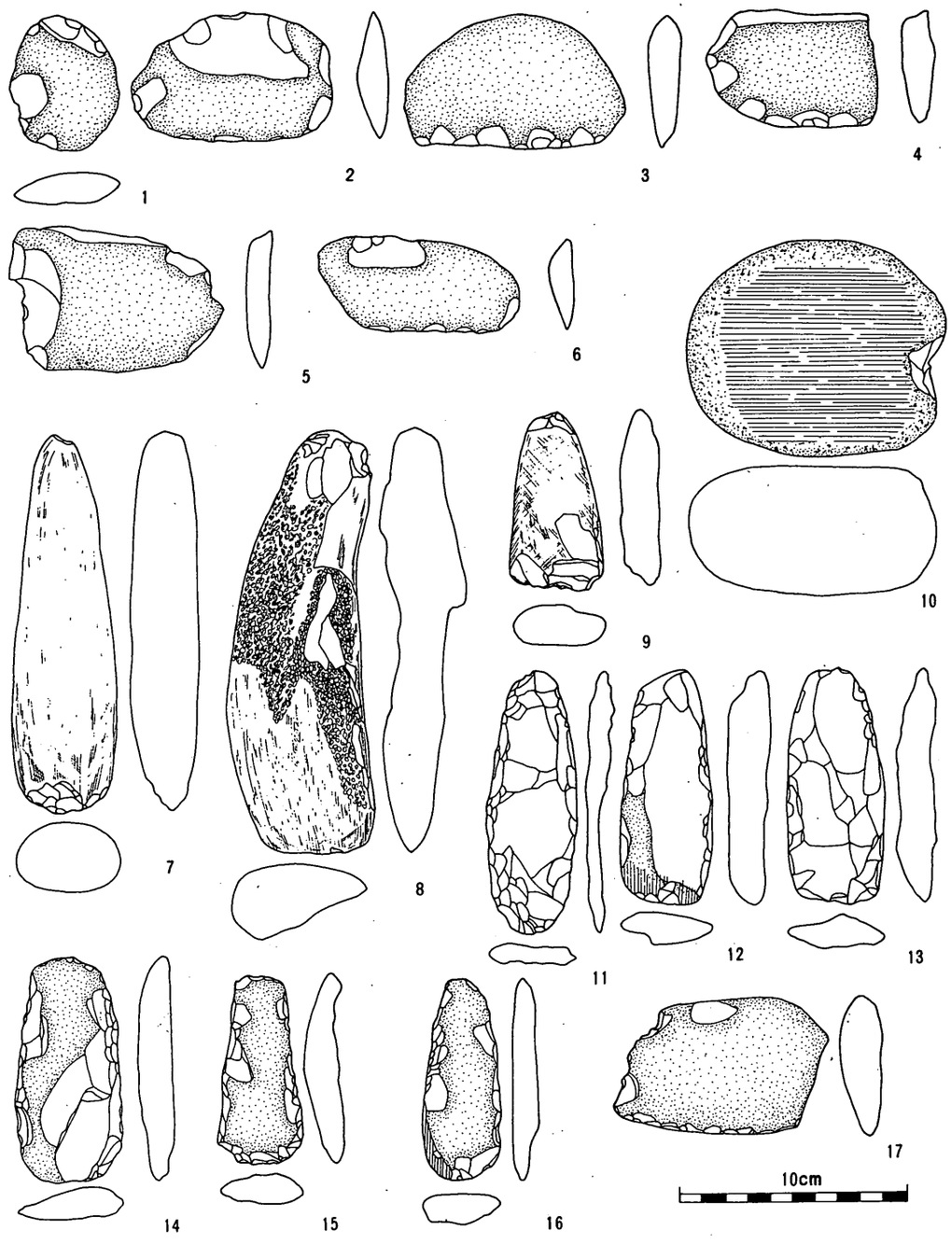
第26図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～11　6号住居址，12～15　7号住居址



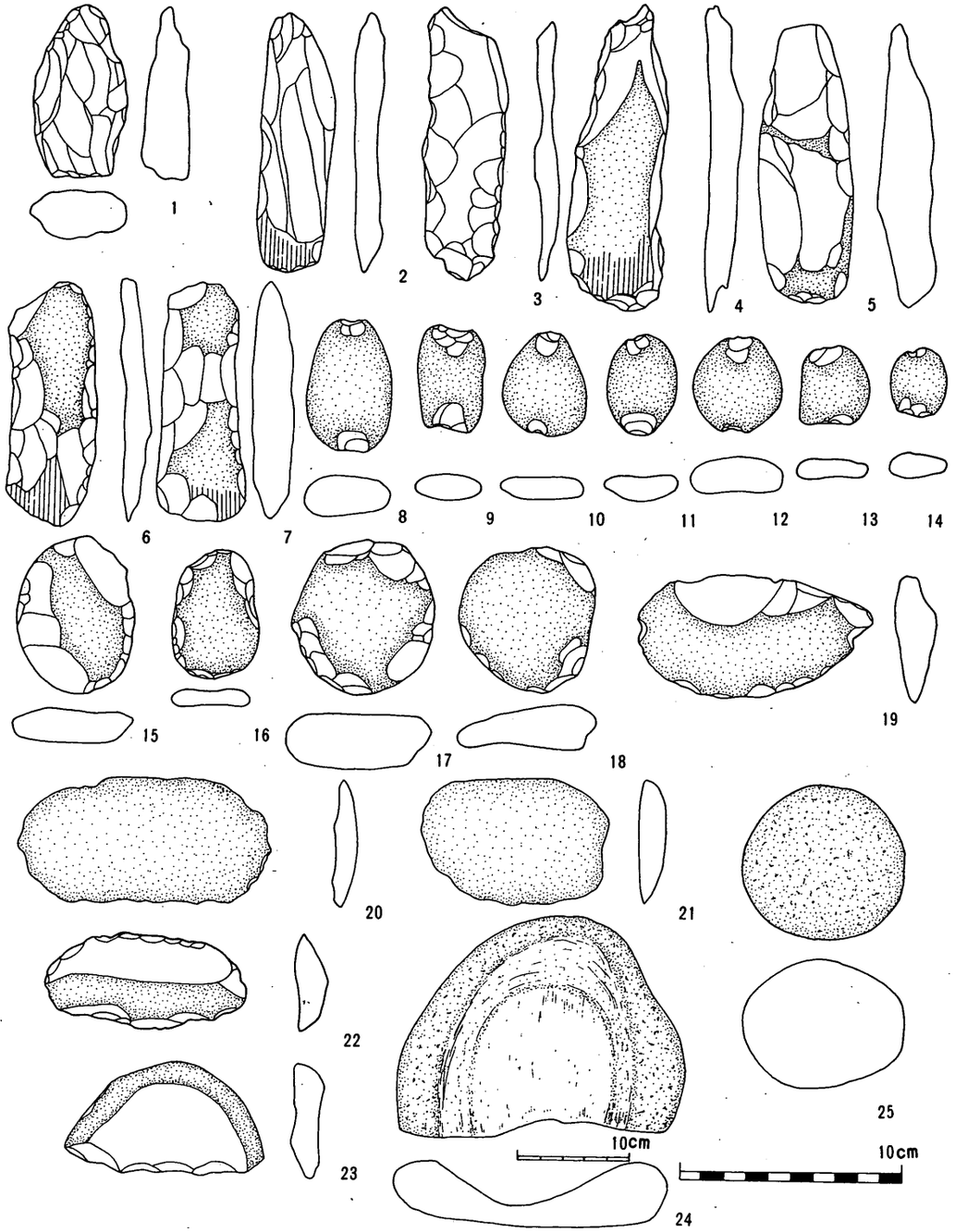
第27図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～21　7号住居址



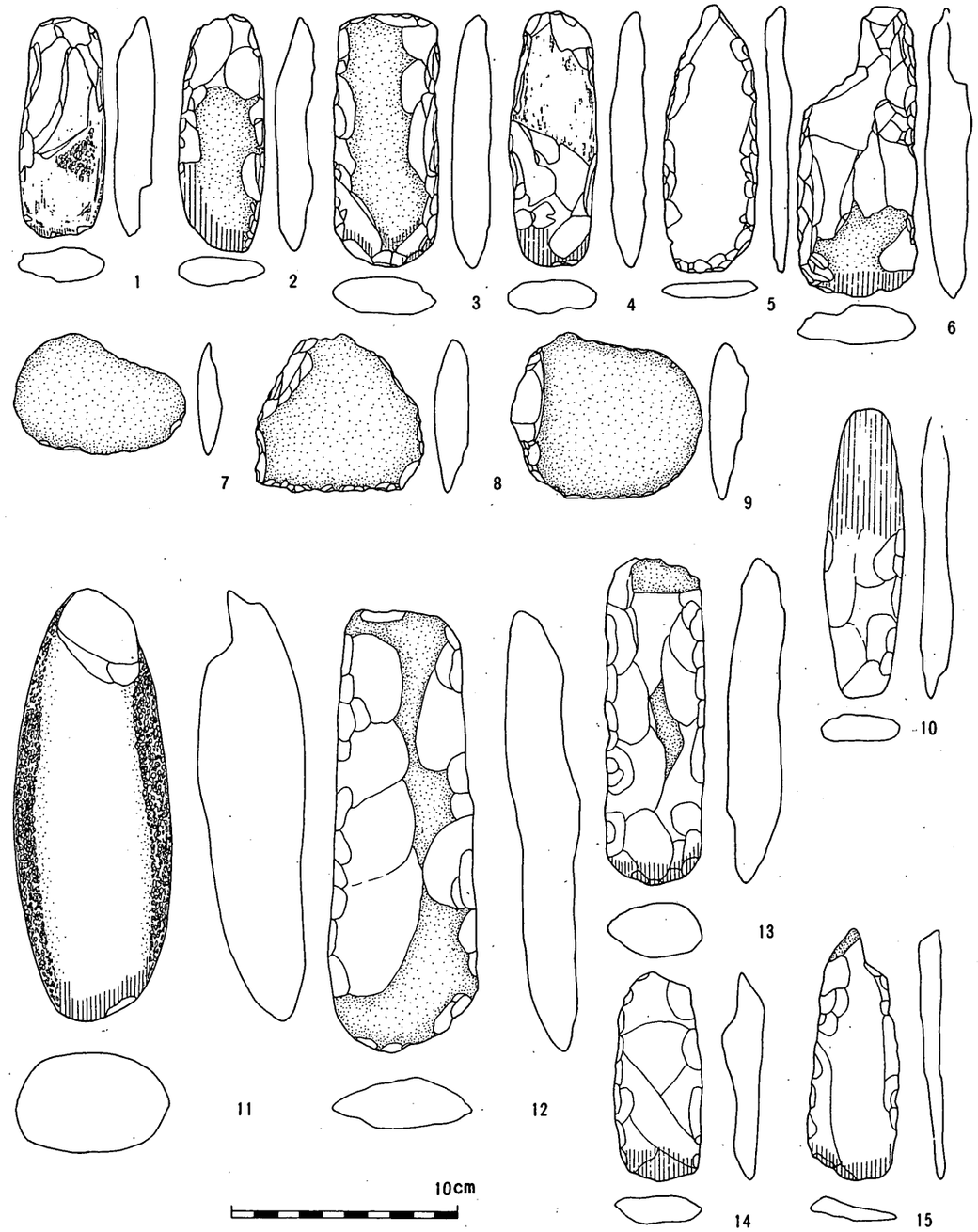
第28図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～6　8号住居址，7～10　9 号住居址，11～21　10号住居址



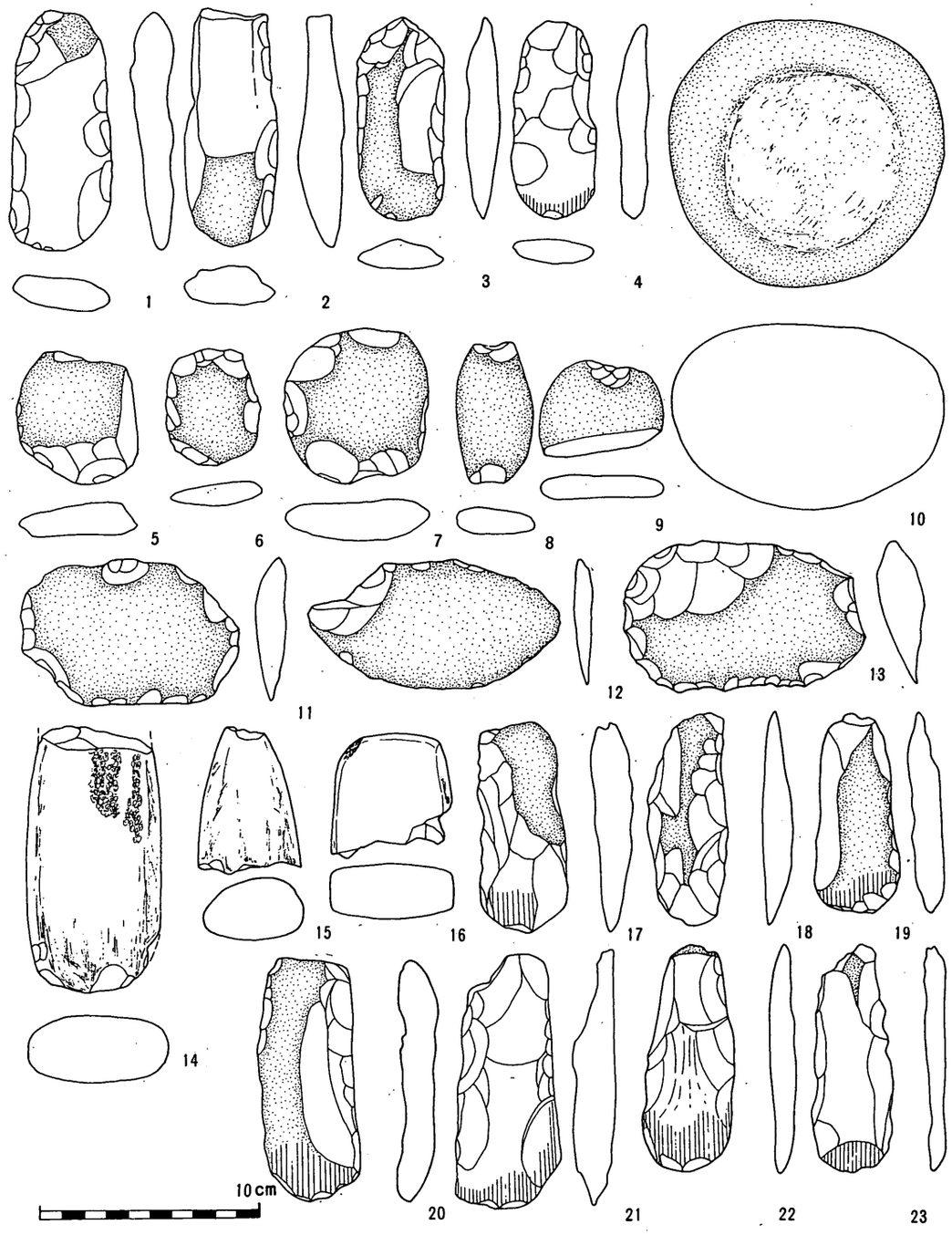
第29図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～6　10号住居址，7～17　11号住居址



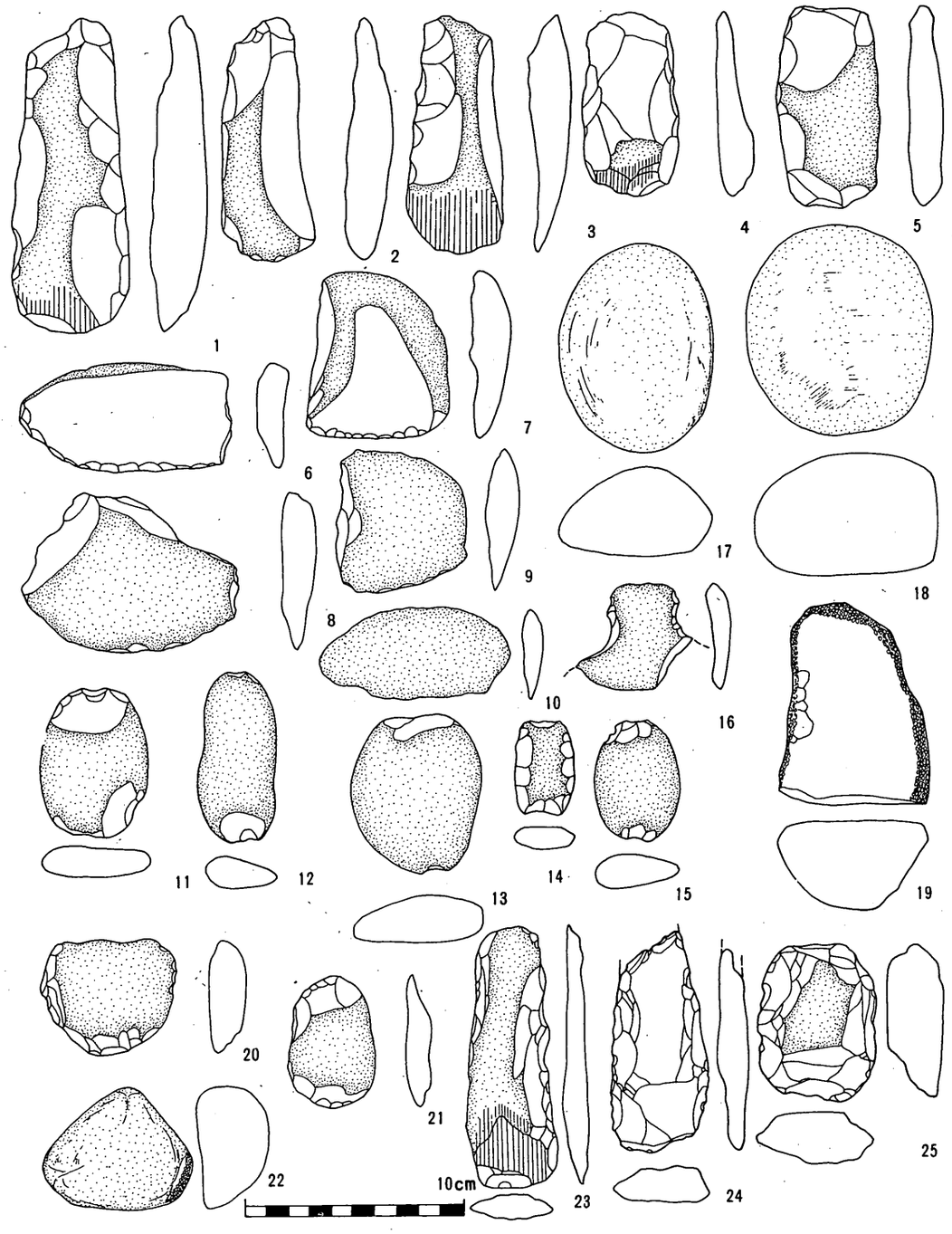
第30図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～25　13号住居址



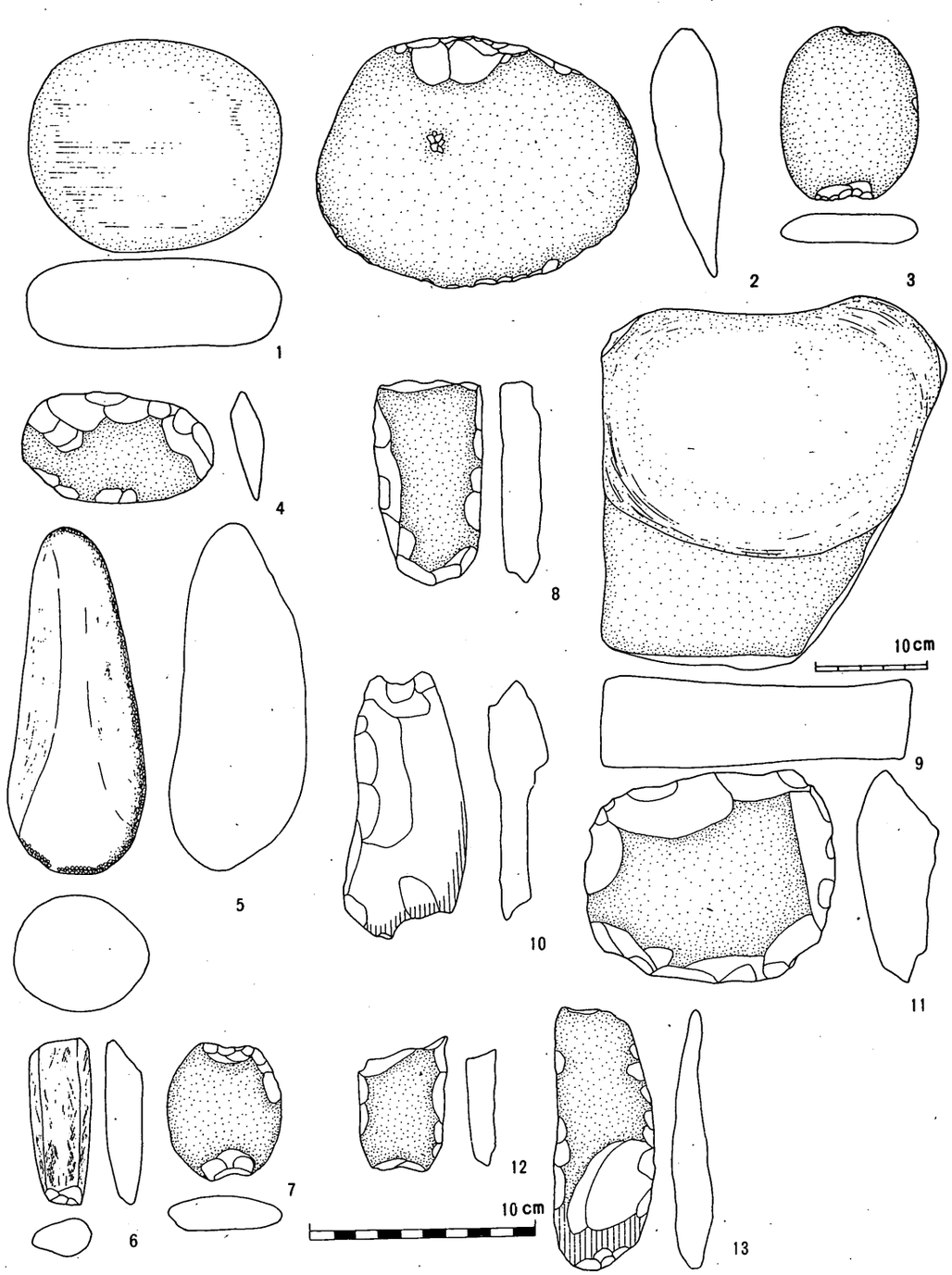
第31図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～9　15号住居址，10～15　16号住居址



第32図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～13　16号住居址，14～23　17号住居址

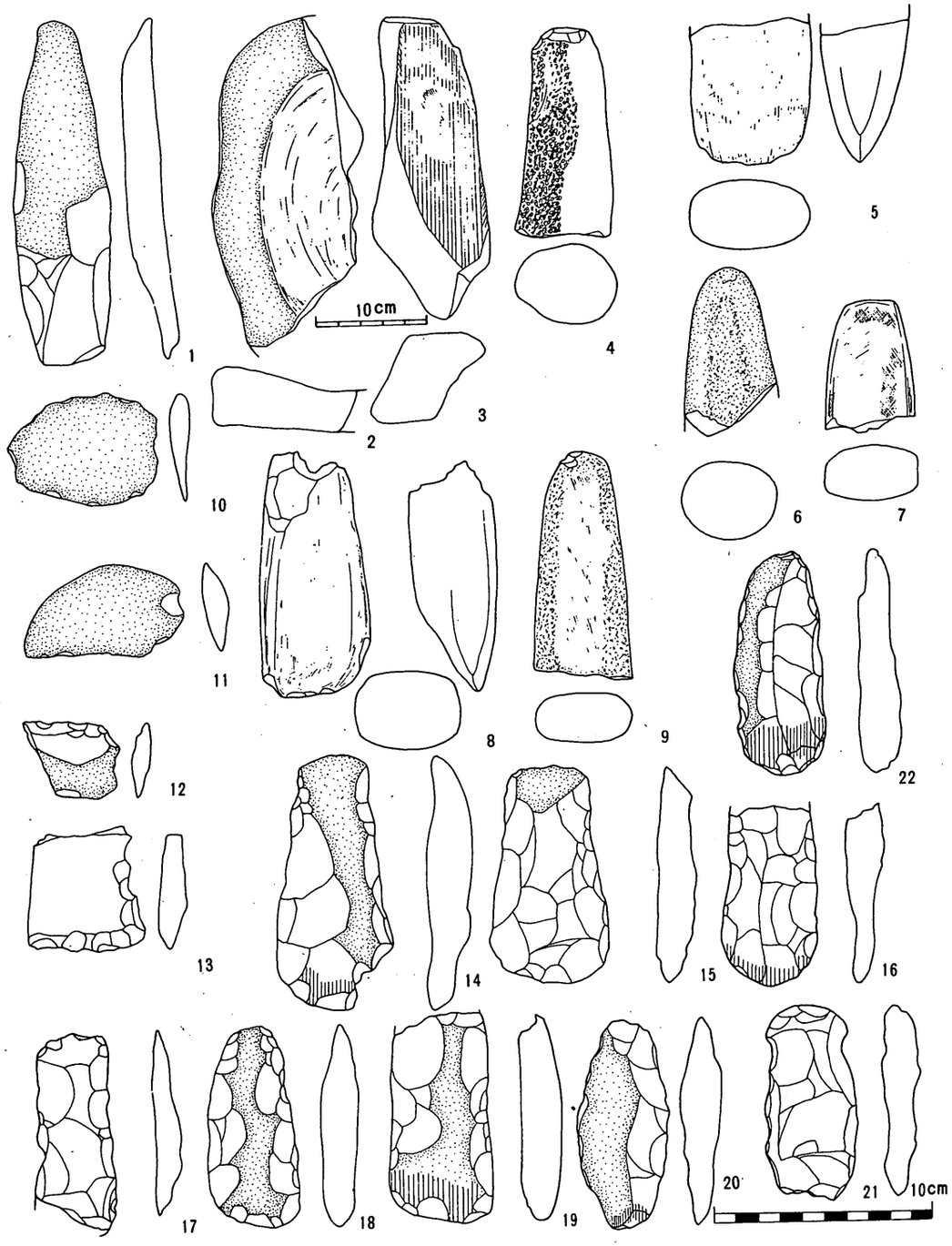


第33図　天伯Ａ遺跡出土石器　1～19　17号住居址，20～25　18号住居址

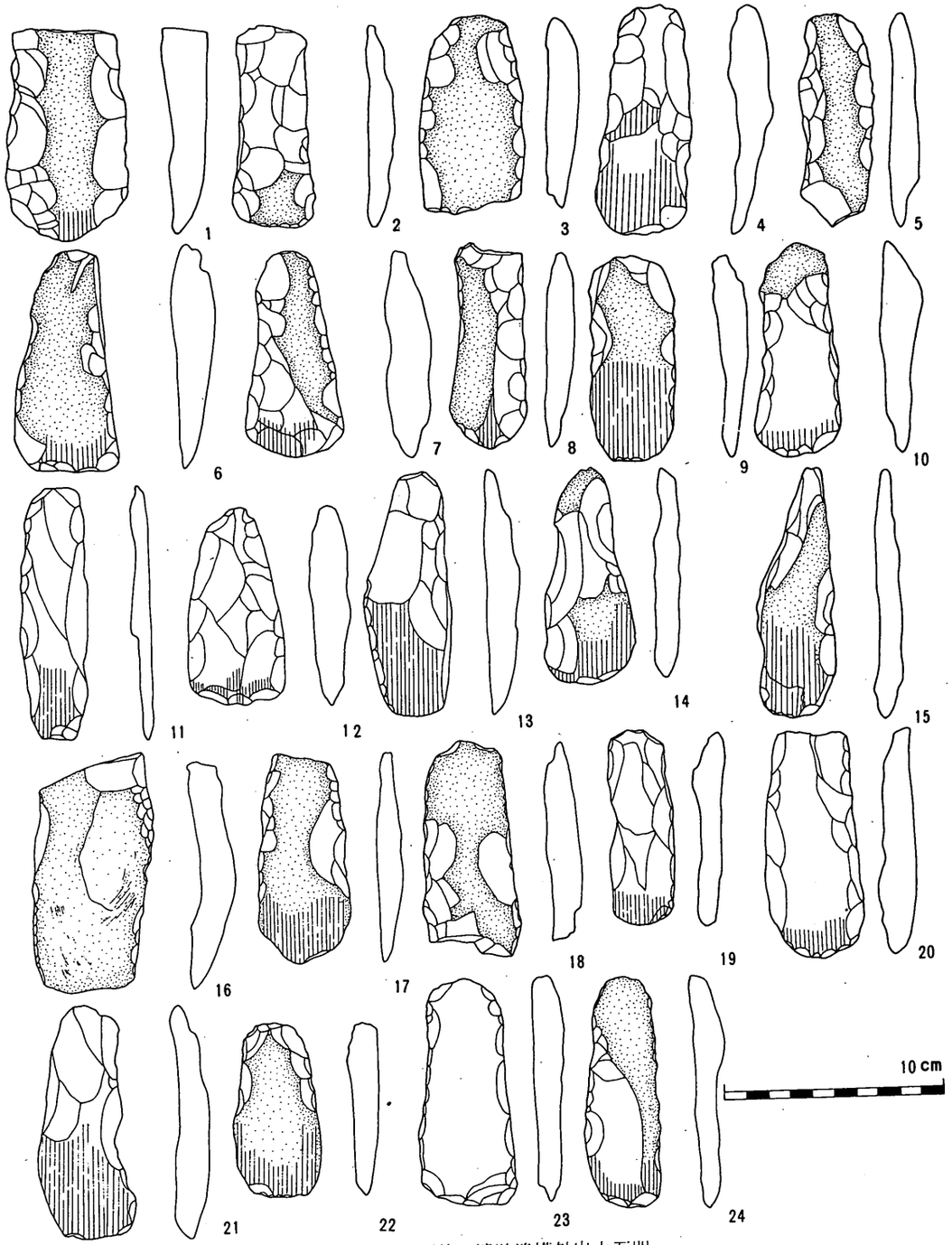


第34図　天伯Ａ遺跡出土石器

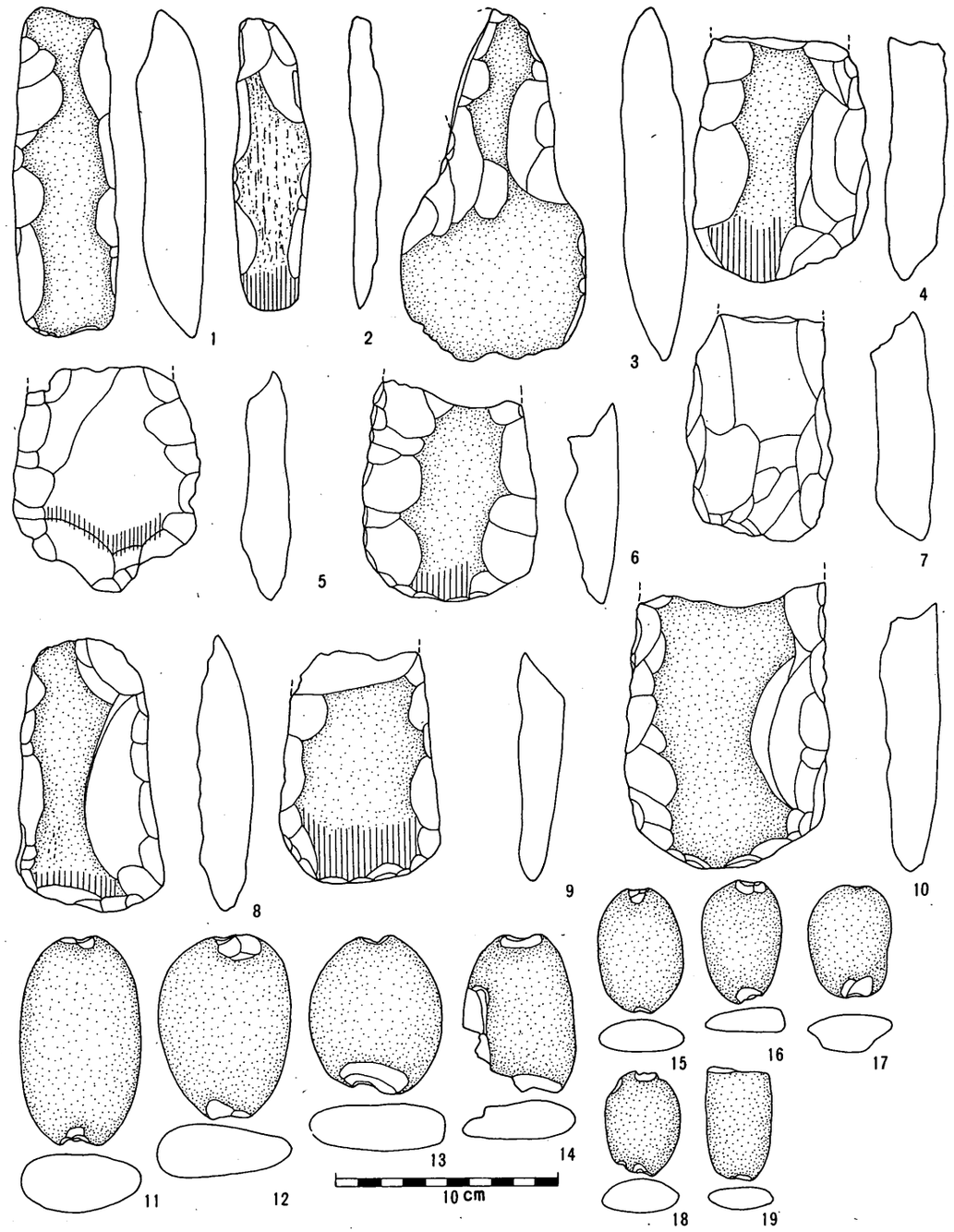
1・2　18号住居址，3　19号住居址，4　土壙1号，5～7　土壙5号，8　土壙6号，9　土壙7号，10～13　土壙8号



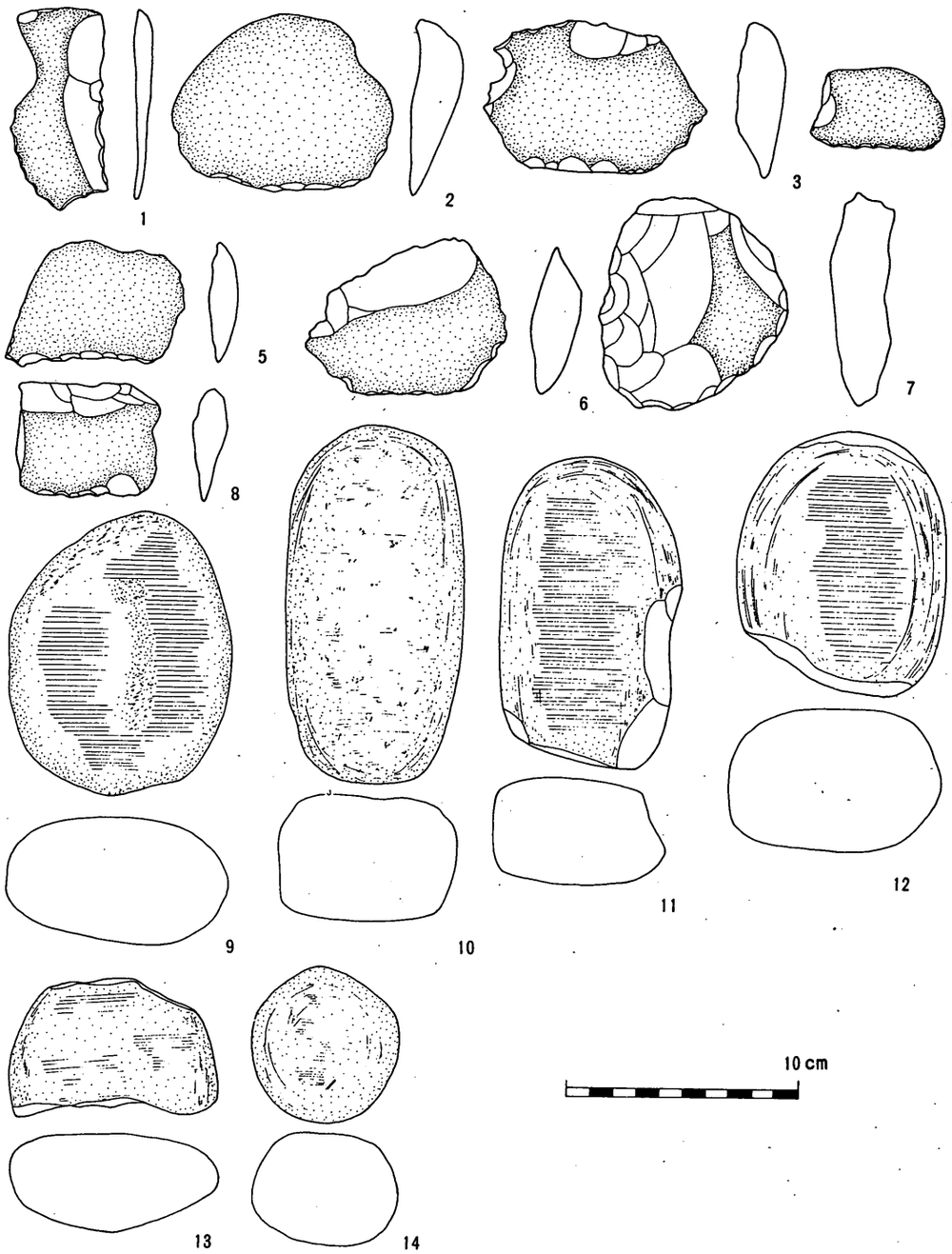
第35図　天伯Ａ遺跡遺構外出土石器



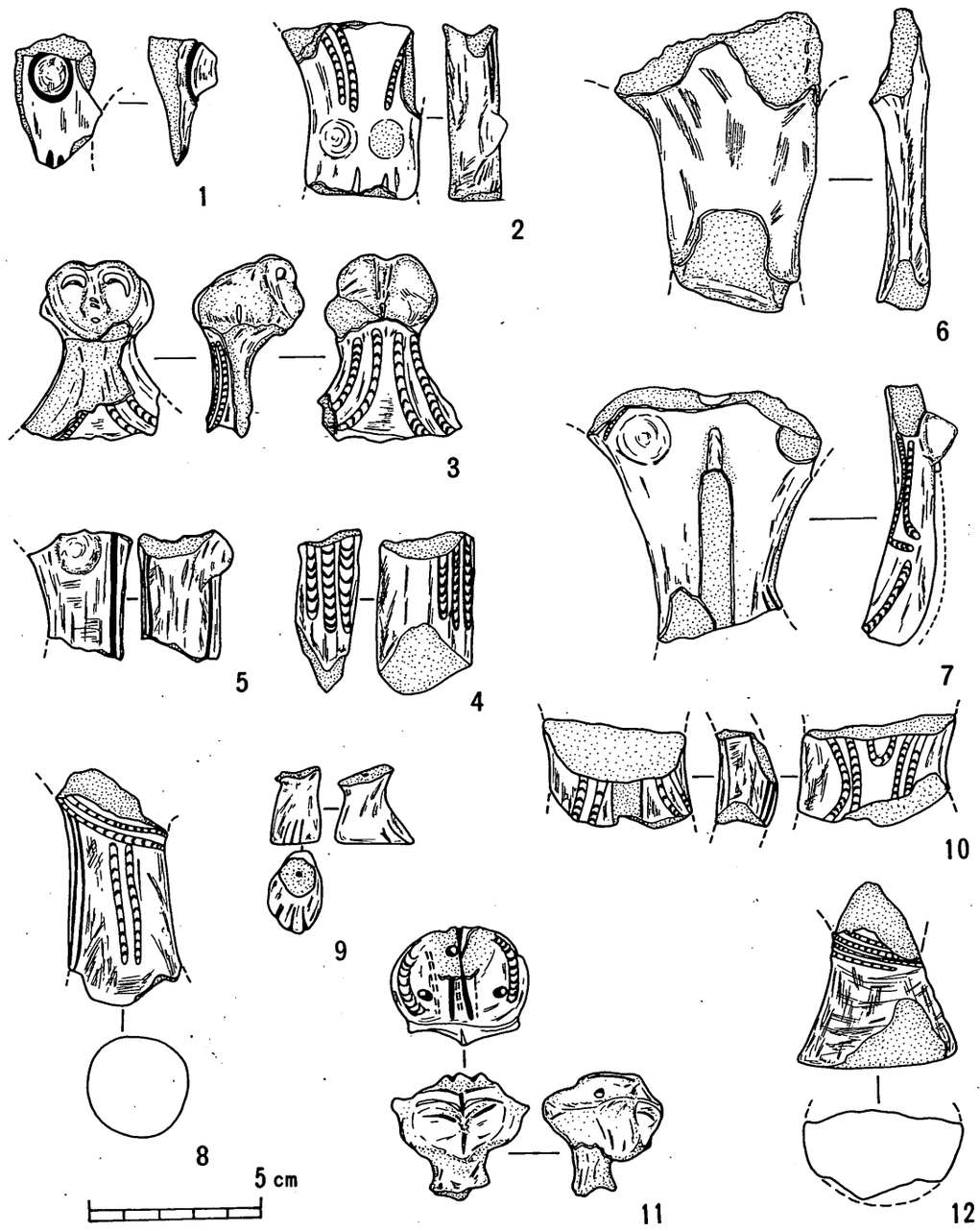
第36図　天伯Ａ遺跡遺構外出土石器



第37図　天伯Ａ遺跡遺構外出土石器

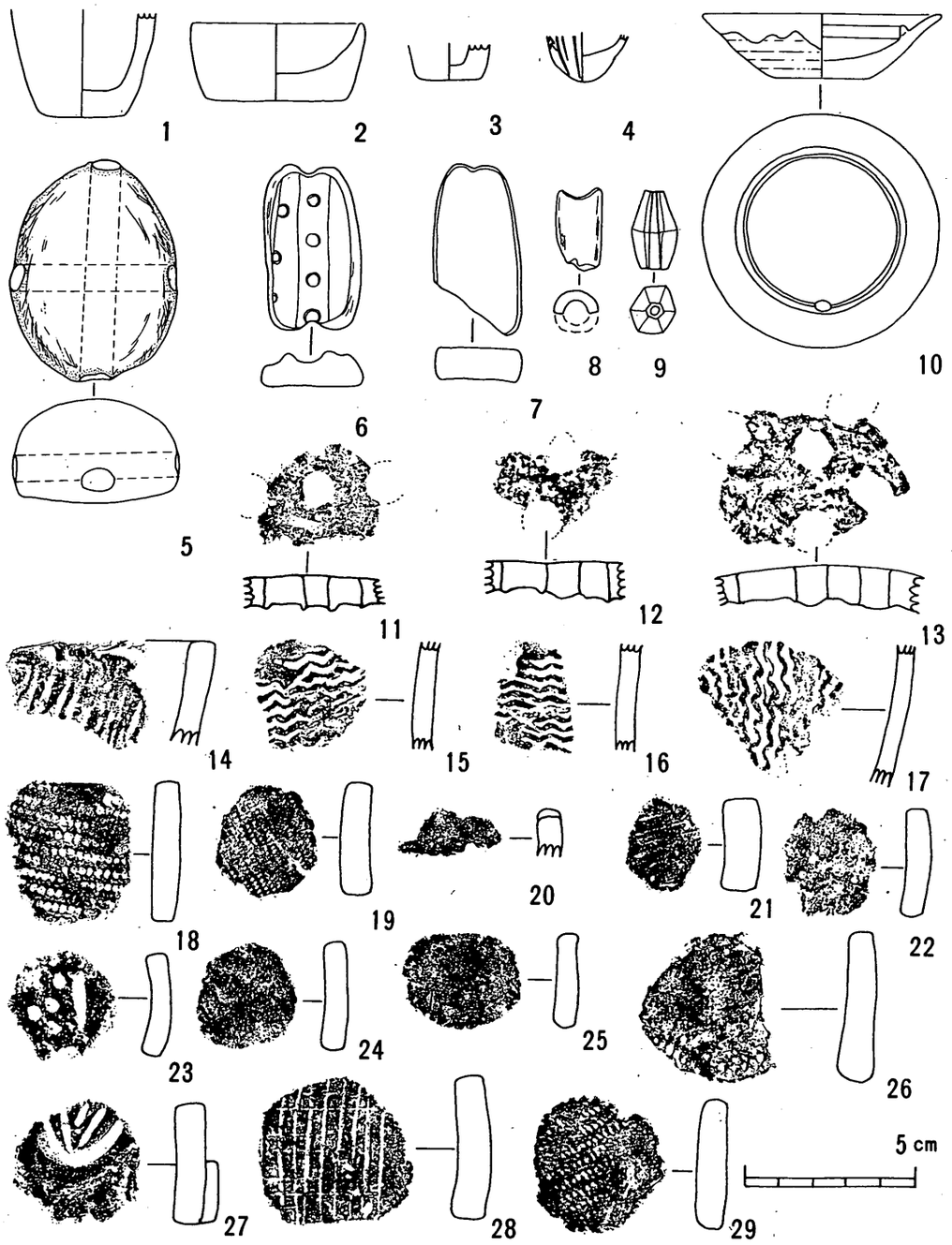


第38図　天伯Ａ遺跡遺構外出土石器



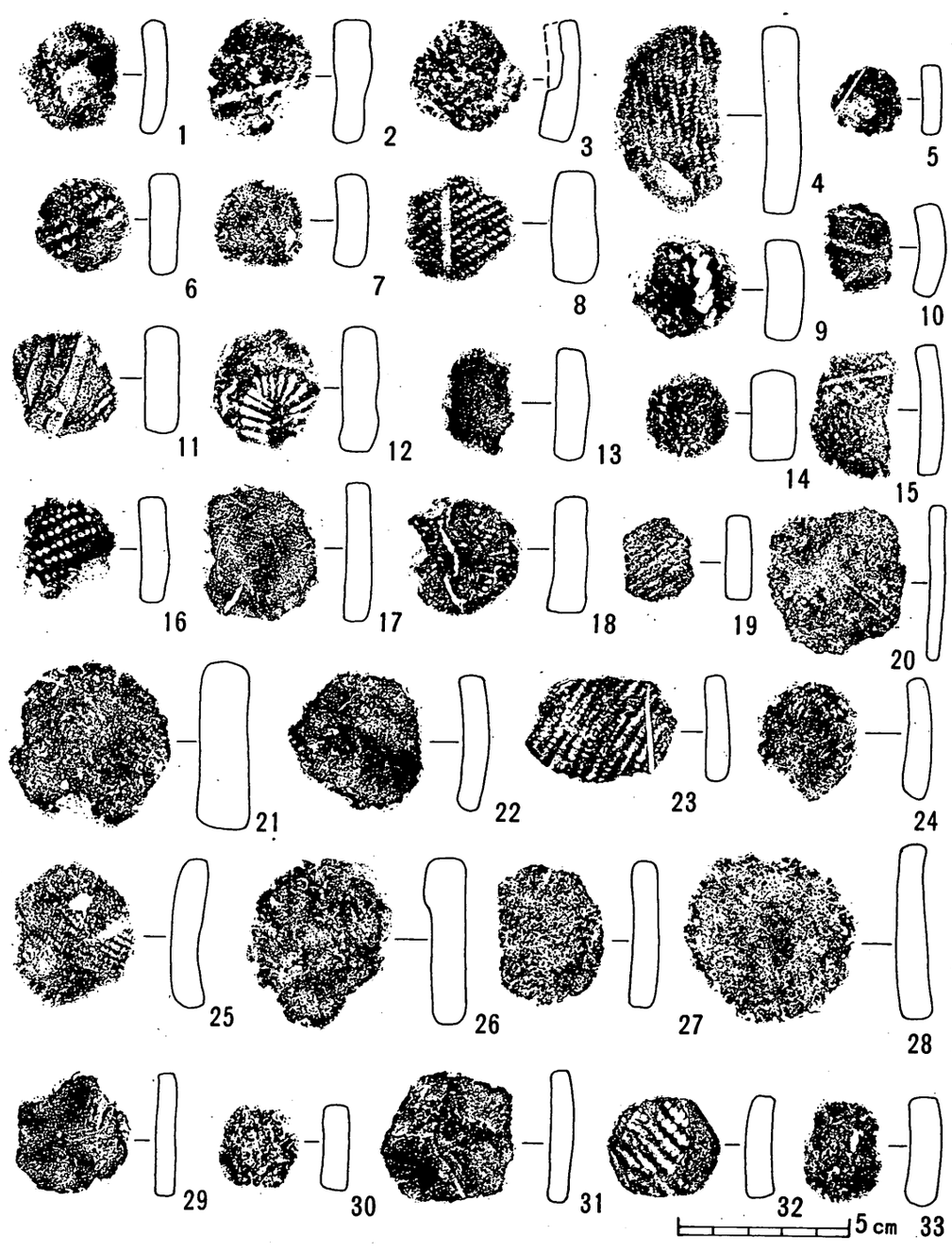
第39図　天伯Ａ遺跡出土土製品

1　4号住居址，2・3　5号住居址，4　7号住居址，5・6　10号住居址，7　13号住居址，
8・9　15号住居址，10～12　遺構外出土



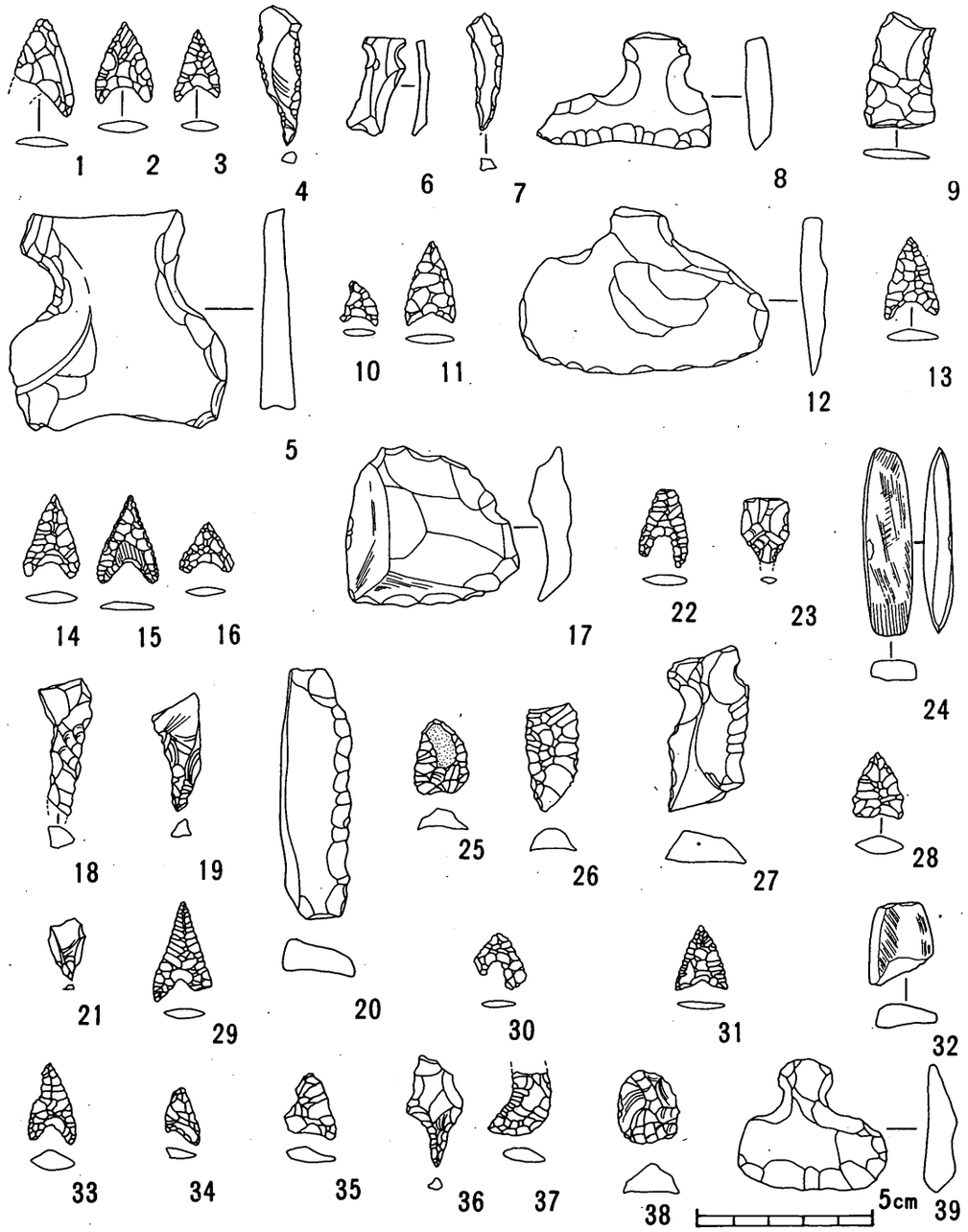
第40図　天伯Ａ遺跡出土土製品；石製品，押型文土器

1～3　17号住居址，4　土壙５号，5　土壙６号，7　16号住居址，8・9　天伯１号墳出土，10　遺構外出土，11・12　６号住居址，13　10号住居址，14～17　押型文土器，18　土壙６号，19　土壙６号，20　土壙18号，21～29　遺構外出土



第41図　天伯Ａ遺跡出土土製円板

1～4　褐色土，5　１住，6　３住，7　５住，8・9　７住，10～13　10住，14～17　11住，8～24　13住，25・26　15住，27～30　16住　31～33　17住



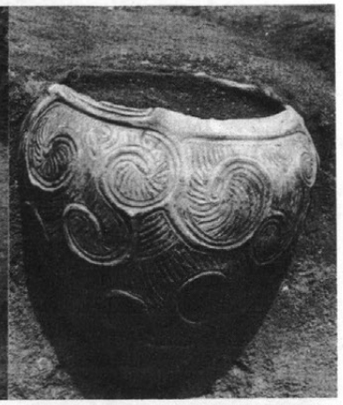
第42図　天伯Ａ遺跡出土石器

1～5　1号住居址，6　2号住居址，7・8　5号住居址，9　8号住居址，10～12　10号住居址，13　11号住居址，14～21　13号住居址，22～24　15号住居址，25～27　1号住居址，28　18号住居址，30～39　遺構外出土

図　版

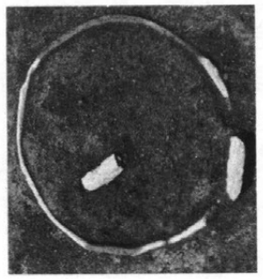
1. 天伯A遺跡遠景（中央の森の近くが遺跡）

2. 1号住居址

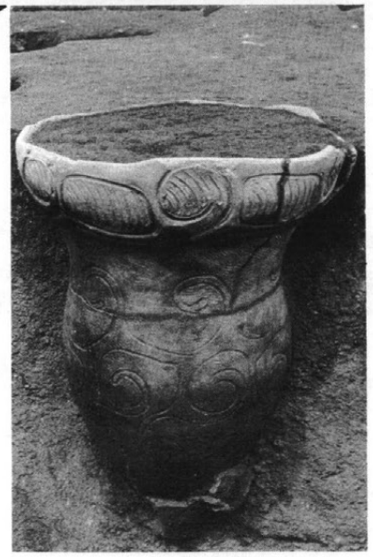


3. 1号埋甕

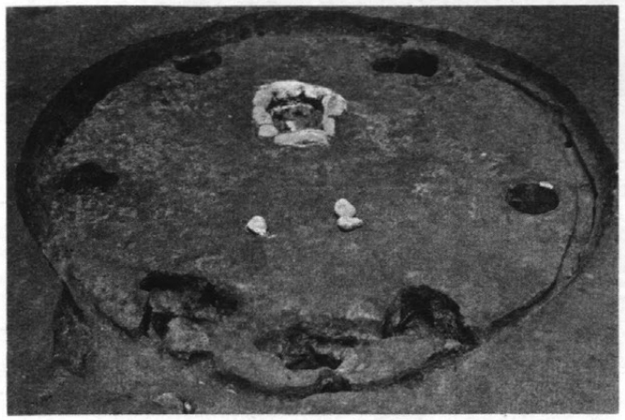
4. 手前2号住、前方3号住居址



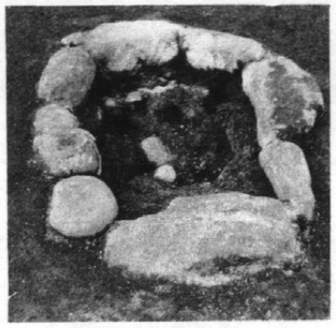
5. 3号住埋甕上面



6. 3号住埋甕



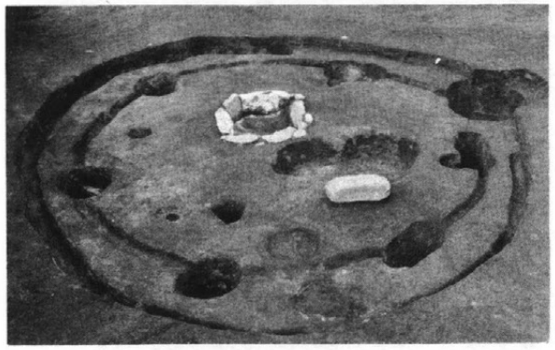
7.　4号住居址



8.　4号住炉址

9.　4号住入口部

10.　4号住土偶



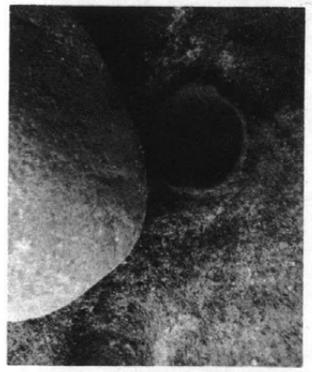
11.　5号住居址

12.　5号住埋甕

13.　5．6．7．8．9．10．11号住居址

14.　6号住炉址

15.　6号住炉石使用の石棒

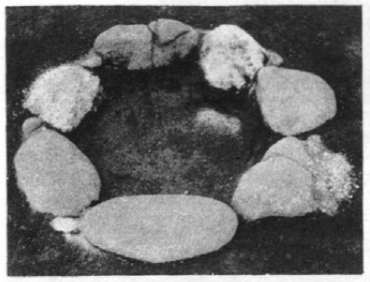


16.　6号住周溝内の底部穿孔土器

17.　6号住埋甕

18.　6号住炉石に接する石皿

図版4　天伯A遺跡7号～10号住居址出土遺物



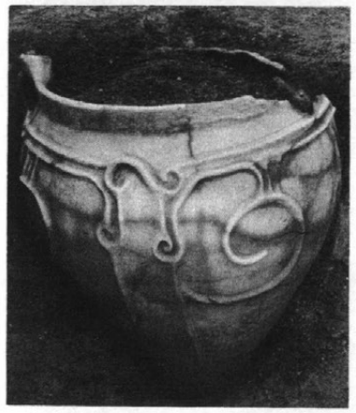
19.　7号住炉址

20.　7号住出土土器

21.　7号住出土土器

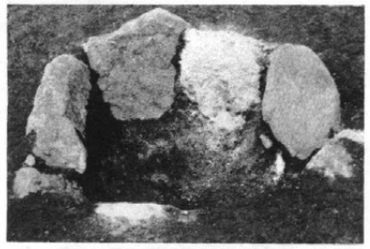
22.　7号住出土土器

23.　9号住上面の集石



25.　9号住埋甕

24.　9号住出土土器



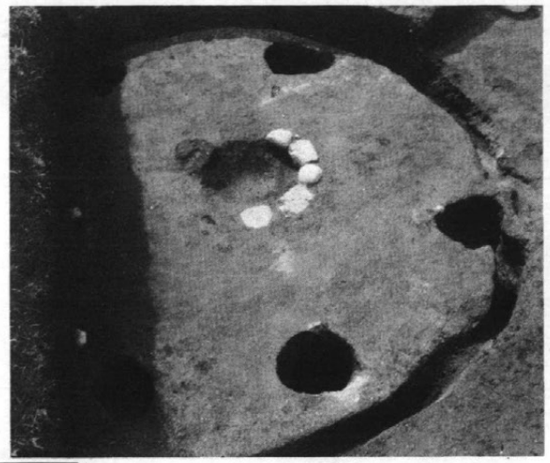
27.　10号住炉址

26.　10号住居址

28.　10号住出土土器

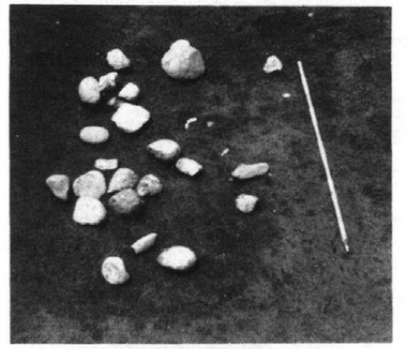
図版5　天伯A遺跡11号～13号住居址

29.　11号住炉址



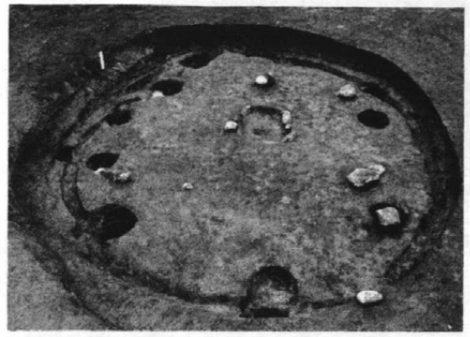
30.　11号住居址

31.　手前12号後方14号住居址



32.　13号住居址上面の集石

33.　13号住居（溝は方形周溝墓西溝）



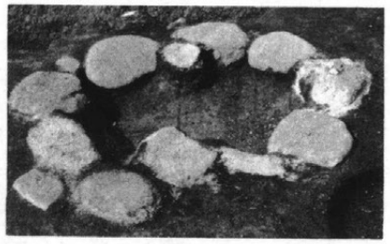
34. 15号住居址

35. 15号住炉址

36. 15号住炉址内部の甕

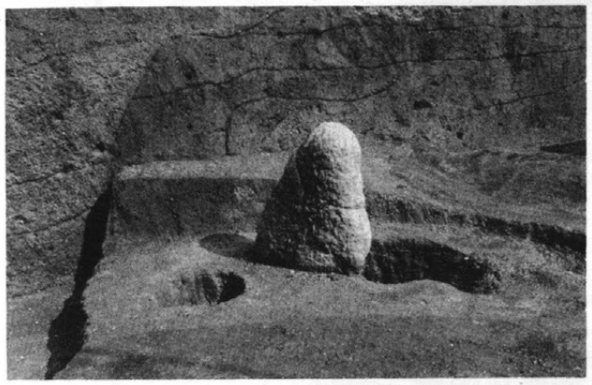
37. 15号住出土土器

38. 16号住居址



39. 16号住炉址

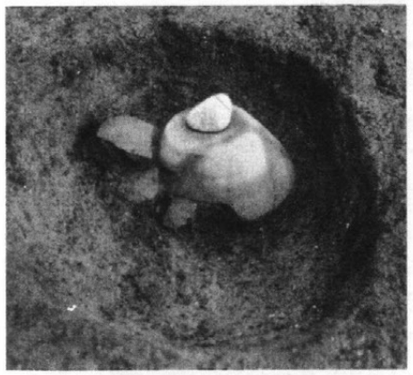
40. 17号住居址の立石
(立石の間は周溝墓主体部)



41. 17号住立石

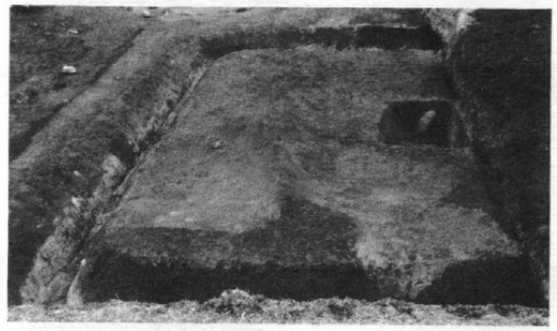
45. 土壙No. 6の土錘

42. 18号住居址



43. 18号住フセガメ

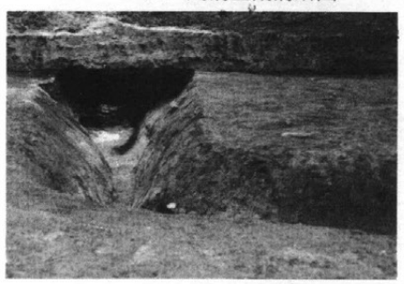
44. 18号住フセガメ



46. 方形周溝墓

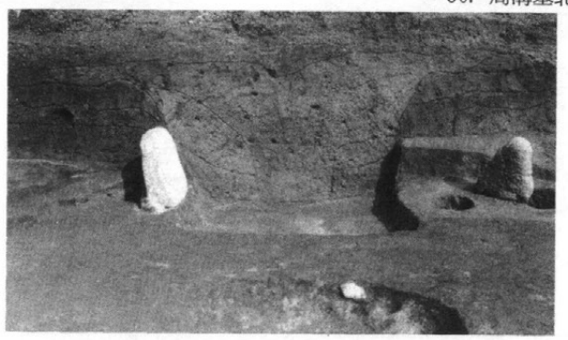
47. 周溝墓南溝断面

48. 周溝墓南溝

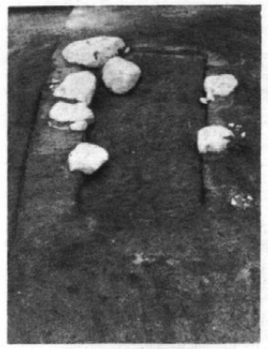


49. 周溝墓北溝

50. 周溝墓北溝断面



51. 周溝墓主体部断面



52. 天伯1号墳残存石室（南より）

53. 天伯1号墳残存石室（北より）

54. 天伯1号墳周溝上の落下葺石

55. 天伯1号墳周溝上の落下葺石

56. 天伯1号墳周溝（東より）

57. 周溝内出土須恵器

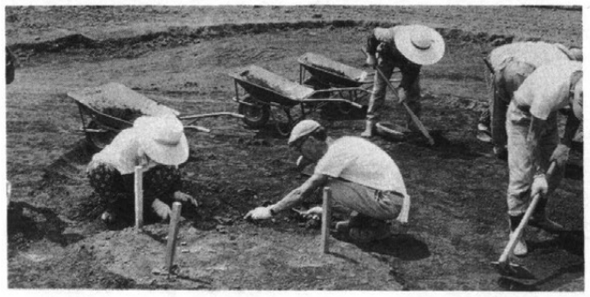
58. 天伯2号墳周溝

59. 天伯A遺跡遺構群（北より）

60. 住居址群

61. スナップNo. 1　いいものを出すぞ!!

62. スナップNo. 2　住居址の調査



63. スナップNo. 3　遺物の取り上げ (右今村正次調査員)

64. スナップNo. 4
町長(左) 教育長(中) 助役(右) の現地視察

65. スナップNo. 5
教育長さんの説明 (左、加藤町長)

下伊那郡鼎町天伯A遺跡

—縄文中期集落址・方形周溝墓・古墳—

昭和50年3月15日　印刷
昭和50年3月20日　発行

発行者　下伊那郡鼎町教育委員会

印刷所　松本市筑摩3270
電算印刷株式会社
電話 (25) 4329 (代表)

〔非売品〕